



神秘学ポエジー 風遊戯
mediopos
115

【神秘学ポエジー～風遊戯 第 235集】 media-poesieヴァージョン

mediopos 2851-2875

2022.9.7～ 2022.10.1

神秘学遊戯団

じぶんを
じぶんで
直接みることはできない

鏡にうつしても
録画しても
直接みていることにはならない

すこし飛躍して考えて
無限遠点のじぶんを
人差し指で指さすことができても
じぶんの後ろから
指さすことしかできない

みているじぶんと
みられているじぶんを
同時に成立させることはできないのだ

じぶんの姿を
みようとするときのように
じぶんの心を
直接みることもできない

じぶんで
じぶんの心をみようととしても
その心はすでに
映された心でしかないからだ

じぶんを考えるじぶんは
じぶんそのものから
つねにズレながら考えている

絵本のなかで
いっしょにいる女の子が

「じぶんのことより
ほかのひとを
みているほうが
きらくなんだよ……！」

といているように

じぶんを見る
合わせ鏡の無限にいるよりも

ひとは
じぶんいがいのひとをみて
ああだこうだと
いっているのが
じぶんをみなくてすむから
らくなのだ

人の振り見て我が振りを直すなら
いいのだけれど
多くのばあい我が振りを直すどころか
じぶんをたなにあげてひとの悪口をいう

じぶんをみるのはつらいからだ
じぶんが逃げているのをわかっている
そんなじぶんを笑えるならいいけれど
じぶんを笑えるにもそれなりの強さがある

■五味太郎「じぶんがみえない！」
(月刊『かがくのとも』2022年10月号 福音館書店 2022/9)

「きみは ぼくが みえる！」

「それなのに
ぼくは ぼくが みえない!!
これは
もんだいだ!!!」

「ぼくは
じぶんで
じぶんを
みたいんだ！」

「じぶんのことより
ほかのひとを
みているほうが
きらくなんだよ……！」

(「かがくのとも」～五味太郎「キリがない……」より)

「子どもの頃からずっと同じような！この性格、うん、自分のことを見たくてたまらないんえしょうね、客観的に。いや、超主観的にもかもしれませんけれど、でもそれは叶わない宿命にあることはわかっているので、やや強引に映像化したる自己実況中継なんてやるのかもしれませんが。で、よせばいいのに、そのあたりのことを絵本に描いてみたくってこの作品に至るわけですが、その過程でもやはり「むずかしいテーマに果敢に挑戦しておりませう。でも確かにむずかしい！」



■五味太郎「じぶんがみえない！」
(月刊『かがくのとも』2022年10月号 福音館書店 2022/9)

土を育て生態系を回復させる
リジェネラティブ（環境再生型）農業としての
「奇跡のカーボン・ファーム」には
5つの原則があるという

- 「土をかき乱さない」
- 「土を覆う」
- 「多様性を高める」
- 「土のなかに「生きた根」を保つ」
- 「動物（虫・鳥・ミミズ）を組み込む」

これら5つの原則は
おそらく農業だけの原則ではない

本書からは大きくはずれるが
ひとの魂を育てる原則として
あてはめると次のようになるだろうか

魂を外からかき乱さない
（教育されるのではなく自己教育し）
（魂がみずから育つようにする）

魂をポエジーで覆う
（即物的機械的な思考を去り）
（魂を育てる想像力を高める）

多様性を高める
（狭い領域に偏ることなく）
（魂の生態系を豊かにする）

魂のなかに「生きた根」を保つ
（死んだ思考で過去に生きるのではなく）
（ハートの思考で精神性を広げる）

自然を組み込む
（自然へとひらかれたからだで）
（四大を解放し得る魂を育てる）

とでもなるだろうか

逆にいえば
こうした5つの原則を逆にしたのが
現代の病であるともいえる
たとえばこんな

偏差値教育
科学信仰
専門化
唯物論
人間機械化

魂の生態系の破壊は進むばかりだ



■ゲイブ・ブラウン（服部 雄一郎訳）
『土を育てる／自然をよみがえらせる土壌革命』
（NHK出版 2022/5）

■ゲイブ・ブラウン（服部 雄一郎訳）

『土を育てる／自然をよみがえらせる土壌革命』
(NHK出版 2022/5)

「わが農場のストーリー、それは「工業型農業を続けて土地のやせた低収益の農家を、いかに健全で収益力のある農家に再生させたか」。その道のりは、試行錯誤と実験の連続。途中、数々の失敗があり、いくつかの成功があった。師となって導いてくれた人もたくさんいた。ほかの農家たち、研究者、環境活動家、家族。でも、いちばんの師は母なる自然だ。

日々の仕事のなかでも、「土を育て、守り続ける」という目標のもと、ほぼすべての意思決定を行っている。よりどころとしているのは5つの原則。数十億年の時を経て、自然が作り出してきた原則だ。太陽が照り、植物が育つかぎり、地球上どんな場所でも変わらない。世界各地の農場や牧場が、この原則を生かして、水分の行き渡る養分たっぷりのふかふかの土をつくり出している。」

「第1の原則 土をかき乱さない

土を機械的、化学的、物理的になるべくかき乱さない。
耕すと土壌の構造が壊れてしまう。そして、肥沃な土をつくり出す土壌生物たちの“棲み処、をわざわざ引っかけ回すことになる。団粒構造や孔隙（水が染み込む隙間）も土壌の構成要素。耕してしまうと土壌流出が起こり、貴重な資源がむだになる。化学肥料、除草剤、農薬、殺菌剤なども、土壌の生態系に悪影響を及ぼす。」

「第2の原則 土を覆う

土はつねに覆う。
これは土の健康を立て直すうえで、きわめて重要なステップだ。むき出しの土は正常ではない。自然はいつだって土を覆い隠そうとする。天然の“よるい、をかけてやることで、土は風や水による流出から守られ、また、それが土壌生物のエサや棲み処にもなる。水分の蒸発や雑草の発想も抑えられる。」

「第3の原則 多様性を高める

植物と動物の多様性を確保する。
自然界のいったいどこに単一品種だけが生えている場所があるだろうか。もちろん人間が植えた場所だけだ。野生の大草原を見渡したとき、いつも最初に気づかされるのは、その信じられないほどの多様性——やわらかい草、背の高い草、つる植物、低木。これらがみな生き生きと調和して繁っている。ひとつひとつの種が示すさまを見てほしい。根が浅いものもあり、深いものもあり、ひげ根あり、直根あり。炭素固定量の多いもの、少ないもの。窒素を固定するマメ科。これらひとつひとつが土の健康を保つうえでひと役買っている。多様性によって生態系の機能は強化される。」

「第4の原則 土のなかに「生きた根」を保つ

年間を通し、土のなかにできるだけ長く「生きた根」を保つ。
春、散歩をすると、最後の雪をかき分けて緑の植物が顔を出している。根が息づいているのだ。これらの生きた根は、土壌生物のエサとなる炭素を供給している。そして、土壌生物は植物のエサとなる養分の循環をつくり出す。」

「第5の原則 動物を組み込む

自然は動物なしには成り立たない——ごく単純な事実だ。
農場に家畜を組み込むことで多くのメリットが得られる。とくに、動物がしょくぶつをたべルことで植物が刺激され、土により多くの炭素が送り込まれる。つまり、食べさせることで養分の循環がうながされるのだ。また、大気からより多くの炭素を吸収し、地中に固定することになるので、気候変動の面でもメリットは大きい。さらに、生態系が健全に機能する農場を望むなら、家畜だけでなく、花粉を運ぶ虫や鳥、害虫を食べてくれる捕食昆虫、土を耕すミミズ、そしてあらゆる微生物にも棲み処を提供し、生態系を支えてもらう必要がある。」

「この本は、「工業型の農業」から「自然に近い農業」へ、うちの農場がいかにして変身したかを伝えるために書いた。くれぐれmの、「あなたの農場をどうするか」、あるいは「どうすべきか」を伝える本ではない。それを決められるのはあなただけだ。

私にとって、農業は30年以上にわたる挑戦だった。しかも、一度は学んだことをすべて捨てて、ふたたび学びなおすということまでした。子の本に提示した基本的な考えが、明確な説得力をもってみなさんに伝わることを願っている。いちばん大切なのは、私たちひとりひとりが——プロの農家であれ、家庭菜園の愛好者であれ——自然の偉大な力を生かして——、栄養たっぷりの食べ物をつくり出すこと。しかも、そのなかで自然を再生し、子どもや孫たちが健康に暮らせる未来を守ること。私の挑戦は、本書に示した5つの原則の実践とともにあり、なおかつ、次のような個人的な原則とともに進む道のりでもあった。」

- 「1. 神を信じる」
- 「2. 先入観を持たない」
- 「3. 観察する」
- 「4. 失敗を恐れない」
- 「5. 取り巻く背景を理解する」
- 「6. 行動を起こす」

タルコフスキーが二十年近くにわたり
最晩年まで書きつづけてきた思索の軌跡が
あらためて文庫化されている

最初にドイツ語で一九八五年に出版されたが
それは『サクリファイス』撮影開始前のこと
(タルコフスキーは一九八六年に五四歳で亡くなっている)

その後『サクリファイス』の章を加えた増補版が
日本語に訳されたのが一九八八年だが
こうして三十四年後に文庫化される際には
最晩年に加筆・修正・削除された内容が反映されている
(今回文庫化されてはじめて読む機会をもったので
その変更部分についてはよくわからないけれど)

タルコフスキーが今生きていたら九〇歳
タルコフスキーの亡くなったときは
まだソビエト連邦は崩壊しておらず
ベルリンの壁の存在していたが
その後の時代の変化を生きていたとしたら
どんな映像を創りだしただろうと想像してしまう

本書『映像のポエジア ―刻印された時間』には
とくにその終章にまるで世紀末の世界が
精神を失った文明の終焉のようなイメージで語られ
それゆえに芸術の重要性が叫びのように詠われている

「芸術は、精神的な意味のなかで
溺れないための人類の本能として、存在しているのだ。
芸術化は、人類の精神的本能である。」と

タルコフスキーは二〇世紀を生きたが
時代はいまや二一世紀も二〇年代
いわゆる世紀末をはるかに超え
二一世紀も二〇年代になってからの世界を
二〇世紀末から見るならばどんな時代に見えるだろう

おそらくその数十年は
まさに文明の崩壊に向け
雪崩のように精神を失っていくように
見えなしないだろうか

理想への情熱と郷愁をもち
芸術創造の意味を追求しつづけたタルコフスキーに
「映像のポエジア」を見いだすことができただろうか

さてよく自身もまた
三十数年前のじぶんから現代を見渡してみる
いったい何が見えてくるだろうか



■アンドレイ・タルコフスキー (鴻英良訳)
『映像のポエジア ―刻印された時間』
(ちくま学芸文庫 筑摩書房 2022/7)

■アンドレイ・タルコフスキー（鴻 英良訳）
『映像のポエジア ――刻印された時間』
（ちくま学芸文庫 筑摩書房 2022/7）

（「終章」より）

「芸術は人間にできる最良のこと、つまり、期待、信仰、愛、美、祈り……が実在しているということを確信させる。あるいは、人間が夢見ているもの、期待しているものの存在を確信させる。泳ぐことのできない者が、水のなかに投げ込まれたとき、彼自身ではなく彼のからだが、本能的な動きを始めて、助かるうとあがく。同じように芸術も、あたかも水のなかに投げ込まれた人間の体のように存在している。つまり芸術は、精神的な意味のなかで溺れないための人類の本能として、存在しているのだ。芸術化は、人類の精神的本能である。そして、詩人自身はしばしば罪深いにもかかわらず、創造には永遠なるもの、崇高なるもの、至高のものにたいする人間の志向がそのなかに表明されている。」

「なぜ、あとを振りかえるとき、われわれは人類の道程に、歴史の大変動、カタストロフィを目にするのか、崩壊した文明の痕跡を発見するのか？ 実際、これらの文明になにが起こったのか？ なぜこれらの文明には息吹が、生への意志が、精神的力が不足していたのだろうか？ こうしたすべてが純粋に物質的な欠乏のために起こったと信じることが果たしてできるだろうか？ 問題は物質的欠乏だけにあったという前提は突飛すぎないだろうか？ 歴史過程の精神的側面をまったく考慮しなかったために、われわれはふたたび自分たちの文明の縁に立っている、と私は確信している。人類をとらえた多くの不幸の原因はわれわれが容赦しがたいぐらい、罪深くて、絶望的なほどに物質的になったからなのだとすることをわれわれは認めようとしない。つまり、自分を学問の支持者と考え、いわゆるわれわれの学問的な目論見の、いわば駄目を押そうとして、われわれは、分かつことのできようはずのない、人間の発達の唯一のプロセスを縦に分割し、その一方の、目に見えるばねを明らかにし、それをすべての事柄の唯一の原因とみなし、そのばねを過去の誤りを説明するために使うばかりではなく、われわれの未来の青写真を作るためにも使っているのだ。おそらくこの文明の崩壊の意味は、〈歴史〉の忍耐を示すことであり、〈人間〉から真の選択を期待することである。選択さえ正しければ、〈歴史〉は袋小路に追いこまれていくことはないであろう。新しい試みがかもとうまく行くだろうと期待して、失敗に終わった試みを、その長い繋がりのなかから次々と抹殺したりもしまい。この意味で、歴史はなにも教えないし、人類は歴史の経験に学ばないという広く流布されている意見に同意しないわけにはいかない。要するに、あらゆる文明のカタストロフィは、その文明が誤っていたということを意味しているのである、人間が改めて自分の道をたどり始めることを強いられているのは、それは以前の人間の道がすべて精神的に未完成だったからだ。

芸術は、この意味で、終点に辿りついた完成したプロセスのイメージなのである。それは、長い、おそらく無限に続く歴史の過程を通らずに、（ただイメージの意味において）絶対的な真理を把握した状態を模倣することなのである。

たとえばヴェーダのような世界観を信じ、その世界観にみずからを委ねることで、安らいでみたくなることがある。東洋は西洋より真理に近いところにいた。だが、西洋が生にたいする物質的な要求によって東洋を食いつくしてしまった。

東洋音楽と西洋音楽を比較してみるがいい。西洋は叫ぶ、――これは私だ！ 私を見よ！ 私がどれほど苦しんでいるか、どれほど愛しているか聞いてほしい！ 私はなんと不幸なのだろう、なんと幸福なのだろう！ 私だ！ 私のものだ！ 私に！ 私を！ と。

東洋は自分自身について一言もいわない！ 神のなかに、自然のなかに、時間のなかにすべてを見出している！ タオの音楽。キリスト生誕より六百年前の中国。

しかし、なぜ偉大なる理念は勝利することなく、滅びたのか？ この理念を基礎にして出来上がった文明は、なぜ歴史過程のひとつの完成形態としてわれわれの時代まで生きのびることがなかったのか？ その文明を取り巻く物質的な世界と出会ったのだろうか。個人が社会と出会ったように、この文明は他の文明と出会ったのだろうか。おそらく物質的世界、〈進歩〉、テクノロジーとの戦いだけでなく、それらのものとの対比がかれらを破滅させたのだ。この文明は真の知識の最終到達点、地の塩の塩（エリート中のエリート）であった。東洋の論理からすれば、戦いはその本性上、罪深いものであったのだ。

問題のすべてはわれわれが想像上の世界に生きており、われわれ自身がこの世界を創造しているということなのだ。われわれ自身、世界の欠陥にかかわっているが、その利点にかかわることもできたはずなのである。」

（「文庫版訳者あとがき」より）

「およそ二十年近くにわたって書きつづられてきたタルコフスキーの映像論が最初に一冊の本になってドイツ語で出版されたのは一九八五年、印刷にまわされたのは一九八四年、『サクリファイス』撮影開始前のことであつた。そのとき使われたロシア語タイプ原稿に『サクリファイス』の章を加えた改訂・増補版のコピーをもらってそれを日本語に訳す機会をもらったのはタルコフスキーの死の直後だった。そうした約三十四年前の一九八八年一月に、キネマ旬報社から出版された『映像のポエジア――約束された時間』が、文庫本になることになった。

だが、文庫版の出版にあたって著作権者（タルコフスキーの子息）から改めて送られてきたロシア語テキストは、私がむかし翻訳したテキストとまったく同じというのではなく、タルコフスキーが自らの死を前にして、さまざまな思いを胸に秘めながら、加筆・修正、削除などを施していたものらしく、微妙な違いを見せてくるのである。それらの違いを目にしながら、私は時間の流れのなかで蠢く思考の流れとともに、歴史というものを感じるようになった。その変更は私に多くのものを考えさせてくれた。

たとえば、「われわれを来るべき二十一世紀と区別する時間の隔たりは十年に満たない」が、「十五年を切った」と変わっている。つまり、この箇所の最初の草稿が書かれてから八十六年まえに五年近くが経っているということなのだろう。そのことを書き換えることによって、この思索が二十世紀の終わりを意識して書かれているということをより浮き彫りにするのである。そして、そのことによって、そもそも映画という表現手段が、十九世紀の終わりから二十世紀のはじまりにかけて誕生した、二十世紀とほぼ同い年の芸術であり、この生まれたばかりの若い未熟な芸術の、タルコフスキー言うところの未完成性とその可能性について具体的に考えようとすることこそがこの映像論の核心的な目論見なのだとということがより鮮明に意識させられるのである。」

【目次】

序章

第一章 はじまり

第二章 芸術―理想への郷愁

第三章 刻印された時間

第四章 使命と宿命

第五章 映像について

第六章 作家は観客を探究する

第七章 芸術家の責任

第八章 『ノスタルジア』のあとで

第九章 『サクリファイス』

終章

訳者あとがき

文庫版訳者あとがき

年譜・フィルモグラフィ

ヴァーチャルとリアルを
混同してしまうように
芸術のなかの表現と
現実のなかの表現を混同してしまうと
芸術の意味はなくなってしまう

「善や聖の表現自体が善や聖ではないのと同じ」ように
「悪の表現自体は悪ではない」（エンデ）

かつて伊藤整は

「人間のエゴを醜悪な現実のままに描くという点で
近代文学は古典に及ばないと指摘」しているように

「人間のエゴの醜さを、古典は剥き出しに描くが、
近代文学では倫理観が働いて、
人間は醜悪であっても
美しい反面も持つと描かざるをえな」くなっている

キレイゴトの世界しか許されないということだ
そしてキレイゴトを生きる魂は
みずからのエゴの醜さに気づけない

二十一世紀の今では

「読者に不快感を与えてはならぬ」らず
「作者自身は正しい倫理観を持っているのだと
どこかで示さねばならぬ」くさえなっている

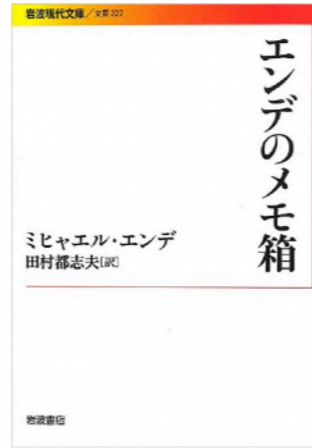
現実に倫理的であるならば
作品も倫理的でなければならないとされ
芸術が現実と混同され
現実に引きずり降ろされているのである

しかしそうすることでむしろ
「芸術やポエジーがあたえる効果は生の現実から遠ざかり、
生の現実にはさらに架空のもの」となってしまう

皆川博子も「現代の人物を差別語で呼ぶのは当然不可ですが、
過去の時代において明らかに存在したものを非在にしたら、
その時代の上澄みしか書けません」という
上澄みだけの世界は根っこがない空虚な世界である

人間からエンデのいうような
ファンタジーの世界が失われてしまえば
人間は現実を豊かに育てる大地を失い
不毛を生きる魂となってしまうことになる

芸術における悪の表現が現実のレベルで排されるとき
みずからの内なる悪を見ないがゆえに
むしろ現実世界における悪を
現実化してしまうことにもなるのである



- 皆川博子「辺境図書館（31）」
（『群像 2022年 10月号』講談社 2022/9 所収）
- 山本幸司『狡智の文化史／人はなぜ騙すのか』
（岩波現代文庫 岩波書店 2022/6）
- ミヒヤエル・エンデ（田村都志夫訳）
『エンデのメモ箱』
（岩波現代文庫 岩波書店 2013/5）

- 皆川博子「辺境図書館（31）」
（『群像 2022年 10月号』講談社 2022/9 所収）
- 山本幸司『狡智の文化史／人はなぜ騙すのか』
（岩波現代文庫 岩波書店 2022/6）
- ミヒヤエル・エンデ（田村都志夫訳）
『エンデのメモ箱』
（岩波現代文庫 岩波書店 2013/5）

（皆川博子「辺境図書館（31）」より）

「『人はなぜ騙すのか』の「エゴと倫理観」という章を興味深く読みました。創作をしている身として、感じるところがあったからです。

ホメロスの『オデュッセイア』にオデュッセウスの船が怪物に襲われ、船員六人が食われたエピソードがある。生き残った者たちは必死に漕ぎ続け、ようやく次の島に上陸し、休息し、食事を済ませ満腹してから、怪物に食われて死んだ仲間たちを思い出して泣いた。オルダス・ハックスリーがこれに触れて、近代文学者なら、船員たちは船を漕ぎながら死んだ仲間たちを思って泣いた、などと書くだろう、なぜなら、そのほうが作者の個人的良心が安らかになるからだと言っている。それを伊藤整が『改訂 文学入門』に引き、人間のエゴを醜悪な現実のままに描くという点で近代文学は古典に及ばないと指摘する。著者山本幸司氏はこれらを引いて、人間のエゴの醜さを、古典は剥き出しに描くが、近代文学では倫理観が働いて、人間は醜悪であっても美しい反面も持つと描かざるをえない、という意味のことを記しておられます。本書の主題は人の狡知についての考察で、この章はそれを補強するためにあるのですが、私は表現と倫理を扱っている点に惹かれました。

現代は、伊藤整が古典に及ばないと記した近代より、表現に対し倫理の枠を嵌める傾向がいつそう強くなっていると感じます。近代文学はまだ、まったく救いのない作を発表できた。当図書館で何度も書いていますが、子供のころに読んだジュール・ルナールの『にんじん』も、ジュリアン・グリーン『アドリエヌ・ムジュラ』も、ストリンドベリの諸作も、人間の醜さが抉り出され、ひとかけらの救いもない。だからこそ、これが真実だと当時強く思いました。周囲の大人の裏表、子供の残酷さ、自分自身の中にある醜さ、それらを身にしみて知っていたからです。現代でも、戦後まもないころの日本の創作は、野間宏にしる安部公房にしる椎名麟三にしる石上玄一郎にしる、暗鬱なものを暗鬱なままに記し、生半可な救いなど寄せ付けない強さがあった。二十一世紀の今は、ラストに救いがある。読後感が爽やか、などが高く評価される傾向がある。作者自身は正しい倫理観を持っているのだとどこかで示さねばならない。読者に不快感を与えてはならない、という枷を感じます。私が幼時を過ごした渋谷の街は汚く、不潔だった。それを示す言葉がみんな差別語、不快語として使用禁止になったので、あからさまに描くことができません。せいぜい、貧窮が露骨に表面に顕れていた、と言えるくらいです。現代の人物を差別語で呼ぶのは当然不可ですが、過去の時代において明らかに存在したものを非在にしたら、その時代の上澄みしか書けません。というようなことを呟いても蠅螂の斧で、自分が潰れるだけです。」

（『エンデのメモ箱』～「悪の像」より）

「悪の表現自体は悪ではない。善や聖の表現自体が善や聖ではないのと同じである。むろんこれはわかりきったことだが、ここでそれを思い出すのは必要なようだ。芸術や文学をはかる尺度は倫理のカテゴリーとなんら関係がない。それゆえ、本能がもっと確かだった時代には、表現された世界は台座や舞台による、生の現実から切り離されていたし――それは正しかった。今日では、人はこの二つのレベルを混乱させてやむことがない。そこでは淫らの表現はそれ自体淫らであり、いやらしさの描出はそれ自体がいやらしく、残酷さの描写はそれ自体が残酷なのだ――そのさい、そんな作品の作者は通常生の現実とその真実らしさを楯に取るのである。

このような価値の根本的ちがいは、一つの共通項にすべてを収めようとする、中途半端な教養の頭脳を混乱させた。想像力やポエジーや芸術一般の領域ではもっともであり、いや必要でさえあるものも、そのまま生の現実当てはめることはできないし、当てはめてはいけない――そして、その逆もそうだ。この境界を愚かにも見過したり、扇動のため、わざと越えれば、ねらいとはちょうど反対のことが起きるのだ。つまり、芸術やポエジーがあたえる効果は生の現実から遠ざかり、生の現実はさらに架空のものとなる。」

『左川ちか全集』が刊行され
それを受けて

『短歌ムック ねむらない樹 vol.9』で
特集「詩歌のモダニズム」に続く「小特集」で
「左川ちか」がとりあげられている

左川ちかは一九一一年生まれ
そして一九三六年には二四歳ですでに亡くなっているが
そのあいだに約九〇篇の詩・二〇余篇の翻訳詩文
そして一〇余篇の散文を残している

長らくそれらの作品は入手困難だったが
今回『左川ちか全集』にすべて収録され
編者の島田龍による年譜・解題・解説等が付されている

左川ちかは「萩原朔太郎・西脇順三郎・春山行夫・
北園克衛・伊藤整らに前途を嘱望され、
将来のヴァージニア・ウルフ、
ガートルード・スタインに例えられもし」

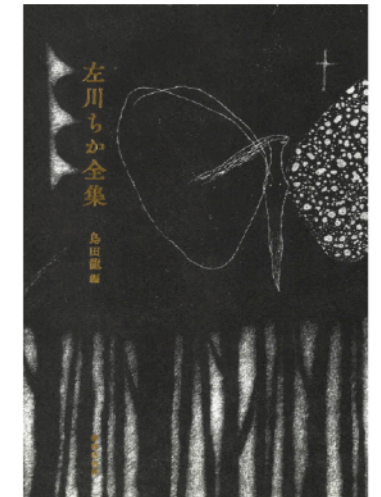
「戦時下の吉岡実が詩に目覚めるきっかけ」ともなり
村野四郎らもオマージュを捧げ
三善晃をはじめとした作曲家にも影響を与えているという

個人的にはそんな左川ちかのことを
ほとんど意識したことはなかったのだが
今回の全集刊行をきっかけに
ようやく左川ちかをはじめとしたモダニズムについて
調べる機会をもてるようになった

そんななかでの『短歌ムック ねむらない樹』の
「詩歌のモダニズム」と「左川ちか」の特集である

興味深いことに左川ちかは詩人であるにもかかわらず
全集が刊行されたのは詩集を刊行している出版社ではなく
主に歌集を刊行している書肆侃侃房であり
その特集をしているのも詩の雑誌ではなく
短歌の雑誌『短歌ムック』である

ある意味で今や「短歌」の世界のほうが
「ことば」への新たなアプローチを
切に模索する衝動を持ちえているのかもしれない



- 島田龍編『左川ちか全集』
(書肆侃侃房 2022/4)
- 『短歌ムック ねむらない樹 vol.9 特集=詩歌のモダニズム』
～「小特集 左川ちか」
(書肆侃侃房 2022/8)

さておそらく偶然の必然だが
昨日とりあげたテーマ「芸術と現実」との関係で
ひきあいにだしていた伊藤整は
左川ちかと同時代のしかも北海道出身の詩人であり
両者とも日本語の前衛詩運動における
文学作品の翻訳に関わっていた

モダニズムの詩人といえば
その後戦争に協力する詩を書いた云々で
戦後ほとんど顧みられなくなっているところがあるが
そうしたレッテルだけを貼って済ませるのではなく
(過去のものとして顧みられない歴史も同様に)
モダニズムという「未完成の運動体」について見直し
あらためて「芸術と現実」の関係を
生きたものとするための
視点を得る契機とする必要があるのではないか

ちなみに左川ちかが亡くなったのは一九三六年で
それは二・二六事件の直前のこと
そしてその次の年に中原中也も亡くなっている

左川ちかも中原中也もその後生きていて
戦争期を経過したとしたら
その詩はどんな表現をとるようになっていただろう
そんなことを想像したりもする

「左川ちかは未完成なものに惹かれ、
作品は常に進行形で幾つもの
ヴァリエーションを作り続けた」そうだが
そういう意味でもモダニズムという
「未完成の運動体」としての「ことば」に潜むものを
現代の「ことば」のなかでとらえなおし
「どれがほんとうの私なのかわからなくなるまで、幻の鏡、
に映し出してみるのはどうだろうか

「私たちは一個のりんごを画く時、丸くて赤いといふ観念を
此の物質に与えてしまつてはいけない」
「詩の世界は現実に反射させた物質をもう一度
思惟の領土に迄もどした角度から
表現してゆくことかもしれない」のだから

- 島田龍編『左川ちか全集』（書肆侃侃房　2022/4）
- 『短歌ムック　ねむらない樹 vol.9 特集=詩歌のモダニズム』～「小特集 左川ちか」（書肆侃侃房　2022/8）

（『左川ちか全集』～「解説　左川ちかの肖像」より）

「翻訳者左川千賀として川崎愛（一九一一～三六）が世に現れたのは一九二九年春、一八歳のこと。翌年左川ちかと筆名を改め、三六年一月に亡くなるまでの間に約九〇篇の詩、二〇余篇の翻訳詩文、一〇余篇の散文を残した。萩原朔太郎・西脇順三郎・春山行夫・北園克衛・伊藤整らに前途を囑望され、将来のヴァージニア・ウルフ、ガートルード・スタインに例えられもした。

その詩の一篇に初めて出会ったとき、伝記的背景はもちろん、名すら知らなかったが、考えるより感じなさいとでもいうような、モダンでアヴァンギャルドな風格に圧倒された。転がる言葉と言葉がコラージュしシュールな世界を現出させる。前衛絵画のような異質な言語感覚だ。ノスタルジーやロマンティシズムといった叙情性とは程遠いクールで硬質な文体、でありながら観念抽象的な言語遊戯に陥らず、一般的なモダニズム詩には希薄な“私、”という何者かの熱量をじかに感じた。

“私、”とはおそらく、川崎愛でも左川ちかでもない、何者かとしか言いようがなく、それは読み手の心の臓を直接鷲掴みにするような世界の住人だった。そして何といっても、最後のセンテンスの破壊力である。

詩集が入手困難なこともあって幻の早逝詩人として長く神話化されていたが、近年再評価の機運が高まりつつある。中保佐和子の英訳を契機に、欧米や南米・イスラム圏など海外での翻訳が相次いでいる。（…）「二〇世紀初頭の日本における最も核心的な前衛詩人」（『ザ・ニューヨーカー』二〇一五・八・一八）と、海外での評価が先行しているのが現状だ。

とはいえ、国内でも左川ちかの詩は確実にインパクトを与えている。戦時下の吉岡実が詩に目覚めるきっかけとなったのは『佐川ちか詩集』との出会いだった。オマーージュを捧げる詩歌人は、村野四郎らを始め現代もあとを絶たない・若いフォロワーが多いのも特徴だ。著名な一人は作曲家三善晃だろう。声楽曲『白く～左川ちかによる四つの詩』（一九六二）は代表曲の一つで、今も歌い継がれる。「作者者のことば」（『音楽芸術』六三・八）で三善はいう。

佐川ちかの詩に不思議な絶望がある　失った声　向こう側の音　見えない花　そしてもう近くに居ない夏　しかしそれは艶冶な装いにくるまれ　ほとんど誇り高きものの姿をして居る　微量の毒を含んだ棘が　老人を噛む　少女らの指先に虚しい情感を植え　私を刺した　「作者者のことば」

近年でも、青柿将大や茂木宏文、高橋悠治らが彼女の詩に着想を得て作曲しており、和賀作曲のボーカロイド曲も生まれている。さらに国内外の美術家による作品も様々に制作されている。今後はサブカルチャー含め多彩な領域での受容と展開が予想される。

昭和初期、左川ちかは“女、”であることのセクシュアリティと孤独に対峙し、これを越境しようと試みた。モダニズムの限界を突破せんと、性と生を疾走した“現代詩の先駆者、”といえよう。

今後はモダニズム詩の枠組みのみならず、様々な文学・絵画・映像表現や翻訳トレンドなど同時代の横断的な表現と言説・メディアの中で、その詩風の誕生と変遷を丁寧に読み解くことが必要だと考える。かつて金子みすゞのように、早逝の女性詩人として、さらに超越的な存在として神話化されてきた表象を脱神話化する作業でもある。」

（「小特集 左川ちか」～島田龍x蜂飼耳x鳥居万由実ノ座談会「左川ちかとモダニズム詩」より）

「蜂飼ノ時代的には、プロレタリア詩派とモダニズム詩派の二つの潮流があったと見ることができる時代で、例えば左川ちかが亡くなる前年、一九三五年はアナーキストの一斉検挙が行われた年なんですね。（…）

鳥田ノ彼女は病院の中でも、反ファシズムを掲げパリで開催された国際会議に関する『文化の擁護』を読んでいたり、同郷の知己や文学仲間が治安維持法違反で謙虚されています。社会民主党に参加していた従兄は特高の監視対象になっていました。小樽出身の小林多喜二とも面識があったようですね。そういった時代の状況、社会的な関心がそれなりにあったと思います。生きていたら江間章子のように社会性を強めたかもしれないし、あるいはもうペンを折ったかもしれない。一九三六年の一月（二・二六事件の直前）に亡くなったことで直接の戦争を経験しなかったことが、彼女の評価に影響した側面はあります。戦争詩に移行したモダニズム詩人たちは、戦後に確立した詩史叙述においてはかなり追いやられますよね。

蜂飼ノ左川ちかが亡くなった次の年に死んだのが中原中也なんですよ。中原中也も実は似たようなことを言われていますよね。戦争期を経過したらどうなったかわからないと。」

「鳥居ノモダニズムの詩というのは、流行のデザインをみんなが模倣したにすぎなかったみたいに戦後言われて、否定的に見られていた傾向もあったんですよ。その背景としては多くの詩人が戦争に協力する詩を書いてしまった、それはモダニズム詩人に限らないんですが、最新の芸術思想を体現していたモダニズム詩人も他の多くの詩人と同じように戦争に協力する詩を書いてしまったこともあって、批判的に見られることが多かった。けれども、「モダニズム詩はきらびやかだけど意味のない単なる戯れだった」という評価だけで終わらせてはいけないと考えていて、モダニズム詩には現代まで続く近代社会の様々な問題について提起するところがある。左川ちかもそのことをよく示していると思います。もちろん、佐川ちかの作品世界自体がとても味わい深いのですが、左川ちかをきっかけにしてモダニズム詩自体の評価につながってもいいかなと思って、私は博士論文の前半部分でモダニズムの詩人を取り上げました。（…）佐川ちかの詩には、社会で職業婦人やモダンガールが登場するなど、それまでのジェンダー概念がゆらぐ中での主体の模索が表れている側面があると思います。

鳥田ノ停止した完成形ではなくて、未完成の運動体を愛した人だというのは本当にそうですね。」

（「小特集 左川ちか」～西島伝法「幻の鏡」より）

「言葉とビジュアルが相互作用する作品に興味が強くと、北園克衛あたりを読むうちに、左川ちかという名前を知ったのだと思う。十数年前のことだ。」

「左川ちかが詩をどのように捉え、書いているのかをずっと知りたいと思っていたが、「魚の眼であったならば」という詩論ではそれを垣間見ることができ、感銘を受けた。“私たちは一個のりんごを画く時、丸くて赤いといふ観念を此の物質に与へてしまつてはいけないと思ふ。、”詩の世界は現実に反射させた物質をもう一度思惟の領土に迄もどした角度から表現してゆくことかもしれない。、”そして、“私は虫のやうな活字を乾いた一片の紙片の上に這わせる時のことばかりを考へてゐたから。、”という一文には、「昆虫」がずっと結びつき、まさに生きる字で書いた詩人なのだと感じ入った。その頭にあったのは蛹になる前の幼虫だろうか。

左川ちかは未完成なものに惹かれ、作品は常に進行形で幾つものヴァリエントを作り続けた。それは今も続いているのかもしれない。読み手は何も知らずに読んだ最初の印象を大切にしつつ、書簡などで生に近い言葉に触れたり、解題や解説で知った背景や理解の深まりによって、あるいは思い込みや誤読によって感想のヴァリエントを生み出し続け、詩は繰り返し象りなおされることになるだろう。“常に見えない紐によつて釣り上げられ、またはお互に引き合つてゐるのだ。、”“どれがほんとうの私なのかわからなくなるまで、幻の鏡。」

「群像」で連載されている「星占いの思考」
(2020年4月号～2022年3月号)を中心に
石井ゆかりさんの『星占いの思考』が書籍になっている

そのなかに収められている
「占いは「アリ」か。」という
私たちが「占い」に対してもつスタンスについての
示唆的なエッセイをとりあげてみる

エッセイは劇作家の阿藤智恵さんの夢の話からはじまる
夢の中に神様がでてきたのでとっさに
「演劇は、ありますか？」と質問したのだという

「アリ」か「ナシ」か

演劇は「人の生き死にや衣食住に
直接的に関わるものではない」という意味では
「アリ」だとはいえないだろう

その話から石井ゆかりさんは
「占いは「アリ」か。」と問う

そして「原理的には「ナシ」」だと言う

科学的に証明できるようなものでも
統計学的な結果で証明できるようなものでもない

しかし「占いは「ナシ」だからこそ、
存在しているとも言える」のだと言う

そして「オカルト」(隠されている)であるがゆえに
成立するのが占いであると示唆している

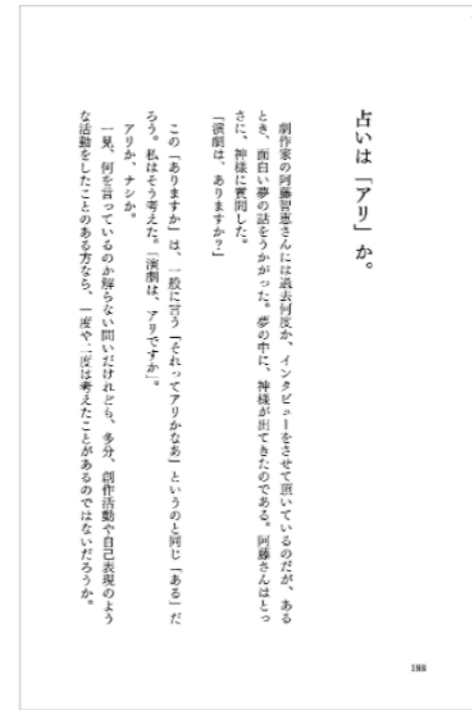
隠されているのはおそらく
「自分だけの、たったひとつの真実」で
それを見つけるために占いはある

占いは「裏緬い」だともいわれる
表にはでてこないものの「裏」に隠されている
真実の姿を示唆するものといった意味である

私たちにとって「アリ」の世界は
たしかに必要不可欠なものの世界で
それなしには生きてはいけませんが
私たちは光の下に照らされている「アリ」だけで
生きているわけではない

「ナシ」は光の下に置かれれば
幽霊のように存在できなくなるかもしれないけれど
表には必ず裏があるように
裏がなければ表は存在できないように
「ナシ」はそれなりに必要なものだ

そういう意味でいえば
「物」の世界も同様で
「物」は霊という「もの」でもあり
「アリ」と「ナシ」は切り離せない



■石井 ゆかり『星占いの思考』
(講談社 2022/9)

さてこの9月10日に放送された「ブラタモリ」は
「恐山」が舞台で
そこにある霊泉寺住職の南直哉さんも登場していたが
(その「恐山あれこれ日記」にも記事がある)
そこで「死者」に話しかけるということも
ある意味では「ナシ」の話に通じている

会いたい死者は「ナシ」だけれど
「ナシ」だからこそ「アリ」なのだ

■石井 ゆかり『星占いの思考』
(講談社 2022/9)

(「占いは「アリ」か。」より)

「劇作家の阿藤智恵さんには過去何度か、インタビューをさせて頂いているのだが、あるとき、面白い夢の話がうかがった。夢の中に、神様が出てきたのである。阿藤さんとはっさに、神様に質問した。「演劇は、ありますか？」

この「ありますか」は、一般に言う「それってアリかなあ」というのと同じ「ある」だろう。私はそう考えた。「演劇は、アリですか」。アリか、ナシか。一見、何を言っているのか解らない問いただけども、多分、劇作活動や自己表現のような活動をしたことのある方なら、一度や二度は考えたことがあるのではないだろうか。」

「音楽は、芸術は、アリなのか」という問いは、わりと本質的なものなのではないか、と私は思っている。人の生き死にや衣食住に直接的に関わるものではない仕事、「それがなくても、生きていくにはこまらない」仕事。もちろん、ファンに訊けば「そんなことはない、是非歌って欲しい、あなたが歌ってくれるから私の人生に潤いがあり、意味が生まれる」と言ってもらえるだろう。それでも、どうしても、アーティスト達は、作家達は、表現者達は、心のどこかに「こんなことは無用なのではないか」という空虚を抱き続け、決して答えの出ない問いを生きていくものではないだろうか。

阿藤さんの夢の話聞いたとき、私はぼんやりと、「占いはどうか」と考えた。少なくともある場では、完璧に「ナシ」である。たとえば小学生が学校の先生に訊いたら、「占いは、信じてはいけないよ」と言うだろう。あれはインチキだから近づくな、と言うかもしれない。それは正しい。少なくとも今のところ、占いにはなんの科学的裏付けもない。人間理性に照らした合理的な説明ができない「占い」になど、頼ってはいけない。悩みがあったら、信頼できる身近な人に相談し、自問自答し、本を読んだり芸術に触れたりしながら、自分で乗り越えていくべきだ。そう教えるのが、立派な先生だろう。」

「では、大人の社会にとってはどうなのか。占いは「アリ」なのだろうか。私は、基本的には「ナシ」だと思っている。大人にとっても同じことである。科学的根拠がない。そして、倫理的にも問題がある。未来を盗み見て現在の方針を決めよう、などというのは、いわば、カンニングではないか。私たちは自分で自分の未来を決定できる、という前提があるからこそ、人の善悪を問える。もし、未来がすでに(読み取れる程度に)決まってしまうのなら、なんでも「運命のせい」である。犯罪者を裁いたりできないことになる。もちろん、これは極論だ。実際の占いの場では、運命は少なからず変えられる、という立場に立って占いが行われることが多い。しかし、占いは本質的には、その行為において「未来は読める程度には決まっている」という前提に立っている。」

「どんなにたくさん人間がいても、どんなにたくさん統計を取っても、自分自身の人生は、自分にとってたった一回である。この就職、この試験、この結婚、この病気が、自分にとって今このとき、一回きりのことである。科学的実験なら何度も追試ができるし、「再現性」が何よりも重要だ。でも、私たちには何度も人生をやり直して仮説を立て直し、選択肢を変えてみる、ということは不可能だ。たった一回しかない人生の前では、再現性は問えない。何十万人を母集団にとって「割合」も、参考にしかならない。もとい、参考にすらならないのである。占いは、この「一回性」の前に、臆面もなく立とうとするのだ。」

「「占いは統計だ」と言う人がいるが、そうではない。実際、純粋に科学的な手法で占星術についての統計をとった人がいる。しかし残念ながら、今のところ科学的定説となるような結果は出ていない。」

「「占いは、アリか」。そもそも、何に照らして「アリ」なのか。人の役に立つものならあってもいい、というものでもない。覚醒剤はとても頭が冴えて元気が出るらしいけれど、使ってはダメだ。人に喜ばれればいいか。というと、そうでもない。子どもに甘いものだけやまほど食べさせたら、喜ばれるだろうは、ためにはならない。酒や煙草が「大目に見られている」ように、占いもまた、社会に「見逃してもらっている」だけである。実際、占いが禁止された例は、歴史に何度もある。占いが不安を一時的にやわらげ、生きる希望をくれたとしても、酒の酩酊と同様、まやかしに近い。原理的には「ナシ」なのだ。

しかし占いは「ナシ」だからこそ、存在しているとも言える。それが「オカルト」の、本当の意味ではないかと思う。「オカルト」は、「隠す」という意味合いの言葉だ。たとえば、天文用語に「オカルテーション」というのがある。月がアルデバランを隠すような時に使うのだ。「オカルト」という言葉は、一般にはあまりいい意味で使われない。でも、私は「占いはオカルトだ」というのは、ある種の決意表明だと思っている。つまり、社会の外側に置かれ、隠され、場合によっては否定されているからこそ、成立するのが占いなのだ。落語に「昼間の幽霊は怖くない」と言う。占いもまた、そういうところがある。

日本文化では「なかったことにする」「ないことにする」ことが、よく行われる。うすいついたてを立てれば「個室居酒屋」である。襖の向こうからあからさまに気配がしていても、「ないこと」にできる。腹の底で思っていることが口からポロポロ出ても、片っ端から「失言」にされる。「ないこと」になっている。だから、ついたてとカーテンの向こうで、こっそり占っている。隠されているからこそ、そこにあるかもしれない。自分だけの、たったひとつの真実を探しに来る人がいる。占いは、ナシだからこそ、アリなのだ。少なくとも、今のところは。」

「センスハッキング」とは
「五感や感覚的刺激を利用して、
社会的、情緒的健康の向上を促進すること」だという

五感を組み合わせ

「多感覚」な環境を構築することで
「より生産性が高く」
「よりストレスレス」で
「より幸福な人生」を実現できるとしている

著者はトヨタやユニリーバ・ペプシコ・ネスレといった
多国籍企業への感覚的コンサルティング経験をもつ
オックスフォード大学の心理学者で
いわばマーケティング的な観点から
五感の関連性への理解と統合という視点から
バランスの取れた多感覚刺激の得られる感覚環境や
そのための空間づくりを提案している

まずいちばん基本となる問いかけは
「複数の感覚を持っている生き物で、
感覚をばらばらに切り離している生き物」は
人間にほかならないのではないかということだ

知覚はほんらい多感覚であって
個別の感覚だけが切り離されてはいない
それにもかかわらず
「五感」というと
視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚とされ
それぞれの感覚が個別に扱われがちがある

ここからは本書の示唆からは外れるが
「共感覚」といえば
どこか特別な感覚間の相互作用のようにとらえれがちだ
が
個別の感覚器官を超えた感覚間の相互作用を
強く感じるひとは確かに存在しているものの
おそらく「共感覚」を持ちえない人は存在しないだろう

しかも感覚は五感だけではない
たとえば仏教の「識」は「六識」であって
「意識」という心的な働きも感覚に入れられている

■工藤 咲良
『静寂なほど人生は美しい
——弱視の音楽療法士が伝える「聞こえない音」の世界』
(clover出版 2020/11)

さらにシュタイナーの神秘学では
「十二感覚」が示唆されている
つまり通常の五つの感覚に加え
生命感覚・運動感覚・平衡感覚・熱感覚
言語感覚・思考感覚・自我感覚という
七つの感覚が加えられている

そうした感覚も含め
それぞれの感覚の感覚器官と対象とする領域
そしてその感覚によってひらかられる認識を踏まえながら
それらの感覚の相互作用への視点を持つことは
「善く生きる」という意味でも非常に重要となる

たとえば「考える」ということにしても
(「考える」というのは「思考感覚」によってなされるが)
おそらくそれが生きたものとなるためには
ほかの十一の感覚の働きから離れては存在しえない
「考える」ことからほかの感覚が切り離されたとしたら
そのぶんだけ「考える」ということは欠損したものとなる

ほかの感覚もすべてそういう視点のもとに
多感覚的・共感覚的に育てていく必要がある
「センスハッキング」はそうした視点に立って始めて
そのほんらいの役割を果たすことができる
(マーケティングでできることはほんのわずかだ)



■チャールズ・スペンス（坂口佳世子訳）
『センスハック／生産性をあげる究極の多感覚メソッド』
（草思社 2022/4）

（「序文」より）

「センスハッキングとは正確にはどういうものだろうか。それは五感や感覚的刺激を利用して、社会的、情緒的健康の向上を促進することと定義づけられるだろう。それは五感のすべての独特な能力をよく知り、そしてそれらが互いに作用しあって私たちの感情や行動を左右する予測可能な方法を認めて初めて、感覚的経験の最も効果的なハック（科学的知識に基づいた効果的利用）が期待できるということだ。そうすることで、自分たちだけでなく、私たちの大事な人の正確の質を向上させられるのだ。もっとリラックスしたい、機敏でありたい、より生産的な仕事をしたい、または、ストレスを軽減したい、よく眠りたい、自分が最もよく見える方法を知りたい、ジムでのトレーニング効果を最大限にしたい……。センスハッキングの科学が、あなたの目標と願望の達成の手伝いをする。」

「センスハッキングは、五感の関連性、また、健康、生産性、そして幸福に対する、バランスの取れた感覚的刺激の重要性への高まる認識の上に、成り立っている。これは、たまたま家にいようが、オフィスにいようが、ジムにいようが、買い物中であろうが、治療を受けているときでさえも当てはまる。五感の統合は基本的であり、さらに、生活の質も向上させるだろう。バランスの取れた多感覚刺激は、すでにいくつかの医療現場で利用されており、痛みを軽減したり、入院患者の回復を促進するのに役立っている。」

「複数の感覚を持っている生き物で、感覚をばらばらに切り離している生き物はいない。もし一つの感覚が一方の方向に引っ張り、もう一つの感覚が別の方向に引っ張ったら、大変なことになるだろう。五感が、情報をやり取りしない限り、そのような混乱を解決する方法はない。私たちの認識や行動は、視角、音、匂い、感触、そして味覚の主要な五つの感覚をつないでいる。何百万という神経によってコントロールされている。重要な問題は、脳がどのような規則で、さまざまな感覚からの情報を結合しているかだ。というのも、どのように多感覚知覚が機能するかを理解してはじめて、五感の効果的ハッキングに着手できるからだ。」

（「11 感覚を取り戻す」より）

「私たちは今よりもっと、感覚に注意を向けるべきだ。それを感覚への注意深いアプローチと呼ぶのもいいだろう。ただ、私のお勧めの用語は、約20年前に産業レポートの中で作り出された「感覚中心主義」だ。感覚中心主義の基本的目的は、感覚を総合的に捉え、それらの相互作用のメカニズムを理解し、その理解を日常生活に取り入れて健康改善のためのカギを提供することである。
（・・・）

個々の感覚を対象とする、多くのマーケターが直面している根本的問題は、間違いなく感覚の力を認識している一方で、感覚間の相互作用の程度を把握できていない点だ。また、（・・・）知覚は非常に多感覚的である。見るものは、聞こえるものによってしばしば影響され、そして、匂いは感じるものによって、感じるものは見るものによって、という具合に続いていく。センスハッキングは感覚的相互関連についての、高まりつつある理解に基づいている。」

「感覚中心主義とは、究極的には生活の中でバランスの取れた感覚刺激を見つけることだ。多くの人が愚痴をこぼす感覚過負荷は、高次の合理的感覚、すなわち目や耳にのみ影響を及ぼすことを認識する必要がある。一方、より情緒的感覚、すなわち、接触、味覚、匂いの欠如に苦しんでいる人も非常に多い。（・・・）

長い間、私たちは皮膚を軽視してきた。最大の感覚器官である皮膚の重要性を認識してこなかったのだ。アロママッサージだろうと、恋人との抱擁からだろうと、皮膚への刺激の必要性に関する提案は、非常に長い間、非科学的と見られてきた。それにもかかわらず、社会的、認知的、そして効果的な神経科学の最新の発展の中で、皮膚を撫でることによる非常に有益な効果が強調されている。赤ん坊が最初に経験する世界との出会いから、老人が経験している感覚過小負荷を補う手助けまで、その恩恵はずっと広がっている。」

■「私はいつの日か、センスハッキングが、日常生活のありふれた経験の改善だけでなく、真に変革をもたらす可能性のある、並外れた経験の提供に利用されるのを見るのが楽しみだ。また、バイオハッカーやグラインダーが、内側からのセンスハッキングにより、磁気感覚や地震感覚のような、何かもっと風変わりな新感覚を有効に活用できるかどうか知りたいと思う。私たちは、感覚の独特な世界を認識するとともに、感覚に対する理解を深めてこそ、感覚との斬新な関係を築けるようになる。その目標の達成は、間違いなく、感覚や、感覚間に存在する相互作用に関する新しい科学的知識によって促進されるだろう。最終的にセンスハッキングの未来は、芸術家や建築家、デザイナーによっても促進されるだろう。彼らは、感覚の科学的知識を興味深く魅力的な多感覚経験に変換し、感覚階層の現状に疑問を投げかける。都会人は、ロックダウンされていないときでさえも、室内で過ごす時間が長い、そう考えると、建築家や都市計画者は、私たちの社会的、認知的、そして情緒的健康の促進に役立つような、多感覚的環境を提供するために果たすべき重要な役割を担っている。同時に、センスハッキングにとって、感覚のコンテキスト化（それぞれの感覚の意味を理解し、感覚同士を関連付けること）は明らかに有益だ。近年、感覚の歴史家、人類学者、そして社会学者の多くが「感覚を転回」させており（これらの学問分野で、感覚の概念が変化している）、新たな媒介感覚を提供している。この媒介感覚も、センスハッキングにとって恩恵をもたらすだろう。

これまで、私はセンスハッキングの秘訣を語ってきたが、それが、社会的、情緒的、または認知的健康のいずれの観点からであろうと、感覚が提供するものを最大限に活用する動機付けになればと期待している。同時に、感覚が与える影響力の程度がわかれば、世の中の策略に富む、マーケターがあなた方の感覚をハックするのが多少難しくなるはずだ。」

傷をもたないひとはいない

おそらくひとは
傷つくために生まれてきた

生まれてこなければ
傷つかずにすんだのに
あえて生まれてきた

だからおそらくひとは
その傷とともにどう生きるか
どう向き合うかをつうじて
なにかを学ぼうとしているのだろう

じぶんの傷を癒やせない
無力感を感じながら
じぶんの傷どころか
ひとの傷を癒やすことのできないじぶんに
罪悪感さえ感じながら

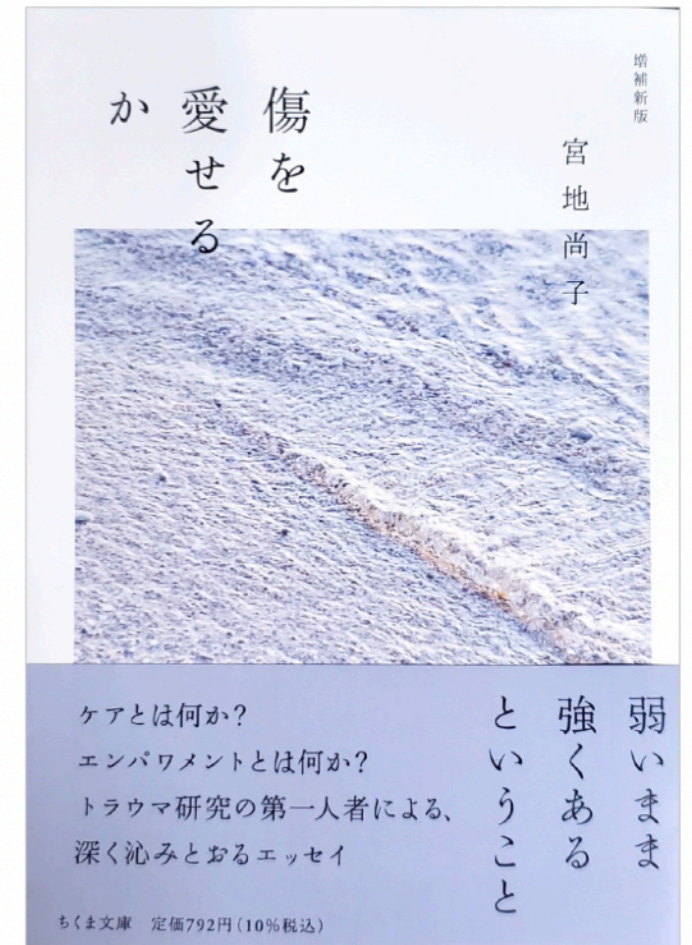
ひとは
「弱さ」から逃げることはできない
弱さを克服することはできないから
弱さを抱えたまま強くあろうとするしかない
未来はつねに不確実なままで
すべての不安を去ることはできないからだ
死から決して逃れることはできないように

愛するとは
残酷なことだ

じぶんを愛することも
ひとを愛することも

愛するということは
たとえ傷から逃げつづけようとしても
傷とともに生きることしかできないままに
あえて傷と向き合うことだからだ

十字架のうえで
みずからの傷を受け入れるように
そしてそこから蘇りを生きるように



■宮地 尚子『傷を愛せるか（増補新版）』
（ちくま文庫 筑摩書房 2022/9）

■宮地 尚子『傷を愛せるか（増補新版）』（ちくま文庫 筑摩書房 2022/9）

（「なにもできなくても」より）

「なにもできなくても、見ていなければならない。目を凝らして、一部始終を見届けなければいけない。そういう命題が、自分に課されているような気がずっとしていた。その命題が、どこから来たのかはわからない。いついからかも覚えていない。だれかにいわれたわけではないと思う。

幼いころの体験が作用しているのかもしれない。（…）

わたしに限らず、子どもというのは、自分のまわりに起きることを、ただ見つけるしかない。大人たちの諍うさまを、ほかの子どもが理不尽にあつかわれるさまそ、自分を守ってくれるはずの大人が怯えたり、あたふたするさまを、大切なだれかが恐ろしい目に遭ったり傷つくさまを、ただ息をつめて見ているしかない。諍いをやめさせたくても、まちがいを正したくても、自分にはその力はない。だれかを守りたくても、守る力はない。かといって、立ち去る力も行く場所もなく、ただそこにいつづけるしかない。だから目を凝らして見ているしかない。ふすまの陰から、車の後部座席から、教室の隅のほうから。

大人になって、医師になって、専門的な知識と技術を身につければ、もう、ただ見つけるだけでなく、目の前の状況になんらかの変化を与えることができる。諍いを止め、まちがいを正し、人の命や心を守り、安心感を与え、傷つきを癒やすことができる。……そのはずだったのだが、現実には、子どものころと同じような経験ばかりをくりかしているような気がする。

（…）

結局、大人になっても、医師になっても、自分が変えられることなどごくわずかでしかないことを、思い知らされつづける。子どものときとちがうのは、無力感に罪悪感が上乘せされるということだろうか。」

（「予言・約束・夢」より）

「ときどき考えるのだが、命綱やガードレールなどのほんとうの役割は、実際に転落しそうになった人をそこで引き（押し）とどめることでは、おそらくない。もちろんそういう役割を果たせるように、強度を計算して、材質や形が決められ、つくられているのだらうとは思ふ。けれど、命綱やガードレールが実際に物理的効力を発揮する機会は少ない。そこにそういうものがあるから大丈夫だと安心することで、平常心を保つことができる。本来の力を発揮し、ものごとを遂行することができる。たいていは、そのためにこそ役だっていると思うのだ。

（…）

同じようなことが「予言」や「約束」にもあるように思う。最終的にその予言が当たり、約束が果たされるという保証はない。けれどもいま、真剣にそう思うから、そう願うから、そう信じるから、言葉にして共有し合う。未来に言葉を投げかける。

（…）

思想家のハンナ・アーレントは、「赦し」と「約束」について語っている。彼女はそれらが「再開の可能性への賭け」になるという。復讐にたいしての「赦し」、支配に対しての「約束」。

復讐の代わりに「赦し」を、というのはわかりやすい。復讐とは過去のくりかえしであり、赦しは過去の呪縛からの解放になるからだ。では支配の代わりに「約束」とはどういうことなのか。わたしの勝手な解釈なのかもしれないが、支配もまた過去のくりかえしであり、過去の呪縛であり、強制であり、力づくであり、一方的なものである。「約束」とはそれ自体が一〇〇パーセント守られる保証はなく、夢であり、祈りであり、希望であり、信じることである。「約束」は、双方向的な関係の中での成り立つ。約束する個でなく、約束される個がそれを受け入れ、もう一度信じてみるという危険性を冒すことによって、かろうじてそれは成り立つ。

「幸せになんてなれずはずがない」と思い込んでいた人、「幸せになってなってはいけない」と思い込んでいた人には、過去の呪縛から解き放たれるための言葉が必要になる。恐怖にすぐんだ人が足を伸ばし、歩きはじめるには、未来を捕捉する言葉が必要になる。

実際の命綱やガードレールがどんなに頼りなくても、人はなにかが、もしくはだれかが、現実のもろさや危うさの中で、未来を捕捉することは実際にはできないからこそ、希望を分かち合うことによって未来への道筋を捕捉しようとする試み。予言。約束。願い。夢。

明日、天気になあれ。みんな、幸せになあれ。そう思い、そうつぶやく。そう囁き、そう唄う。」

（「弱さを抱えたままの強さ」より）

「英語に「ヴァルネラビリティ」（vulnerability）という言葉がある。通常会話のほか、遺伝学や生物学の用語としてもよく使われる。訳としては「脆弱性」が最も一般的だろうか。単純に「弱さ」と訳されることもあるし、「攻撃誘発性」と訳されることもある。わたしはこの言葉がとても気になりながら、ずっとその意味の輪郭をきれいにつかみきれないでいた。なぜ同じ言葉が「弱さ」でもあり、「攻撃誘発性」でもあるのか。その弱さとはどんな種類の弱さなのか。」

「わたしはふと、「あ、そうか、「隙がある」とか「つけ込まれやすい」というのがヴァルネラビリティということなんだ」と思っていたのである。そのもの自身が弱いわけではない。ただ防御力に乏しく、その結果として攻撃を受けやすい状態。「隙がある」とか「つけ困れやすさ」という訳は学術論文では使えないが、意味としてはそういうことなのだ。」

「どれだけ「鎧」をつけて過剰防衛をおこなっても、人間は、生物は、社会は、ヴァルネラビリティから逃れられはしない。つねに未来は不確実なままであり、心配や不安をなくするのは不可能であり、一〇〇パーセントの安全はありえない。医療現場はとくに、病気やけが、障害、老いといったヴァルネラビリティをあつかう領域である。だからこそ、医療文化はそのヴァルネラビリティを受け入れ、慈しみながら、同時にそれと闘いつづける必要がある。弱さを克服するのではなく、弱さを抱えたまま強くある可能性を求めつづける必要がある。」

（「見えるものと見えないもの」より）

「わかる人にはわかる、という現象は、二つの異なる意味で危険をはらんでいる。

見えないものが見えたり、感じることのできないものを感じる人がいるとき、そこで見えるもの、感じられるものが「実在」するのかどうかは、あとにならないとわからないことが多いし、あとになってもわからないことも多い。」

「いまの時点では客観的に証明できない、エビデンスを出しようのない「なにか」も、まだまだ数知れず実在する。そういった「なにか」を先に察知する特殊な能力や技術をもった人は、しばしば疑惑の目を向けられ、迫害されてきた。

立体視の絵がある。目の焦点をずらすと、物体が浮き上がって見えるというものだ。比較的簡単に立体視できる人もいるし、かなり練習しないとできない人もいる、どれだけ練習しても見えない人もいる。わたしは立体視の絵を見ながら、空想する。この社会に独裁的な権力者がいるとする。彼は立体視ができない。だから一度も浮き上がる物体を見たことがない。見えるという人、見えて喜び合う人たちにたいして。苦々しい思いを抑えきれない。屈辱感をぬぐい去るため、立体画を禁止する。立体画が見える人たちを「嘘つき」「異端者」「悪魔」として排斥する。わたしは魔女狩りの時代に思いをはせ、いまから振り返れば狂気の沙汰のような魔女狩り現象も、単純にそういうことだったのではないかと考える。

ふつうの人たちが察知できないものを察知する人は、かすかな空気の汚染に気づくカナリアなのか、それともただの「敏感関係妄想」なのか。特殊な能力をもった癒やし手なのか、それとも魔女なのか。」

（「傷を愛せるか」より）

「傷を愛せるか。心の傷にはいろんな傷がある。擦り傷、切り傷、打撲傷。自傷、他傷。傷つけられたという傷。傷つけてしまったという傷。いつまで経っても治らない傷。かさぶたがすぐ剥がれる傷、どんどん合併症を起こしていく傷、感染を起こす傷、肉芽が盛り上がり、ひきつれて、瘢痕を残す傷、身体の機能不全を起こす傷。

傷は痛い、そのままでも居たいし、さわられると、もっと痛い。

傷を愛することはむずかしい。傷は見にくい。傷はみじめである。直視できなくてもいい。ときには目を向け、見えないふりをしてもいい。隠してもいい。

（…）

傷がそこにあることを認め、受け入れ、傷のまわりをそっとなぞること。身体全体をいたわること。ひきつれや瘢痕を抱え、包むこと。さらなる傷を負わないよう、手当をし、好奇の目からは隠し、それでも恥じないこと。傷とともにその後を生きつづけること。」

「くりかえそう。

傷がそこにあることを認め、受け入れ、傷のまわりをそっとなぞること。身体全体をいたわること。ひきつれや瘢痕を抱え、包むこと。さらなる傷を負わないよう、手当をし、好奇の目からは隠し、それでも恥じないこと。傷とともにその後を生きつづけること。

傷を愛せないわたしを、あなたを、愛してみたい。

傷を愛せないあなたを、わたしを、愛してみたい。」

風そのものは目には見えないけれど
わたしたちはさまざまに風を感じることができるし
呼吸のようにわたしたちを貫く宇宙の息でもある

本書『風のイコノロジー』は
そんな風が西洋文化や美術の中で
どう表現されてきたのかについてのエッセイ集である

画家たちは目には見えない風の動きを
水と織物・空気と水・髪の毛と織物など
その動きのなかで描きだしてきた

また旧約聖書において
人間は神の息である「ルーアハ」によって
いのちを吹き込まれたとされるが

そのヘブライ語は
〈プネウマ〉としてギリシャ語に
その後〈スピリトゥス〉としてラテン語に翻訳され
その〈スピリトゥス〉である風・息・空気・霊から
さまざまな視覚的表現も生み出されてきた

「受肉」ということから
本書の第二部では「受胎告知」のテーマも
とりあげられているが
神的起源の〈ルーアハ〉に芸術的表現を与えた
稀有の画家といえばレオナルド・ダ・ヴィンチである

レオナルドに《洪水》という素描があるが
「この大洪水は、自然現象としての風を素描に変換できる、
おそらくただひとつの技法において記録されたものである」

「レオナルドの素描家としての気質は、
「風の素描家気質」であり、それゆえに、
そのようなイメージ言語の起源まで遡る」

芸術の過程はレオナルドにとって
宗教や哲学と境を接している
「芸術的なものそれ自体の〈プネウマ〉を伴う」
創造力を含んでいるのだ

■水原紫苑 編『山中智恵子歌集』
(書肆侃侃房 2022/8)

レオナルドは自然現象そのもののなかにある
神的起源の〈ルーアハ〉の秘密に迫ろうとしたのだろう

その意味で「風」はその根源において
線的時間であるクロノスを超えた
「風の時間」としてのカイロスとともにあるのだともいえる

その時間は「流動ではなく、
流れの中断であり、時間の裂け目」であり
そこから「かなたにある言表不能な神秘への口が開かれる」

目には見えないけれど
目には見えないからこそ
自然現象としての風も
私たちに生命を与える息としての風も
時間を超えた永遠の場所から吹き込まれる「風」としての
神的な〈ルーアハ〉をその起源としてもっているのだ



- バーバラ・パート（蜻川順子訳）『風のイコノロジー／風、ルーアハ、受肉、匂い、しみ、動き、カイロス、クモの巣、静けさについてのエッセイ集』（三元社　2022/8）（「〈ブネウマ〉　――日本の新しい読者に向けた四つの回想」より）

「その一：視覚芸術が風を表現し喚起し示唆するやり方は、諸感覚の人類学や、それらの視覚媒体への変換に関する根本的な考えを、呼び起こします。風は、全身が感覚器官である身体の上で戯れるひとつの自然現象です。風は触れることができます。風は聞くことができます。風は薫りを運びます。風はわたしたちを包み貫く宇宙の息です。風は養い、また、破壊するのです。

わたしたち自身の身体でさえ風を作り、吸い込みます。風はわたしたちの身体に出入する息や、わたしたちの器官が放つ気体とも関係します。風は眨められたもの（卑しめられたもの）――放屁――でもあり、気高いもの（高められたもの――わたしたちが息する空気――でもあります。わたしたちの身体には、第三の風（三種目の風）があります。ギリシャのアリストテレスの哲学において、〈ブネウマ〉（氣息）の概念は、息や精神の中心にあります。文字通り生命に不可欠なエネルギーであり、脳を占めて、思考や知覚や運動を担う気体なのです。この不可欠なエネルギーは、誕生時に授けられ、呼吸によって補充され続けます。

その二：風そのものの表現や視覚性は逆説的なものです。風は目に見えない無数の指先でわたしたちの皮膚を愛撫します。（イタリアには、この触れたか触れないかの感触を表す〈スフィオーラーレ〉という言葉があります。これは微風にのって他の花に触れるような花粉を蒔く、花の中の雄しべに由来します。）風はまた直接的な情感でも現れます。風は生命をもたらします。木々は風のおかげで音を立て、語りかけます。身体そのものと風との関係は、とくに複雑です。身体は自然界の媒体であり風の中に立ちます。逆に、風は身体そのものを媒介として用います。風は空気、酸素、息です。風は口にも肛門にも関係します。風は身体に入り、更新された生命の精髓のように再び現れます。セム族あるいはホメロスの叙事詩的知のモデルにおいて、人間は生命の精髓を定義し特定しようとしてしました。はじめは、〈ネペシュ〉と〈ルーアハ〉、あるいは〈アニマ〉と〈アニムス〉に区分されていました。後に、〈スピリトゥス〉という単一概念で統一されました。

その三：人間と環境、人格と身体とのこの複雑な相互関係において、風は太古の昔から、見えるものと見えないもの、死と生、精神と身体の間連を通して考えることを可能にする、魅惑的なモデルであり続けてきました。風はこうした根本的な二元性を繋ぐ狭間にあるものなのです。

風は実際計り知れないものです。それは触覚に先行しますが、触覚なしにすまされるものではありません。風は人生の気まぐれさをわれわれに認めさせます。あらゆる儀式は風を招くためのもので、風のエネルギーは、香りやダンスやその他の心理活性的療法のように、「一である」という前言語的狀態へ戻りたいという願望を抱かせるのです。

その四：このささやかな回想で、風が、通時的ではなく、すなわちクロナス（あるいは、われわれの現行の直線のモデル）に向かうのではなく、創造されて、かつ創造する循環的運動の時間感覚を含むことに触れておきます。この「風の時間」は、人生は気まぐれで変わりやすく予測できないという確信に繋がりが、この制御不能性に、美や、不滅に関する認識が含まれるのです。宇宙的時間の受容は、さまざまに方向を変えながら繋がっている、毛糸玉を端までほどこような時間経験の広がり意味します。これは、宇宙的空間における人間の運命を示し、それを分析し、定義し、把握できるものにする、もうひとつの風の時間のために道を拓くことなのです。これが前髪をなびかせながら素早く動くカイロスに特徴的な微風です。」

- （「荒ぶるのは風　――序に代えて」より）

「視覚芸術が風を表現したり、想起させたり、示唆したりするやり方は、感覚や感覚由来の視覚媒体を扱う、人類学の基本的な発想に関連する。風は、まるごと感覚器のような身体の上で戯れる自然現象である。風は触れることができる。風は聴くことができる。風は香りを運ぶ。風はわれわれを包みこみ、われわれを貫く、宇宙の息である。風は養い、また、滅ぼす。われわれ自身の身体でさえ、風を創りだし、また吸いこむ。風は、身体が吐きだしたり取りこんだりする息や、われわれの器官が発する気体にも関連付けられる。肛門からの放屁のような風なら低められ、呼吸する息なら高められる。われわれの身体には、第三の風もある。ギリシャのアリストテレスの哲学において、〈ブネウマ〔氣息〕pneuma〉と呼ばれるその風概念は、呼吸にとっても精神にとっても中心をなす。それは文字通り、生命に必須のエネルギーであり、脳に充満し、思考や知覚や運動のために重要な役割を果たす気体である。この必須エネルギーは、誕生時に与えられて、呼吸のたびに活性化され続ける。」

「本書が注目するのは、風や〈ブネウマ〉や動きが美術史的解釈に与えた衝撃である。言葉を変えるなら、風はその視覚媒体それ自体について何を語りうるのか？　風はやってきて、流れ、繋げ、方向を変える――つまり、風は気まぐれなのだ。この気まぐれさゆえに、風は、聯想や自由や不意といったものに特有のい解釈学を出現させる。となると、こうした気まぐれさに関するイコノグラフィーは、可能なのだろうか？　われわれを包み込み、貫きながら、われわれの身体に拘わらないこともあるこの自然現象は、どのようにして図像に留められたのだろうか？　風の力は結局のところ、揺れる木々、波打つ草原、はためく布を通して、間接的にしか見るできないとすれば、いかにして風は、イメージの理解を膨らませたのであるうか？　視覚的〈ブネウマ〉の問題なのだろうか？　風は諸芸術において、内容の問題なのだろうか。それよりむしろ、形式的作用に関する事柄なのだろうか？」

- 「第一部では、宗教体系によって異なる風概念の、文化人類学的原型を扱う。」

- 「第二部ではおもに受胎告知の主題に焦点を合わせる。」

「第三部では、前二章の隅に隠れていた風の亡霊を扱う。時間を示すものもあれば、単なる神人形的世界を超えて吹く風の切り子面を出現させるものもある。この最終章に収めた章では、風の奥底の解釈学、そのもっとも深いところで生じる渦巻きに触れる。ここには、踊るニンフ、レオナルドの〈スフマートsfumato〉、カイロスの急去来、アラクネのクモの巣が含まれる。」

- （「第一部　風／〈ルーアハ〉／〈ブネウマ〉をめぐる簡潔な人類学」より）

「風を研究することは、われわれの感覚の世界に対する関係を研究することである。この関係は、風を通してみるなら、三つの特殊な性格を帯びている。第一に風は、われわれの情緒に触れ、情感を解き放つ。風は、反大脳あるいは前大脳のなもので、きわめて直観的で感覚的な認識によって処理される。第二に風は、視角を最上位とし嗅覚と味覚を最下位におく、古典的でヘレニズム的な感覚のヒエラルキーに、したがわない。匂いや触感や味による、いわゆる「下位」の認知法は、風によって活気づけられる。風に関連する書力を扱う人類学の領域では、おもな注目点は、匂い、音楽、ダンスにある。風を研究することで、諸感覚の脱落や混合（共感覚）、そして、感覚序列の偶発性に対する洞察が得られる。最後に、風は力を与える。それはエネルギーの源である。（…）このことも、なぜ風が本質的に生命の現れ（生命の息）とみなされるのかということを説明する。風を活性化し、風を生み出すために、嵐に先立つどのような力も必要ない。風は常に原初的で、繰り返し起こりうるものである。このことは〈ルーアハ ruach〉というヘブライの基本的な原理を思いおこさせる。」

「概念の翻訳が意味の変化を引きおこし得ることは、よく知られている。これがまさに、ヘブライ語の〈ルーアハ ruach〉の翻訳で起こったことである。〈ルーアハ〉は〈ブネウマ pneuma〉としてギリシャ語に、その後〈スピリトゥス spiritus〉としてラテン語に翻訳された。この〈ルーアハ〉〈ブネウマ〉〈スピリトゥス〉の連鎖は、聖書のテキストや注解に深く根差し、「風」という概念をいくつかの方向に広げる一方で、本来の含意を別のものに限定した。」

「風は、環境や信仰との関係において、人物やその身体を定義する人類学的諸分野に属する。ヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語の認識モデルにおいて風は神の原初的力を、また、キリスト教においては聖霊すなわち〈神霊 Spiritus Dei〉を発する生命の精髓を、もたらすものである。」

- （「第三部　空気と動きの解釈学」より）

「風は、水と織物、空気と水、髪の毛と織物といった異なる物質間で、間を超えるような移動を可能にする。絵画的レベルで、〈各部分〉の融合は液体、絵の具、顔料の中で生じる。画家が、流体と絵筆をたださばくだけで、空気、水、織物を生み出す技巧に、同時代の観者は感嘆する。」

「風の――モチーフと〈パトス patoth〉の間の――解釈学は、身体を通して、身体から作動する自然現象と関わり、人間の想像力と宇宙の創造力の間に一定の関係を構築する。風は、連想的に連繋し、気まぐれで、とりわけ美りの多い創造的力を反映する。風、息、空気によってもたらされる創造の過程は、全感覚器に作用し、他の芸術的パラダイム以上に、絵画的媒体についての自己省察の能力を示している。特定の場合に、レオナルド・ダ・ヴィンチの視角芸術に関する懸解と同じように、この自己省察は急進的に、絵画や素描へ降りてくる〈ブネウマ pneuma〉となる。」

「カイロス、あるいは好機としての風を振り返ってみよう。語源的にも暗喩的にも、カイロスは「分裂」、標的、移行、通貨、開口部を通る進入などの分野で活躍する。ここから類推されるように、カイロスは求められるけれども、突然になすすべもなく飛び去ってしまう。彼はこうした性質を風と共有し、同じようにどこからともなく現れ、あっという間に消えてしまう。彼の揺れている前髪から、彼が風によって後ろから前へと進められていることがわかる。風と同じように、カイロスは自ら動いて移動する。彼は自力で動きながら空間を前進する。彼は風の原型的擬人化として、天使や精神の一門に属する。しかしながらカイロスは、風の諸相を人間の運命と結びつけ、また、運命の輪や、風車のように風からエネルギーや有効性を引き出す動的な輪と結びつける。要するに、カイロスの章は、人間の生命や運命を構造化するさまざまな派生物において、風がその解釈学的帰結に達する点まで、われわれを導いたのである。」

「人間と環境、人格と身体、この複雑な相互関係において、風は太古より、目に見えるものと見えないもの、死と生命、精神と肉体の間関係を通して考えることを可能にする、魅力的なモデルであった。風は、これら基本的な二分法を繋ぐ裂け目の組織である。キリスト教において、この二分法は、神学や図像解釈学の基盤となっており、それが受肉であった。聖処女への受胎告知は、あまりに深く、理解を超え、同時に根本的に革命的な出来事である――神は神的地位を失うことなく、そこで身体を帯びることを望んだ――ため、この逆説を類比的に具体化した自然の形における理解を、自らもたらしただけである。これを拡張することで、この逆説は、視覚芸術が可能にし、まためざされたものの主題、視覚的であることそのものの神秘となることでわれわれは、風がその解釈学的位置を占める最初の強力な瞬間の目撃者となる。人文主義において、風は絵画におけるブネウマ的なものに繋がられる。風は視角における挑戦となる。風は、媒体に忠実に、線とパレットによって間接的に把握されなければならない、そのもっとも深い秘密を、この視覚芸術にもちこむ。それはそのアニミズム的過去、原初の叫び、〈ルーアハ〉なのである。見よ！　今あなたは生きる！　レオナルドはこの神的起源の〈ルーアハ〉に芸術的個性を与えたいという願いを、他のどんな芸術家たちより強く、視覚的に表現した。」

「（風はある種の時間を如何に多く含んでいる）それは、通時的ではなく、それゆえクロノス（あるいは現行の線的時間モデル）には向けられておらず、むしろ、創造されかつ創造する時間の循環運動を示唆するような時間である。この「風の時間」は、生命はきまぐれで、変わりうるもので、予測不能である一方、この制御不能性が、あた美を含むという確信、つまり、何も過ぎざるものはないという認識に結びついている。宇宙の時間を受け入れることは、毛糸玉を端までほぐすような時間経験の広がりを意味する。これは、宇宙空間における人間の運命を示し、それを孤立させ、それを定義し、そして把握できるものとする、もうひとつの風のために道を拓く。それは、前髪をなびかせながら素早く動くカイロスを示すそよ風である。

この第二の風の時間は、流動ではなく、流れの中断であり、時間の裂け目である。ペールは引き裂かれ、かなたにある言表不能な神秘への口が開かれる。」

《目次》

〈ブネウマ〉 ——日本の新しい読者に向けた四つの回想 7

荒ぶるのは風 ——序に代えて 11

第一部 風／〈ルーアハ〉／〈ブネウマ〉をめぐる簡潔な人類学 19

1 風と環境、風と声、風と匂い 21

2 〈ルーアハ〉（RWH） 31

3 ヘレニズムからキリスト教へ ——〈ブネウマ〉から〈スピリトゥス〉へ 42

4 風の図像学へ向けて 54

第二部 受肉と昇華 71

5 受肉 ——どうして、そのようなことがありえましょうか 73

6 昇華 ——天使、耳、口、光、鳩 83

7 匂い ——言葉にできないもの 106

8 染み ——〈ブネウマ〉の形態としての大理石 125

第三部 空気と動きの解釈学 149

9 動きと図像解釈学の起源 151

10 レオナルドの〈ブネウマ〉的形態 166

11 カイロスあるいは好機 180

12 最後の契約 ——クモの巣の網 198

風の前の静けさ ——結びに代えて 207

著者あとがき 221

訳者あとがき 227

言語学には「語用論」という
統語論や意味論とは異なった
言語使用に関する研究領域があるが

本書の著者が述べているように
「哲学者たちが想定する会話やコミュニケーションが、
妙に偏って見える」というのはたしかだ

ある典型的な言語使用パターンが想定されていて
その理論にもとづいて言語使用が論じられる

これはほかの研究領域でも同様に
科学的に検証・証明されるといふときも
実験室内か特定の論理内でのそれにほかならないから

その「外」にでたときには
それらはかならずしも当てはまるとは限らず
むしろそれらの研究結果といふのは
おそろしく単純化された
いわば絵に描いた下手な餅のようになり
現実とずいぶんかけはなれてしまうことにもなる

さて本書では
「会話」が哲学されているが
その基本的論点は
コミュニケーションとマニピュレーションである

「マニピュレーション」という言葉は耳慣れないが
「発言を通じて話し手が
聞き手の心理や行動を操ろうとする営み」
いってみれば「企み」であり

それに対してコミュニケーションは
「言を通じて話し手と聞き手のあいだで
約束事を構築していくような営み」である

ポイントは「約束」と「責任」

コミュニケーションでは
話し手と聞き手のあいだの会話で
相互了解として約束事が構築されるが

- 三木 那由他
『会話を哲学する／コミュニケーションとマニピュレーション』
(光文社新書 光文社 2022/8)

マニピュレーションでは
話し手が聞き手に対して働きかける会話は
話し手がある意図をもって働きかけたとしても
通常のコミュニケーション的な会話レベルでは
「そんなこと言っていない」と言うこともできるので
「それによってどのような結果がもたらされるのか」という
「より一般的な行為の善悪の次元で責任を問う」ことが
求められると著者は示唆している

コミュニケーションにおいては言説的責任が
マニピュレーションにおいては倫理的責任が
問題になることを明確にしておく必要があるというのである

それらを説明するために著者は
現代日本の小説やマンガのシーンを例に挙げているが
それらを見るだけでも
「会話」は会「実は一枚岩の営みではなく、
そのなかいくつもの異なる営みが含まれている集合体」
としてとらえる必要があることは言うまでもない

わたしとあなたは
その会話で
なにをしているのか
なにをしようとしているのか
じぶんの行っている会話を意識するためにも

小説やマンガでの会話
テレビやネットでの会話を
ある視点をもってとらえなおしてみると
そこにはさまざまな「感情」や「意図」が
複雑に絡み合っていることがあらためて見えてくる



■三木 那由他

『会話を哲学する／コミュニケーションとマニピュレーション』(光文社新書 光文社 2022/8)

(「はじめに」より)

「会話とはどういった営みなのでしょうか？　ひとは会話をすることでいったい何をしているのでしょうか？　私は卒業論文でそうしたテーマに拘わる哲学者を論じて以来、大学院でも、その後の研究でも、ずっとこの問題に取り組んできました。

そんななかで少しずつわかってきたのは、「会話というのは、実は一枚岩の営みではなく、そのなかにかくつもの異なる営みが含まれている集合体なのではないか」ということでした。いったいいくつの営みが含まれていて、それらがどう関係しているのか、まだはっきりしたことはわかりません。でも、少なくともそれには「コミュニケーション」と「マニピュレーション」というものがあるのではないか、と考えています。（…）コミュニケーションは発言を通じて話し手と聞き手のあいだで約束事を構築していくような営みで、マニピュレーションは発言を通じて話し手が聞き手の心理や行動を操ろうとする営みです。」

「気になるのは、哲学者たちが想定する会話やコミュニケーションが、妙に偏って見えるということです。映画や演劇を見たり、マンガや小説を読んだりしたら、あなたたちの会話観では対処できなそうなやり取りはいっぱいあるのではないか、それなのになぜ自分たちのお気に入りの例で満足して、そうしたやり取りを真面目に取り上げようとしないか、そう感じていました。もちろん、私の見ている哲学者の範囲が狭すぎるのかもしれませんが。」

(「第一章 コミュニケーションとマニピュレーション」より)

「哲学研究の話をすると、実はこのようにコミュニケーションとマニピュレーションを分けるという発想は、そこまで一般的なものではありません。私が研究において主に参照しているのは二十世紀以降の英語圏の哲学で登場した概念や理論なのですが、この領域ではイギリスの哲学者であるポール・グライスが会話に関する重要で哲学的な議論を行っていて、いまでも会話に関して哲学的に論じるなら、まずはグライスを参照しないとならないというくらいには大きな影響力を持っています。（…）

そのグライスは、コミュニケーションをいわば一種のマニピュレーションだと捉えていました。どうということかというと、コミュニケーションを、何らかの発言や身ぶりをすることで、聞き手の心理や行為に影響を与えようとする行為として理解していたのです。

具体的には、コミュニケーションとは、聞き手の何かを信じさせようと意図して発話をおこなう行為だと考えたうえで、これだけではコミュニケーションの分析としては不十分なので、これにさらに「こんな意図も持っていなければコミュニケーションにはならない」「あんな意図も持っていなければコミュニケーションにはならない」といるいと条件を付け足していくことで、グライスはコミュニケーションというものを理解しようとしていました。

ここでは詳細を述べませんが、私はグライスのこの方針は、コミュニケーションを理解するにはまるで適していないものだったと考えています。コミュニケーションはそれによって約束事を積み重ねていく行為だと述べましたが、拳がっている例などを見る限り、グライスはどうもコミュニケーションを約束事の積み重ねのように見ること自体には同意しているように思えます。

けれど、約束事というものを、話し手が約束を交わすときにどんな意図をもっていたかによって分析するというのは、無茶に思えないしょうか？　まさかそんな約束をすることになるなんて思いもしないで約束事を交わすといったことが日常には溢れています。充分な説明を受けないで交わした契約などは、こうした点でトラブルになったりしますよね。

一般的に言って、約束事というのはひととひととのあいだのことであって、これはどうしたって、私ひとりの意図でどうできないような次元を含むものとなります。コミュニケーションにおける約束事もそうで、これはあくまで話し手と聞き手がふたり（かそれ以上）で交わすものなのに、そうした約束事を「話し手はどういう意図を持っていたか？」という観点だけで理解しようとしないのは、あまりうまいやりかたではないように思います。

そんなわけで、私としては会話を通じて構築されていく話し手と聞き手のあいだの約束事という側面に関わるコミュニケーションと、コミュニケーションを通じて話し手が聞き手に対しておこなおうと意図しているこというマニピュレーションを、しっかり区別して考えていこうと思っています。」

(「第七章 操るための言葉」より)

「コミュニケーションとマニピュレーションの区別を意識するとき、ひとつ言えることがあります。それは、マニピュレーションに関してはコミュニケーションとは別の仕方で責任を問う必要があるのではないか、ということです。

コミュニケーションにおいては約束事が形成されます。それゆえ、その約束事に対応した責任をコミュニケーションの参加者は負うことになります。話し手がその約束事に反したらば、「嘘つき」と非難されることもあります。コミュニケーションにおいてはこのように、「コミュニケートした以上はコミュニケートしていないことにはできない」という、いわば言説的な責任とでも言うべきものが生じます。

ですが、本章で見たようなマニピュレーションについてのこうした言説的な次元で責任を取ることを求めたとしても、それがそもそもコミュニケーションのレベルの現象でない以上、話し手は容易にその責任を回避できてしまいます。少なくとも当人はそのように考えて動くでしょう。「あなたが気にしすぎなんじゃない？」などと言って、マニピュレーションのレベルで伝わる事柄に関しては、話し手は「そんなこと言っていない」などと白を切ることができるのです。もちろんこれは、そうしたしらばっくれが倫理的に許容されるべきだということではありません。そうではなく、会話の仕組みからしてそのように白を切る発言をすることを止めたり責めたりする手立てが、コミュニケーションの場合と同じようには見つからない、ということです。

それゆえ、マニピュレーションに関して責任を求めるときには、別の道筋が必要となります。要するにマニピュレーションの責任を問う場合には、「自分の言ったことは言ったと認めよ」というコミュニケーションのレベルでの責任を問うのではなく、「それによってどのような結果がもたらされるのか」「そのような結果をもたらすということを予見してそうした発言をしているのか」といった。より一般的な行為の善悪の次元で責任を問うべきなのではないでしょうか。

言説的責任と倫理的責任をしっかり区別することが重要です。悪質なマニピュレーションをおこなっているように見える発言に責任を問う場面では。しばしば意図的にか意図せずか、この両者が混同され、本来は倫理的に善悪が問われるべき問題が言説的な責任のレベルで「言ったと認めるかどうか」の問題にすり替えられているように思えます。」

「私は心理学については専門ではないのであまり詳しいことはわからないのですが、少なくともコミュニケーション論的な見地からは、悪質なマニピュレーションは結果の善し悪しの点でその悪質さが問われるべきであって、それによってコミュニケーション的な約束事が形成されているのかだとか、その約束事に話し手が従っているかかだとかいったことを焦点にすべきではないように思います。そこを問題にしてしまうと、あまりに最初から発言者側にとって有利にことが進んでしまいますから。」

(「おわりに」より)

「会話というのは、たくさんのものが重なり合う場所であると、私は思っています。そこには話し手と聞き手の、私とあなたの接点があります。私とあなたがコミュニケーションを通じて約束事を形成したらなら、私とあなたはもう別々の存在ではなく、一個の「私たち」になって、その約束事に従った振る舞いをしていくことになるでしょう。

それとともに、会話において参加者たちはその個々人の心理を持っており、それぞれの動機から発言を行ないます。相手との約束事をきちんと形成したいから。わかっていることでも改めてしっかり言わせようとする、間違っているとわかっている事柄をわかっていないふりをするための共犯関係を築こうとコミュニケーションする、コミュニケーションをしないで済むからこそ、そうでないと打ち明けられなかったことを打ち明ける。

他方で、ひとは会話を通じてほかの人間をうまく操ろうともします。約束事にするのは避けつつ相手が自分の本心に気づくように操る、あるいは相手に気づかれないようにこっそりと相手の感情を煽る。

会話の背後のは、それぞれのひとの人生や感情があり、そして企みがあります。

そして、会話においてコミュニケーションがすれ違ったとき、話し手と聞き手の相互調整のなかで、社会という存在も会話の場に姿を表します。私があなたの上司であったとしたら、その社会的な位置付けがもたらす相互的な力関係がコミュニケーションの行く末に影響するでしょう。会話の参加者のあいだで社会的なマイノリティとマジョリティという差があるなら、それはそのコミュニケーションについて周囲の人間に語るときの影響力の差をもたらすでしょう。」

◎目次

はじめに

第一章 コミュニケーションとマニピュレーション

第二章 わかり切ったことをそれでも言う

第三章 間違っているとわかっていても

第四章 伝わらないからこそ言えること

第五章 すれ違うコミュニケーション

第六章 本心を潜ませる

第七章 操るための言葉

おわりに

本書で取り上げた作品

かつてプラトンは

「恋い焦がれる」ほど友を欲したが

結局のところ

「友とは何であるか

見つけることができなかった」という

本書の最後で著者も記しているように

「友だちがいることのほうが奇蹟的なのだ」

それなのに現代では

「いちねんせいに なったら」

「ともだちひやくにん できるかな」

(まどみちお／一九六六年)

だとか

「みんなともだち ずっとずっとともだち

がっこうにいても ずっとともだち」

「おとなになっても ずっとずっとともだち」

(中川ひろたか／二〇〇四年)

だとかいうように

物心ついたころから

「ともだち」をたくさんつくらなければならないよう

刷り込まれてしまっているところがある

そのひとつの象徴が

フェイスブックの「友達」でもあるが

「友だち」はますます軽くなり

軽いにもかかわらず

常につながっていなければならないように

私たちをしばりつけるような存在にさえなっている

現代における「友だち」は

奇蹟的に得られる「結果としての友人」ではなく

「形から入る友人」となっているのである

■石田 光規『「友だち」から自由になる』

(光文社新書 光文社 2022/9)



しかもその「友だち」は

「コスパの原理で判断」されたりもするような
つながりでもあったりする

そういえば浦沢直樹の漫画『20世紀少年』にも

「ともだち」という組織が登場するが

それはまさに「友だち」そのものが

シャドー（影）になっているのだともいえる

「友だち」を過剰に求めるというのは

「孤独」を過剰に恐れるということでもあるだろう

「孤独」「ひとり」はむしろ「孤立」の対極にあるのだが

「孤独」「ひとり」であることができないがゆえに

つながりの保証のような「友だち」を

求め続けてやまない病的な状態でもあるだろう

「友だち」を得ることは奇蹟である

生涯にひとりでも見つけることができれば

それだけでその生は奇蹟的な生ともなり得る

■石田 光規『「友だち」から自由になる』
(光文社新書 光文社 2022/9)

(「はじめに」より)

「『友だち』を主題とした本書は、友だちづくりの指南書ではない。むしろ、友だちをつくることを過剰に求める社会に、一石を投じるものだ。」

(「第一章 変わりゆく「友だち」より)

「友人・友だち・友情を語る言説をたどると、かなり古い時代までさかのぼることができる。今から二五〇〇年前、古代ギリシア哲学の時代には、友情をめぐる議論がすでに存在していた。そこでの言説を繙いても、友人・友だち・友情は「素晴らしいもの」として描写されている。」

「その一方で、現代と異なる傾向を見出すこともできる、たとえば、友人・友情の稀少性は今と較べるとかなり異なる。ギリシアの哲学者たちは、友人、すなわち、友情で結ばれたつながりを簡単には得られないものと認識していた。というのも、彼らは友人関係を、理想の人間関係が具現化されたものと見なしていたからだ。彼らは、友人関係を人が結ぶつながりの理想型と確定した後に、似たようなつながりのあり方を提示し、真の友情や真の友人関係とは何かを考察する。」

「友人をあるべき人編関係の理想像と見なしていた時代には、友人はつながりのあり方の到達目標ととらえられていた。ゆえに誰かと友人関係になるには長い時間がかかった。アリストテレスも、「友愛が育つには、さらに、時間と親密さが必要」と述べている。つまり、友人とは、長年つきあいを育ててやっと得られる可能性のある「奇蹟」の産物だったのである。」

「現代社会を生きる私たちの友人関係は、あらかじめ友人・友だちという枠を当てはめ、そこに合うように関係の中を調整することで成り立っている。このようなつながりは、「結果としての友人」と正反対の「形から入る友人」とでも言うべきものである。

(「第二章 友だちには本音を言えない」より)

「外に目を向けると、誰かと「友だち」にならなくても、人とつながる機会はいたるところにあふれている。そもそも、「かつて」であっても「友だち」がいた人はそれほど多くなかった。「友だち」がいなくても、けっしてさびしくはない。誰かと「友だち」になることを求められる社会では、そのように基本的な事実すら忘れてしまうのである。」

(「第三章 会えなくてもつながる友だち」より)

「友人関係が「形かた入る」ものに転じたころ、人間関係にはもうひとつの大きな変化が生じていた。私たちの人間関係は、一九九〇年代後半以降、目の前にいない人とのやり取りが顕著に増えたのである。」

「人と人を共生的に結びつける社会の拘束力が弱まり、つながりに感情の入る余地が増えてゆく。このような状況は、人びとのつながり方を変えると同時に、友人への注目を高めていった、しかしながら、友人の概念じだいは定義しがたく、曖昧である。また、友人関係を構成するどちらかが、相手を「友だちではない」と感じた瞬間から、つながりは存続の危機にさらされる。このような危機感を埋めてくれたのが、目の前にいない人をつなぎ止める役割を果たす情報通信ツールであった。情報通信ツールを使うようになったことで、曖昧であった交遊の記録が残され、私たちの人間関係にわかりやすい境界線が引かれるようになった。私たちは、情報通信ツールの残す「コミュニケーションの記録」を参照しつつ、友人とそうでない人の境界線を意識して行動するようになったのである。友人の境界線の内側に入るために肌身離さず情報通信端末をもち、端末の確認を怠らないようにする。常時接続の環境は、目の前にいない人との交流に、私たちを絶えずしばりつけているのである。」

「しかしながら、私たちの身体のさまざまな機能、文化・社会のさまざまなシステムは、おおよそ対面での交流をもとに築かれてきた。重要なのは、ケータイ、スマホの急速すぎる普及によって、その影響力の検証が口クになされないまま、つながりのあり方が変えられてしまったことだ。技術の進歩も重要だが、技術がもたらす帰結の検証も、それと同じくらい重要である。」

(「第四章 コスパで決める友だちづきあい」より)

「友人が「形から入る」ものに転じると、友人の資源としての側面が強調されてゆく。まさに、自らにとって役に立つかどうか重要になるのである。」

「つきあう相手をコスパの原理で判断する社会では、自らもコストの側に回るリスクをつねに負わされている。自らがコストに回らないよう、必死になってパフォーマンスを向上させながら友だちづきあいをする。このような状況はけっして心地よくはあまるまい。パフォーマンスを求められ続けることに疲れを感じた人は、結果として、パフォーマンスと関わりなく自己を見てくれる場、認めてくれる場を欲するようになる。昨今の居場所や生きづらさの議論の流行の背景には、このような社会状況が影響しているのである。」

(「第五章 「形から入る友人」関係を越えて」より)

「重要なポイントは、関係の流動化とともに、友人・友だち概念が蔓延し、私たちが必要以上に「友人・友だち」をつくるように意識させられてしまったこと。その一方で、「かつて」の人びとのように、安定的な関係を下地に、友情を育むほどの時間に恵まれていないことにある。以上の議論をふまえて私が提案したいのは、いったん、友人・友だち・友情といった概念から距離を置くことである。」

「友人・友だちというつながりは「むかし」も「いま」もできにくく、失われやすい。だからこそ、友だちがいないからといって過剰に卑屈になる必要はない。友だちがいることのほうが奇蹟的なものだから。」

◎目次

はじめに

第一章 変わりゆく「友だち」

第二章 友だちには本音を言えない

第三章 会えなくてもつながる友だち

第四章 コスパで決める友だちづきあい

第五章 「形から入る友人」関係を越えてあとがき

『葬送のフリーレン』がアニメになるらしい
そしてちょうど第9巻目が発売された

その9巻目の最後のところで描かれている
魔族マハトのセリフが
とても印象深いものだったので引いてみた

魔族マハトには
“悪意、や“罪悪感、といった
感情がわからない

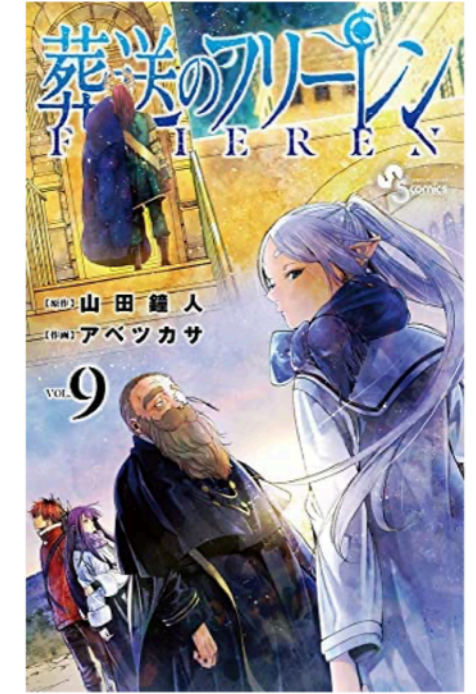
「魔族（われわれ）には、
人類にあって当たり前の
なんらかの感情が欠落している」

それに気づいたマハトは
「生まれて初めて
人類に興味を持った。
もっと知りたいと願った」

人間は「天使」でも「悪魔」でもない
霊学的には「自由の霊」として
位置づけられもする

エデンの園には
生命の樹と知恵の樹があり
決して食べてはならないと命じられていたが
善悪の知識を得る知恵の樹の実を食べて
アダムとエバはエデンの園追放され
死する存在となってしまう
“罪悪感、もそこから生まれた

モーセの十戒というものもある
それが与えられるまで
人類はそれらの「戒」を知らずにいたらしい
そのなかに
「殺してはならない」
「盗んではならない」
といったものもあるが
それらもまた“罪悪感、を生む



■原作・山田鐘人／作画・アベツカサ
『葬送のフリーレン（9）』
（少年サンデーコミックス 小学館 2022/9）

そして殺すことや盗むことなどを
積極的に行おうとすることは
それそのものが“悪意、であるともいえる

魔族にはそうした
“悪意、や“罪悪感、といった感情が欠けている

ある意味で
天使もまたそうした感情を持ちえないだろう
そして魔族（悪魔）の鏡像として
天使には“善意、や“良心、といった
感情が欠けているといえるかもしれない

つまりそうした感情は
魔族（悪魔）にも天使にも
自動的に働いていて
それらを「自由」において
働かせることができない
そうでしかありえない存在なのだ

もちろん人間すべてに
あらゆる感情が存在しているわけではなく
それらはみずからが「自由」において
育てていかなければならない

多くの人間は感情を未発達にしたまま
未熟な感情ゆえの愚かな行為を行ったりもするが
どれだけ感情を育てられたかが
人間が人間であるための存在証明であるともいえる

「自由」であるがゆえに
“悪意、や“善意、をもつこともできるし
“罪悪感、や“良心、をもつこともできる

そしてそれらの感情を持ち得ることで
みずからをみずからの理想へと育てることもできる

地上では人間を通じて
悪魔と天使が争っているともいえるが
両者の合わせ鏡としての人間でしかなし得ないことを
人間は課題としてもっているのだろう
まさに「自由の霊」として

■原作・山田鐘人／作画・アベツカサ
『葬送のフリーレン（9）』
（少年サンデーコミックス 小学館 2022/9）

「実に有意義な話しあいだった。
“共存を望んでいるのに
何故 殺し続けるのか？”

素晴らしい質問だったよ。
フリーレン。

その感性の違いを
理解することこそが、
人類との共存の道しるべになる。
そしてそれは
俺の目指す所だ。」

「好きなだけ
俺の記憶を見るといい。
そして共存のために殺し合おう。
フリーレン。

俺の探し求めていた
答えを見せてくれ。

切っ掛けは
本当に些細なことだった。
それはいつもの日常風景。

魔王様に命じられ
人類の村を一つ滅ぼした。
今までに滅ぼしてきた多くの村落の、
その内のたった一つ。

その村の神父は
“悪意、だの
“罪悪感、だの
そんな言葉をまくし立てた。

だがその神父は
今まで殺してきた人類とは何かが違う。

…どうした
突然 黙って。
命乞いを続けないのか？

…そうか…
…わからないのか？
…なんということだ…
可哀想に…

そのとき
ふとした疑問が湧いた。
言葉としては知っていても
俺はその感情を知らない。

恐怖はわかる。
怒りもわかる。
あれは哀しみだ。
わかる。
この感情は殺意。
怒りや憎しみからくるものだ。
それもわかる。

だが
“悪意、とはなんだ？
“罪悪感、とはなんだ？

魔族（われわれ）には、
人類にあって当たり前の
なんらかの感情が欠落している。
それはなんだ？

俺は生まれて初めて
人類に興味を持った。
もっと知りたいと願った。

(…)

相手を理解したい。
この感情も知っている。
(…)

俺は人類のことは好きになった。」

世界にはルールに厳しい〈タイトな文化〉と
そうではない〈ルーズな文化〉があり
それが国や地域の差異を生みだしている

という本書の視点は

単純すぎるともいえるが

そのわかりやすい対比の光に照らしてみること
見えてくるものはたしかにある

「タイトな文化は社会規範が強固で、逸脱はほぼ許容されない。
一方、ルーズな文化は社会規範が弱く、きわめて寛容」
「前者は「ルールメーカー」（ルールを作る者）、
後者は「ルールブレイカー」（ルールを破る者）」である

本書では「身近なコミュニティにとどまらず、
世界各地で見られる紛争や革命、テロ、
ポピュリズムのパターンについても、
タイトとルーズの差異で説明できる」としている

そしてその対比に目を向けることで

「周囲の世界について説明するだけでなく、

将来に起きる衝突を予想し、

さらにはそれを回避する方法を示すこともできる」という

その方法は「中庸」へ向かうことである

それに関する視点として

一八三七年にイギリスの作家ロバート・サウジーが書いた

童話『三匹のクマ』の主人公

ゴルディロックスという幼い女の子の

有名な話が引き合いにだされている

ゴルディロックスは

お父さんグマとお母さんグマの暮らす家に迷むが

ちょうどいい粥の暑さ

ちょうどいい椅子

ちょうどいいベッドというように

「そこで出会うすべてのものについて

最良のバランスを見出そうとする」という話だ

■ミシェル・ゲルファンド（田沢恭子訳）

『ルーズな文化とタイトな文化／

なぜ〈彼ら〉と〈私たち〉はこれほど違うのか』

（白揚社 2022/2）

タイトすぎる文化はルーズさでバランスをとり
ルーズすぎる文化はタイトさでバランスをとること
さまざまな問題が中庸へと向かい得るとのことだろう

これはタイトとルーズにかかわらず

対極にある重要な傾向性をバランスさせる

という視点の重要性ということでもあるだろう

そのとき重要なのは

「最も明らかで大事な現実こそ、しばしば最も見えにくい」

ということである

本書ではデイヴィッド・フォスター・ウォレスの語った寓話が
紹介されているが

水のなかにいる魚はじぶんが水のなかにいることに

気づかないでいるというものだ

タイトな文化のなかで当然のごとく生きているひとも

ルーズな文化のなかで当然のごとく生きているひとも

じぶんがその文化そのものを意識することはむずかしい

それらは「あたりまえ」「そういうものだ」

ということにとらえられて

それ以外の在り方が見えなくなっているということだ

じぶんにはなにが見えていないのかと問うこと

それは知らないということに気づくことでもある



■ミシェル・ゲルファンド（田沢恭子訳）

『ルーズな文化とタイトな文化／なぜ〈彼ら〉と〈私たち〉はこれほど違うのか』
（白揚社 2022/2）

（「はじめに」より）

「人の行動というのは、じつはその人を取り巻く文化が「タイト」か「ルーズ」かに強く影響される。文化がどちら側に属するかによって、社会規範の強さやその規範を強制する厳格さが異なる。どの文化にも、社会規範、すなわち許容されるふるまいに関するルールが存在し、ふだんは当たり前だと受け止められている。私たちは子どものうちに何百もの社会規範を学習する。たとえば人の手から物をひったくってはいけないとか、歩道では右側（住んでいる地域によっては左側）を歩けとか、いつも服を身につけるなどというのがそれだ。さらに私たちは生涯にわたって新たな社会規範を学び続ける、葬儀には何を着ていくべくか、ロックコンサートや交響楽団の公演ではどうふるまうべきか、婚礼や礼拝などのさまざまな儀式をどう執り行うべきか。社会規範は、集団を団結させる接着剤のようなものだ。私たちにアイデンティティを与え、新たなかたちで互いに協調するのを助けてくれる。だが、その接着剤の「強さ」は文化によって異なり、それによって私たちの世界観、環境、さらには脳にも大きな影響が生じる。

タイトな文化は社会規範が強固で、逸脱はほぼ許容されない。一方、ルーズな文化は社会規範が弱く、きわめて寛容だ、前者は「ルールメーカー」（ルールを作る者）、後者は「ルールブレイカー」（ルールを破る者）と言える。」

「身近なコミュニティにとどまらず、世界各地で見られる紛争や革命、テロ、ポピュリズムのパターンについても、タイトとルーズの差異で説明できる。世界のどこへ行ってもタイトとルーズを分断し、文化内の結束を強めるとともに文化間の隔たりを広げる。この隔たりは派手なニュースになるものばかりではなく、日常の人間関係の中で露見することもある。

タイトとルーズの対比に目を向ければ、周囲の世界について説明するだけでなく、将来に起きる衝突を予想し、さらにはそれを回避する方法を示すこともできる。」

（「9 ゴルディロックスは正しい」より）

「一八三七年にイギリスの作家ロバート・サウジーが書き、二〇以上の言語に翻訳されている愛らしい童話『三匹のクマ』は、クマが家に住み、粥を食べ、言葉を話すという魔法の世界に読者を引き込む、こんな現実離れた要素を持ちながら、ストーリーはもっぱら中庸の論理に支配されている。ゴルディロックスという幼い女の子が、お父さんグマとお母さんグマの暮らす家に迷い込み、そこで出会うすべてのものについて最良のバランスを見出そうとするのだ。粥の入った器を三つ見つけると、一つ目は熱すぎて、二つ目は冷たすぎ、三つ目がちょうどいいと言いきる。次ぎに三つの椅子の座り心地を確かめて、大きすぎず、小さすぎない、ちょうどいいのを見つける。最後に三つのベッドを試し、難すぎず、柔らかすぎず、ちょうどいいと思った赤ちゃんグマのベッドで寝入ってしまう。

今ではバランスや中庸の価値について語るとき、この有名な童話が引き合いに出され、この女の子の名前をつけた「ゴルディロックスの原理」という理論がさまざまな分野で取り沙汰される。」

「タイトまたはルーズの最適なレベルというのは、文化ごとにそれぞれの環境に応じて異なるかもしれない。それでも確かなことが一つある。タイトにせよルーズにせよ、極端なのはどんな集団にとっても最適ではないのだ。政府と国民がタイトとルーズのゴルディロックスの原理を念頭に置けば、極端に走ることにあって問題が生じるのを防ぐ助けとなるかもしれない。」

（「11 社会規範の力を利用する」より）

「二〇〇五年、ケニオン大学の卒業式のスピーチで、アメリカ人作家の故デイヴィッド・フォスター・ウォレスは卒業生に古い寓話を紹介した。「二匹の若い魚が一緒に泳いでいると、年長の魚がこちらに向かって泳いでくるのに出くわします。年長の魚は若い魚たちにうなずいてからこう言います。『やあ、君たち、水の具合はどうだ?』。二匹の若い魚はしばらくそのまま泳ぎ続けますが、やがて一匹がもう一匹の方を向いて尋ねます。『水って何?』と」

「この魚の物語が言いたいことは、最も明らかで大事な現実こそ、しばしば最も見えにくいものだ、ということに尽きます」とウォレスは説明した。

社会規範は人類とともに誕生し、きわめて困難な状況でも私たちがこの地球上で協調して生き延びるのを助けてきた。社会規範は日ごるから私たちのまわりにあり、私たちの経験を形づくり、人との交わりに影響する。ところが自分を取り巻く水というのがどんなものかわからない魚と同じように、私たちは社会規範が暮らしにどのくらい行き渡り、私たちがどれほどそれを必要としているのかについてめったに意識しない。」

「世界が驚異的に変化する時代に、私たちは「文化による条件反射的な反応」を変える覚悟が必要だ。監視と自律をうまく組み合わせることにより、アイスランドはティーンエイジャーの飲酒を減らし、レディットは不愉快な「荒らし」行為を取り締まることができた。その一方で、CAREはケニアで何世紀も続いてきたタイトなジェンダー規範をゆるめて避妊を増やすことに成功した。サウジアラビアでは二〇一七年、王太子のムハンマド・サルマンがサウジ社会の大幅なルーズ化に着手した。彼は映画館を再開させ、女性に車の運転を認めるといった施策を実行している。文化を変革することによって、強く求められている経済の成長と改革を促進できると確信しているからだ。私たちはあまりにルーズになっているときにはタイトな引き締めを図り、タイトになりすぎているときにはルーズにゆるめることによって、世界をもっとすばらしい場所にすることができると。

これから私たちは世界の大きいなる多様性に触れ続けていく。そのときに、常に考えてほしいシンプルな問うがある。それは「タイトかルーズか」という問いだ。」

◆目次◆

はじめに

第1部 基礎編——社会の根源的な力

- 1 カオスへの処方箋
- 2 「過去」対「現在」——変わるもの、変わらないもの
- 3 タイトとルーズの陰と陽

第2部 分析編——タイトとルーズはどこにでもある

- 5 タイトな州とルーズな州
- 6 「労働者階級」対「上層階級」——文化にひそむ分断
- 7 タイトな組織とルーズな組織——思いのほか重大な問題
- 8 セルフチェック——あなたはタイト? それともルーズ?

第3部 応用編——変動する世界におけるタイトとルーズ

- 9 ゴルディロックスは正しい
- 10 文化の反撃と世界の秩序/無秩序
- 11 社会規範の力を利用する

唐の都・長安の時代に惹かれる

石田幹之助『長安の春』で紹介された
西域の歌舞・音曲・雑技
とりわけソグドの「胡旋舞」
そして祆教・景教・摩尼教
つまりゾロアスター教・
ネストリウス派キリスト教・マニ教
それらが長安で展開されている時代に

空海は恵果から

『大日経』にもとづいた「胎蔵」の教義と
『金剛頂経』にもとづいた「金剛」の教義を学び
それを日本に伝え真言密教を興す

恵果から学んだことは

そのほとんどが不空と般若に由来する
不空の没年と空海の生年とは完全に重なり合い
空海は不空の生まれ変わりだとされてもいる

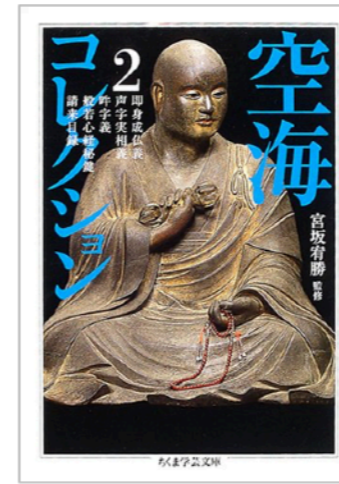
そして不空も般若も

ソグド人たちと深く関係している
そしてその背景には
祆教・景教・摩尼教があり
空海の密教は仏教といいながら
ほとんど釈迦仏教とは異質な教えである

当時の長安における密教は

祆教・景教・摩尼教なくしては
そしてソグド人たちからの影響なくしては
成立しえないものだったともいえそう

そして不空の教えが「安祿山の乱」など
政治的なものと深く関わっていたように
空海の密教もまた「請来」にあたって
「護国」の思想と深く関わっている



その「護国」とは

その教えを生んだのが漢人ではなく
ソグド人などの異邦人だったように
「異邦人たち、マイノリティたちを決して排除しない
「国」を収める主、「王」を守護するという教え」である

ある意味で空海の説く「即身成仏」は

「国」をも「即身成仏」させんとする
意図をもっていたのかもしれない
つまりすべての人間そして「国」そのものが
「大日如来」と化すること…

唐の都・長安の時代に惹かれるのは

空海のそんな壮大なヴィジョンに憧れるとともに
異邦人たちが集まった世界に
さまざまな文化や思想が集まり
そのなかで胡旋舞が舞われている…
そんな長安にいる異邦人の自分を思い出すからかもしれない

- 安藤礼二「空海 第六章「不空」／連載第八回」
(『群像 2022年 10月号』講談社 2022/9 所収)
- 空海「請来目録」
(宮坂 宥勝『空海コレクション2』
ちくま学芸文庫 筑摩書房 2004/11 所収)
- 石田 幹之助『長安の春』
(講談社学術文庫 講談社 1979/7)

- 安藤礼二「空海　第六章「不空」／連載第八回」（『群像 2022年 10月号』講談社 2022/9　所収）
- 空海「請来目録」（宮坂 宥勝『空海コレクション 2』（ちくま学芸文庫　筑摩書房　2004/11　所収）
- 石田 幹之助『長安の春』（講談社学術文庫　講談社　1979/7）

（安藤礼二「空海　第六章「不空」／連載第八回」～「1　安祿山」より）

「空海は唐へ渡ることによって、文字通り「空海」となった。」

「仮名乞児はいかにして「空海」となったのか。空海がその内実を、内外に向けて宣言したものが、唐からの帰国直後である大同元年（八〇六）一〇月二二日という完成の日付をもち、太宰府でまとめられた『請来目録』であった。」

「空海は、（…）恵果から「密蔵」の教え、つまりは「兩部の大法」、『大日経』にもとづいた「胎蔵」の教義と『金剛頂経』にもとづいた「金剛」の教義を実際に学び、二つの曼荼羅を構成する「諸尊」との「瑜伽」の方法を実際に習ったとされるのである。」
「しかしながら、この『請来目録』全体を通して考えるならば、恵果とは、なによりも不空の「弟子」であったことこそが、空海にとって重要であったと理解される。空海が、この極東の列島にはじめて請来した經典類の大部分―――そのほとんどすべて―――が不空による新訳の經典類であり、その他の多くも、あるいは不空の意図に沿うようにして、もしくは不空が確立した教義の特色を浮き彫りにするようにして、形を整えた經典類ばかりであったからだ。恵果から空海へと付囑されたのは思想ではなく「もの」に過ぎなかった。」
「空海は、恵果を介して、恵果の師である不空の「思想」をこそダイレクトに引き継いだのである。『請来目録』は、そのすべてを費やして、ただそうした事実のみを伝えてくれている。しかもその上、不空の没年と空海の生年とは完全に重なり合い、その入滅と誕生の日―――六月一五日―――は完全に一致していた。自分は不空の生まれ変わりであり、それゆえに時間と空間の隔たりを超えて、恵果という生き証人を介して、その教えを引き継ぐことが可能になったのだ。空海は、そのような思いを抱いていたはずだ。」

「天宝年間、南天竺から唐に渡った不空は玄宗をはじめとして肅宗、代宗という三代にわたる皇帝たちに灌頂を授け、正真正銘の国の師、皇帝に対する宗教的な指導者となった……。空海はそのように述べているが、実際に不空が帝国の宗教的な指導者となるためには、帝国にいったんは破滅をもたらした「敵」と正面から対峙する必要があった。そのことが、不空の思想、つまりは空海の思想を、極東の歴史のみならず、世界の歴史へと接続していくのである。帝国にとって最大の脅威となった者を政治的、宗教的に凌駕していく。そのことによって不空は帝国の宗教的な指導者ばかりでなく、政治的な指導者ともなっていった。帝国にいったんは破滅をもたらしたその「敵」の名は、安祿山という。」

「安祿山を宗教的にも政治的にも量がする。そのようにして帝国の宗教的かつ政治的な指導者となった不空の後を、代宗から徳宗の時代に継いだのが恵果であった。」

「『請来目録』に記された金剛乗の始祖たちのうち、いわゆる歴史的な個人として存在するのは、不空の師である金剛智、不空、そして不空の弟子である恵果の三人のみである。龍猛と龍智はともに神話的な存在であり。その龍猛と龍智を介して、毘盧遮那如来（大日如来）と金剛薩埵という歴史的にも神話的にもこの現実を超越した、根源的な語り手と根源的な聞き手という「対」へとその系譜がたどられていくのである。逆に考えれば、金剛乗密教とは、現実的には、ただ不空によってのみ準備され、完成され、後世に伝えられた、まったく新たな教えであったということもできる。空海は、我が教えの「祖」に不空を位置づけていた。そしてまた、この系譜のうちに、あらゆる仏教すべての始祖、釈尊ことゴータマ・シッダッタの存在する余地はない。」

「恵果と同等に、あるいはそれ以上の重要な役割を果たしたと推定されているのが、やはり空海が『請来目録』のなかにその名を残した「梵語」の師であった般若三蔵である。不空から般若へ。そこにこそ金剛乗の、真の意味での完成が見出されるはずである。

「金剛乗の教義をまとめた不空も般若も、純粋な漢人ではなかった。空海は、不空の出生地を（…）一貫して「南天竺」と記している。『金剛頂経』、つまりは金剛乗を可能にした、宇宙大の唯一の書物が生まれたとされる地である。」

「般若が生まれたという罽賓国は、現代のインドとパキスタン、さらには中国とも国境を接しているカシュミール近辺に存在していたという。複数の文化的アイデンティティを生きざるを得ない人物であった。不空も般若も、空海と同様、異邦人であった。仏教とは、異邦人たちの宗教だったのである。しかも、不空と般若の両者とも「胡人」たち、ソグド人たちと密接な関係をもっていたと推定されている。ソグド人たちは、この当時、唐の地に、三夷教と総称される異邦の宗教、祜教・景教・摩尼教、すなわちゾロアスター教・ネストリウス派キリスト教・マニ教をもたらししていた。（…）不空と般若は、そのようなソグド人ネットワーク、「雑種胡人」のネットワークのなかで、金剛乗密教の教義を磨き上げていったのである。」

「不空の金剛乗が明確な大系をもちはじめるのは、安祿山の乱が平定された後からのことである。不空と般若による金剛乗とは、ソグド人たちがもたらした三夷教との反撥と共振のなかではじめて形をなしたソグド人たちの仏教でもあった。」

- （安藤礼二「空海　第六章「不空」／連載第八回」～「2　般若」より）

「神の預言のうちに、肉の身体と光の精神―――光の身体―――を重ね合わせたマニ教。そして、イエスの身体のうちに人性と神性との「連結」を見出し、人間が神に近づいていく自由を保障したネストリウス派キリスト教、そのいずれもが、ソグド人たちに受容されていったことは偶然ではなかったはずだ。ソグド人たちによって長安にもたらされた、異邦に起源をもつ三夷教、祜教・景教・摩尼教、つまりゾロアスター教・ネストリウス派キリスト教・マニ教は、まったく別のもではなかった。相互に関連し合う教えであった。そしてまた、漢文化圏に生きる人々にとっては、仏教もまた、異邦に起源をもつ教えであった。漢文化圏に自生した二つの宗教、儒教および道教（老荘思想）と緊張関係を保ちながら、徐々に相互浸透していったのであある。」

「空海は、不空に源泉をもち、般若によって完成した「護国」の思想とともにあった。その「護国」は、異邦人たち、マイノリティたちを決して排除しない「国」を収める主、「王」を守護するという教えであった。もちろんその「王」には、破壊の側面、悪の側面も存在する。しかし、真の「王」とは、自己の内なる破壊、自己の内なる悪を、他者との外なる関係の構築、他者に対する善の贈与へと変換できる者のことであった。「王」とは人々の生き方のモデルであり、その目標であった。不空は、般若は、大唐帝国にとって故郷をもたない他者であり、放浪者であった。だからこそ、他者であり放浪者であるソグド人たちの仏教を組織することができた。ソグド人たちの故郷、サマルカンドで仏教が隆盛したという証拠は、いまだに見出すことができない。サマルカンドまで仏教は入らなかったのだ。ソグド人たちは故郷を離れることで他者の宗教である仏教を受容したのである。空海にとっても、おそらくソグド人は未知で異質な存在ではなかった。唐を離れる直前、空海は自らの求法の旅を、鑑真の求法の旅に重ね合わせていた。鑑真に付き従ってこの極東の地を訪れ、そこで僧侶となった安如宝は、「安」という名字をもつことから、ソグド人であったと考えられている。唐招提寺に嵯峨天皇から封戸五〇戸を恩賜されたとき、如宝に代わって嵯峨帝に謝辞を認めたのは空海であった。空海は、いついかなる時においても、異邦のソグド人とともにあったのである。」

（石田 幹之助『長安の春』～「隋唐時代におけるイラン文化のシナ流入」より）

「漢魏六朝を通じて徐々にシナに入って来たイラン方面の文化は隋唐の時代におよんでいっそういちじるしい流伝をみるにいたった。シナと外国文化との関係においてシナの歴史をみるならば、隋唐はまさにイラン文化全盛の時代といっても過言ではなく、宗教・絵画・彫刻・建築・工芸・音楽・舞踊・遊戯等の各部門はもとより、衣食住、ことに衣食の両方面において、広くイラン文化の感化をみることができる。」

「宗教ではイランの国教ともいべきザラトゥーストラ教をまず第一にあげなければなるまい。」

「この時代に東伝してシナに行われたイラン系宗教の第二はマニ教である。」

「この時代に西方より東方へ伝わった宗教の第三は耶蘇教の一派たるネストリウス派、すなわちシナにいわゆる景教である。」

☆mediopos-2865 2022.9.21

とくにここ数年にわたり
沓掛良彦氏の著作からさまざまな影響を受けているが
ギリシャの詩歌もそのひとつ
そのなかでも重要なのはサッフォーである

サッフォーは
プラトンが十番目の詩女神（ムーサ）と
讃えているにもかかわらず
そしてかつて本格的にその作品が編纂され
千年の後にも九巻からなる羊皮紙に
纏められていたにもかかわらず

ビザンツ帝国において火中に投げられ
十一世紀にはローマ教皇の命により焚書が実行され
断片的に引用されているものを除けば
その作品は完全に失われていたと思われていたが

一八九六年から翌九七年にかけて
ギリシア語を記した大量のパピルスが出土し
サッフォーの詩断片が発見され
さらに他にも羊皮紙に記された詩篇の発見などが続く

現在接することのできる作品は
「アフロディーテー禱歌」をのぞけば
すべて断片ばかりだが
それでも現代のわたしたちは千年ぶりに
十番目の詩女神サッフォーの作品に出会うことができる

大量のパピルスが出土したころ
エズラ・パウンドもその影響からか
一九二六年刊行の『大祓』Lustraに
「パピルス」という次のような詩を詠んだという

Spring……
Too long……
Gongura……



そこに記されたゴンギュラという名は
断片的に残されているサッフォーのテキストのなかに
わずか二回しか現れてはいないという
そしてゴンギュラは魅力ある女性であるという以外
何者なのかわかってはいないらしい

四方田犬彦氏はそのエズラ・パウンドの影響で
「ゴンギュラ」という名に魅了される

「もはや真実の形状は定かではなく、
復元する試みは不可能に近い」
トルソのように追憶の隠喩をそこに見出し
失われて永遠に戻ることはない〈古代〉なるものを認め、
あてどもない夢想の世界に遊ぶ」のだという

もはや復元できる見込みのない
残された数多くの断片であるがゆえに
浮かび上がってくるあてどない夢想

失われたがゆえに
その失われたもののなかから
あらわれてくる詩女神（ムーサ）の声に
耳を傾けることができるのかもしれない

- 沓掛 良彦『サッフォー—詩と生涯』（平凡社 1988/11）
- 高橋睦郎「断片を頌歌に サッポオへ」
（『現代詩手帖2022年9月号』（思潮社 2022/8）所収）
- 高橋睦郎・沓掛良彦・伊藤比呂美「古典のほうへ、遠く遠く」
四方田犬彦「ゴンギュラ」
（『現代詩手帖 2016年 09 月号』（思潮社 2016/8）所収）

高橋睦郎氏は「連載詩・あなたへ
過去という名の未来への問いかけ」の「その十一」に
「断片を頌歌に」ということで
このサッフォーをとりあげ詩を捧げ
その最後に次のように詠っている

「拾い集めた僅かな珠玉の断片を頌歌（ほめうた）に 十番目の詩女神
むしろ二番目の愛の女神として あなたを復権しなければ」

サッフォーを「二番目の愛の女神」としているが
いうまでもなく一番目は「アプロディテ」である

- 沓掛 良彦『サッフォー―詩と生涯』（平凡社 1988/11）
- 高橋睦郎「断片を頌歌に　サッポオへ」（『現代詩手帖2022年9月号』（思潮社 2022/8）所収）
- 高橋睦郎・沓掛良彦・伊藤比呂美「古典のほうへ、遠く遠く」四方田犬彦「ゴンギュラ」（『現代詩手帖 2016年 09 月号』（思潮社　2016/8）所収）

（沓掛 良彦『サッフォー―詩と生涯』～「サッフォー頌『ギリシア詩華集』より」より）

「　　十番目の詩女神（ムーサ）　　プラトーン

詩女神らは、数え上げれば
九柱おいでだ、などと
言う人もあるが、
何と迂闊な！
ほれ、レスボスのはぐくんだ
あのサッフォーに
お気付きならさぬか、
あれこそは十番目の詩女神なるものを。

（『ギリシア詩華集』九、五〇六）

（高橋睦郎「断片を頌歌に　サッポオへ」より）

「受難は生きている間にかぎらない　死後の迫害だって大いに在る
土を掘り返しての墓暴き　骨が掘り上げられての鞭見舞
それにも勝る仕打ちをあなたは受けた　しかも千年の余ものち
九巻もあったという詩篇が　あらゆる書庫から逐い出され
裁きの広場に積み上げられ　罪状朗読と共に火をかけられた
十番目の詩女神との誉れを受けたあなたの　輝かしい遺児たちが
理由は生前のあなたが　良家の娘らを悪しき道へ導いたという科」

（「高橋睦郎・沓掛良彦・伊藤比呂美「古典のほうへ、遠く遠く」」より）

「伊藤／古典詩の作家たちは、古代の人たちですよ。私たちのように、対象との距離をはかって書くというのでもないし、自分、自我が中心ではない。どんなふうに書いていたんですか。沓掛／必ず何か具体的な現実があって、それを詩にしている。自分の周りにいる人を思い浮かべて、その人たちに聞かせるために書いている。そこが近代と大きく違いますね。あと、詩といいますが、叙情詩はすべて歌で、豎琴の伴奏で歌われるものなので、詩人はシンガーソングライターです。伊藤／その言葉は、まったくオリジナルですか。それとも、世間で流布していたものを利用して自分なりのものをヴァリエーションとして作っていたんですか。沓掛／基本的には、例えばサッポーの場合は、レスボス島の方言を使っていますが、ホメロスの影響も受けています。やはり日常言語を磨き上げて歌の言語にしたのではないかと思います。伊藤／古代の人たちって、私たちと違う意識で言葉に対していたと思うんですよ。もっと言葉が社会のものだったかもしれないし、人の声を聞き取って代弁していたかもしれない。こうして後世に名前の残っている詩人たちの意識は、どうだったんでしょう。沓掛／共同体をバックに書かれていますね。顔の見えない、不特定の人を思い浮かべて書くということはない。あと。ギリシアには純然たる想像から生まれる作品はあまりなくて、現実的な事象から出発している作品が多い。サッポーなどは独吟詩人と呼ばれていて、私たちの意識に近いかもしれませんが、近代詩の意識とは大きなずれがあると思います。ヘレニズム時代には自分の詩に名前を刻印することが始まっていますが、今の現代詩に比べると公共的な色彩が強いです。機会詩（オケージョナル・ポエム）も多いですね。」

（四方田犬彦「ゴンギュラ」より）

「沓掛良彦『サッフォー―詩と生涯』には、一篇を除けば、断片として現在かろうじて残されているサッフォーの詩行が収録されている。加えてそこには註として、それらが二千年にわたり、いかなる迫害と賞賛を受けて北か、その子細が詳細に物語られている。

　　サッフォーの詩作品は、あるときまでは本格的に編纂され、九巻からなる羊皮紙に纏められていた。アレクサンドレイアの大図書館が殷賑を極めていたころ、それはホメーロスの叙事詩とともに、文献学者が校訂批判の情熱をさしむける対象であった。古代ギリシアの哲学者から弁論家、文法家、文芸批評家、詩論家の数々が、敬意をもってその詩を著作に引用し、陶工はそれを陶器の表に刻み込んだ。少女たちとの快樂に生きる奔放な恋の詩人という映像が、このとき作り上げられた。だがこの女性詩人は古代末期に、思いがけない受難を体験することになった。キリスト教を奉じるビザンツ帝国はサッフォーの詩を淫売婦の手になるものと罵倒し、次々と火中に投じたという。アレクサンドレイアの大図書館炎上に次ぐ大愚拳である。だが厄難はそれに留まらない。十一世紀にはローマ教皇の命により、さらなる焚書が実行された。こうしてサッフォーの作品は完全に地上から消滅したと、公式的には信じられた。」

「サッフォー研究において決定的な事件は、一八九六年から翌九七年にかけて起こった。ナイル河畔のキュノポリスに近いオクシュリンコスで、ギリシア語を記した大量のパピルスが出土した。そこにアリストテレスやエウリピデス、ソフォクレスの失われた断片などに混じって、少なからぬサッフォーの詩断片が発見されたのである。前三世紀から七世紀まで、およそ九百年にわたって記されてきたパピルスの状態はけっして良好とはいえず、それを解読することはきわめて困難に思われた、にもかかわらず、この事件とが別に羊皮紙に記された詩篇の発見などが続き、今日のわれわれが接することのできるサッフォー作品は飛躍的に増大した。もっとも断片ばかりが残存する詩を前に、作品全体の主題を推し量ることはきわめて困難な作業であり、個々の断片の解釈や補填に仕方には、研究者によってさまざまな立場があるように思われる。」

「沓掛良彦が訳したサッフォーの詩集を、というか正確にはおびたしい詩の断片を読み進めていくうちに、わたしのなかにある映像が甦ってくる。（…）かつては土地をしろしめす女神の像として、均衡のよい乳房と聰明そうなしぐさの腕をもち、揺れる裳裾の間に屈強な腰を覗かせていた大理石の像が、度重なる強奪と運搬、宗教的不寛容からくる棄損によって首を切断され、四肢を挽ぎ取られた、今ではかろうじて中央の胴の部分だけを残している。あるいは鼻を削られ、唇の膨らみを欠落させた頭部だけがいくつも並んでいる。いかに優れた修復者の手によっても、もはやここまで喪失された部分を補填することはできないといった態のさまざまなトルソ。（…）

トルソとは追憶の隠喩である。そのかみ、事件が生じた直後には鮮明であった記憶は、世代を経、人から人へと伝えられていくうちに細部を脱落させてゆく。他の物語と結合し、全体がひどく簡略化されていく。人は何かを想い出そうとする。だがもはや真実の形状は定かではなく、復元する試みは不可能に近い。われわれの追憶とはすべてそのようなものだ。いかにそれが美と崇高に満ちたものであったとして、われわれに手にすることができるのは、残酷にも砕き割られた断片であったり、表面が丸く磨り減ってしまった断片の表面でしかない。」

「今日読みうるかぎりのサッフォーのテキストにおいて、ゴンギュラ、Γονγυλαという名前はわずか二回しか現れていない。（…）ゴンギュラとは何者だろうか。この断片を読むかぎり、彼女はアヴァンティスの心を奪った、魅力ある女性のような。（…）それにしても「ゴンギュラ」という名前の美しさ。ここには祭祀と微かなグロテスクの結合がある。それは口にするだけで古代が蘇生してくるかのような、神秘的な音の連なりではないだろうか。この出自も正体もいっこうに不明な女性は、わずかにサッフォーの二篇の詩に名前を留めたことで、今もってその名前を口遊まれるのである。（…）ここでわたしがなぜ彼女の名前に魅了されたかを、告白しておかなければなるまい。そもそもの契機は、サッフォーを知るはずか以前に、エズラ・パウンドが一九二六年に刊行した『大祓』Lustraに収録した「パピルス」という詩を詠んだことにあった。当時のパウンドはイマジズムの立場から日本の短詩に深い関心をもっていたこともあり、俳句の形態を真似て、わずか三行の短い作品を書いた。

Spring…………
Too long…………
Gongura…………

　　わざわざ翻訳する必要もないかもしれない。「春…………. 永すぎる…………/ゴンギュラ…………」詩に「パピルス」という題名が付けられているのは、やはりオクシュリンコスでのパピルス大量出土「つい今しがた」の事件であって、サッフォー研究者たちがいまだ興奮の渦中にあったことに関係している。（…）

　　ある種の美術家はさまざまに小さなオブジェをガラス箱の内側に閉じ込め、箱の全体をもってアートと名付ける。パウンドの詩的实践はそれに似ていなくもない。彼は夥しいサッフォーの断片のなかからただ一つ、「ゴンギュラ」という言葉だけを選び出し、それを透明感に満ちたガラスの額縁のなかに飾った。ガラス箱を覗き込む者は、この言葉の奥に、失われて永遠に戻ることはない〈古代〉なるものを認め、あてどもない夢想の世界に遊ぶのである。」

古道具店「ATLAS」店主・飯村弦太は
2017年南フランスの蚤の市で
100枚ほどの花の標本が収められた箱を見つける

その「まるで絵を描くように、
枝葉や花片がていねいに台紙に配置され、
ごく小さな薄紙で留められている、
あまりに美しい植物標本の数々」に魅了され
標本を箱ごと譲ってもらい
その年の秋には展覧会をひらくことになる

作者はポール・ヴァーゼン
二十世紀初頭に
スイスとフランスの国境近くの
山や草原で摘まれた植物標本で保存状態もよく
一世紀ほどが経っているにもかかわらず
「揺られていた頃の色合いを淡くたたえながら、
美しくその姿をとどめていた」という

本書には採取地と学名・和名の索引つきで
その植物標本95点が紹介され
さらにポール・ヴァーゼンと植物標本をめぐる
堀江敏幸の書き下ろし「記憶の葉緑素」が収められている

その物語はポール・ヴァーゼンの植物標本を目にして
かつて語り手が三十年近く前の旅の途中
長距離バスの乗り換えまでの二時間ほどのあいだに見つけた
古道具屋「オロバンシュ」の店主から聞いた
植物採集の話の想い出す話だ
そこにポール・ヴァーゼンについての挿話が入る

「オロバンシュ」の店主の話のなかで印象に残るのは
サン・ピエール島でリンネの『植物哲学』を片手に
植物採集するルソーの話だ



店主はこう語る

「植物を愛するのは人を愛するのと同じです、と
《オロバンシュ》の主人は迷いなく言い
「有名な力所はいくつもありますが、
とくに好きなのはこのくだりなんですと
嬉しそうに読み上げた。

「あるドイツ人は、レモンの皮について
一巻の書物を書いたということだが、
わたしは牧場の芝草の一つ一つについて、
一巻の本を書いたかもしれない」

《オロバンシュ》orobancheという店名の由来は
葉緑素のない寄生植物の一種で「ハマウツボ（浜靱）」
なのだという

その店主は叔父から店を譲り受けたのだが
その名はその叔父がつけたもので
「おれは人様の世話になるばかりで
なにもしてないような男だから、
ほんとうは《パラジット》にしたいんだが、
寄生虫の意味もあるからさすがによくない。それで植物にした」

■ポール・ヴァーゼン・堀江 敏幸・飯村 弦太
『ポール・ヴァーゼンの植物標本』
(リトル・モア 2022/7)

「記憶の葉緑素」という題はそこからきている
語り手はいう

「私たちの記憶には、
ほんとうのところ葉緑素がないのかもしれない。
色あせた植物標本と呼応することで、
花を、草を、言葉を、時間を採集して
胴乱に収めた人の指先に明滅する青い燐光を消さないように、
いつまでも心のうちにとどめていくしかないのである」と

ポール・ヴァーゼンの植物標本を眺めながら
「記憶の葉緑素」
記憶の「明滅する青い燐光」について
とりとめもなく考えてみる・・・

■ポール・ヴァーゼン・堀江 敏幸・飯村 弦太

『ポール・ヴァーゼンの植物標本』
(リトル・モア 2022/7)

(「アトラス」HPより)

「この度、長い時間をかけて企画していた書籍がリトルモアから刊行される運びとなりました。数年前に蚤の市で見つけた一人の女性が綴じた植物標本。作者の名はマドモアゼル・ポール・ヴァーゼン。古物屋である僕の仕事は、彼女の仕事に再び光を当てる事と感じました。絶え間なく流れる時間の中で、残された草花は未だ可憐な姿のまま旅を続けています。

美しい草花から、作家 堀江 敏幸さんが物語を書き下ろしてくださいました。

是非たくさんの方にお手に取っていただけたら嬉しく思います。」

「美しい標本と、
胸をしめつける堀江敏幸の
掌編との二重奏。

堀江敏幸書き下ろし「記憶の葉緑素」所収。
1世紀の時を経てなお残る、花々のかすかな色。
指先の気配――

南フランスの蚤の市の片隅に置かれた小さな箱。
中には100枚ほどの花の標本がひっそりと収められていました。
まるで絵を描くように、枝葉や花片がていねいに台紙に配置され、
ごく小さな薄紙で留められている、あまりに美しい植物標本の数々…………。

遠い昔、見知らぬ異国の女性が、スイスとフランスの国境近くの山や草原で花を摘み、
手を動かしてていねいに作った標本から、想像をめぐらせ、記憶を辿ること。
かつて生きていたものたちの息づかいが聞こえてくる奇跡――。」

(アトラス 飯村 弦太)

「2017年、夏の終わり。古道具屋の僕は、いつものように古いものを求めて異国を旅していた。プラタナスの葉が秋色に染まりはじめ、町はヴァカンスの余韻を残しつつも、カフェ・テラスでは地元の人々が穏やかに席を取り戻していた。ものを探すには気持ちの良い季節だ。
訪れた南フランスの蚤の市。早朝から散々歩き回り、よく知る骨董商の出店場所に立ち寄ったのはすでに昼前。良い仕事ができ商人たちはワインの栓を抜き始めていた。
今日はいいものが見つかったかい？ とお決まりの挨拶も早々に、品物もまばらになった机の片隅で寂しげに佇む紙箱に目が留まった、僕はその姿にどこか惹かれ手を伸ばして箱を開けた。すると「Melle Paul Vaesen」という可憐な飾り文字と美しい押し花が目飛び込んできた。この飾り文字にはどんな意味があるのだろう？

「Melleはマドモワゼル、つまりお嬢ちゃんが作った植物標本だ、名前はポール・ヴァーゼン」
表紙のようなその台紙をそっと捲ると、更に100枚ほどの美しい草花の標本が丁寧に収められていた。

蚤の市で古い植物標本を目にすることは今まで幾度もあった。それらは紙に挟まれ束になっており、大半は研究・教育機関等の流出品で、台紙に植物を無機質に貼り付けただけの理科的な趣が強く、有意義な資料であったとしても、僕自身心惹かれることは少なかった。そうした標本とポール・ヴァーゼンの標本は明らかに気配が違っていた。

僕はその場で、標本を一枚一枚我れを忘れて見つめた。それらは小さな紙に絵を描くように丁寧に草花がプレスされていた。店主はおそらく19世紀のものだろうと話してくれたが、使われていた台紙の質からおそらく20世紀初頭のものだと僕は直感した。想像の域を出ないが、それでも100年ほどの経年に対し驚くほど良い保存状態で、最後の一枚まで野に揺られていた頃の色合いを淡くたたえながら、美しくその姿をとどめていた。見れば見るほど繊細な手仕事に魅了され、気づけば僕は草花たちが店の空間に並ぶ光景を思い描いていた。迷わず箱ごと譲ってもらい、帰国したら必ず展覧会をしようとその場で心に決めた。

日本に帰ってからも、手元の草花を眺めながらポール・ヴァーゼンがどういう人物だったのか思いを馳せていた。標本に筆記体で記された植物の学名と採集された場所から、僕は花の名を知り彼女の軌跡を追った。そうしながら静かな手仕事に黙々と夢中になる彼女の姿を想像した。それは、一人の女性の眼差しを知る素敵な体験だった。

こうして同年の秋には展覧会というかたちで彼女の作品を多くの方に見ていただくことができ、この会をきっかけに、本書が作られることになった。ポール・ヴァーゼンの発見者として、大きな喜びを感じている。」

(堀江 敏幸「記憶の葉緑素」より)

「私たちの記憶には、ほんとうのところ葉緑素がないのかもしれない。色あせた植物標本と呼応することで、花を、草を、言葉を、時間を採集して胴乱に収めた人の指先に明滅する青い燐光を消さないように、いつまでも心のうちにとどめていくしかないのである。」

日本では
これでもかこれでもかというほど
いかに人間は愚かになれるか
という実験の真っ最中で
いつになったら
この実験が終わるのか
いまだその出口は見えそうもない

こうなったら
そのプロセスをじっくり観察しておくのが
後のためにも役に立つのかもしれない
そんな気になっている

「何があなたをそうさせた」
という昭和の流行歌の歌詞も浮かぶが
「〇〇が悪い」と言い募ったところで
すぐにそれをどうこうすることはできないだろう

まず教育機関が洗脳機関になっていることも挙げられるが
そうした教育機関を求めるのはだれかということになると
ニワトリと卵のどちらが先かという議論にもなってくる

基本は「親方日の丸」「寄らば大樹の陰」とでもいう
きわめて根強い「信仰」があって
それらに逆らわないほうが得だし
疑問をもたないほうが逆風に晒されないでいられる
ということが大きいのだろう
いわば生活の知恵である

なので上から「こうしなさい」「これが正しい」
そういわれたらそれに従い
できるだけ疑問をもたないほうがうまくいく
基本的に「迎合」である
そして「迎合」に「責任」という文字は存在しない

そしてどうせ従うのであれば
従うための「権威」があれば安心だ
じぶんで調べ考えて理解する必要はない

その「権威」がいわゆる「専門家」である
というのが本書の基本的な視点だろう

「専門家」が万能ではないのはいうまでもないけれど
少なくとも価値中立的であれば「罪」は少ない
しかしその多くはさまざまな利権に絡まっている
つまり価値は「利権」に従った方向へ向く

「専門家」は決して有効な「エビデンス」だけに基づいて
その知見を発言しているわけではない
都合の悪い「エビデンス」は捨象される
黒塗りの教科書のようなものだ

それが黒塗りであることがわかればまだしもだ
黒塗りの箇所気づかれないようにしないと
そこに責任が生まれてしまうので
その箇所は存在していないことにさえしてしまう

利害からあえて離れて
最初から逆風に耐え続けている専門家はもちろんだが
みずからの知見の誤りに気づき
あえてそれを改め責任を取ろうとする専門家は尊敬に値する

いまはそうした方がどれほど存在し得るのかどうか
それが日本の未来の礎にもなるだろうから
しっかりと見ておく必要があるようだ
いまはその観察に最適の時期だともいえる

それらの観察に適したテーマはたくさんあるので
あえて挙げる必要はないだろうが
もっとも観察が必要なのは
その責任を巧妙に回避しようと立ち回る人間たちだろう

その人間を批判する云々ということが重要なのではない
そんなことはだれだってできる
大事なのはそうした人間の悲しさ・罪深さから何を学ぶかだ



- 池田 清彦『専門家の大罪
／ウソの情報が蔓延する日本の病巣』
(扶桑社新書 扶桑社 2022/9)

■池田 清彦『専門家の大罪／ウソの情報が蔓延する日本の病巣』（扶桑社新書 扶桑社 2022/9）

「権力やマスコミが必要としているのは、専門家が提供する最先端の知見などではなく、行政に都合がいい情報の「権威づけ」なのである。だから、意見を聞くのはとりあえず「専門家」と呼べる人物であればそれで十分だし、自分たちの主張を貫くためなら、そうやって呼んできた専門家の発言さえも、都合よく切ったり貼ったりする。

そしてそのからくり気づかない世の中の人たちは、「専門家がそう言っているのだから間違いない」と思い込み、すっかり騙されてしまうのだ。」

「今や純粋に学問を追究するような専門家というのはまれな存在で、たいていの人が職業として専門家をやっている。そういう人たちは何らかの利害関係の中にいるわけで、それは、本当のことを言うことで自分が大損する可能性のあることを意味している。「間違い」を前提に何らかのシステムが立ち上がり、そのような空気が出来上がってしまった場合、専門家としてそれが間違いであることがわかっている、のらりくらりとその流れに乗っておくのが明らかに安全なのだ。余計なことを言わずに、世の中のムードに素直に賛同しておくほうがマスコミにだってたくさん出られるし、世間のムードに乗じて設けようとする企業や政府から金をもらえるので、絶対に得なのである。」

「このように書くと、専門家自身が自らの姿勢を改めさえすれば、さまざまな問題が解決するような印象をもたれてしまうかもしれないが、ことはそう単純ではない。

なぜかといえば、専門家たちを取り巻く環境が、時の政権をはじめとする大きな権力に逆らえないような方向、あるいは逆らわないほうが得な方向にどんどん傾いており、彼らはさまざまなしがらみのもとで生きているからだ。専門家を養成するシステム自体が、権力に迎合するようになってきていることも、事態を硬直化させる原因だ。要するに、現代の専門家はニュートラルな立場から発言するのが難しい状況に陥っているのである。

そういう意味では彼らも被害者であると言えるが、その肩書きを信じ込み、不利益を被っている人も少なからずいる以上、決してその罪が軽いとは言えない。」

「行政がある政策の正当性をアピールするときの後盾は二つあって、一つはその政策を選挙の争点に掲げて勝利することであり、もう一つは専門家のお墨付きをもらうことである。選挙は行政に有利なプロパガンダはできても、有権者の判断を曲げることはできないので、とりあえず公正である。それでは、専門家のお墨付きのほうはどうかというと、これはかなり怪しい。一応、審議会とか委員会とかがあって、そこに諮るのが普通であるが、審議会などが整備されていない自治体では、専門家に個別に意見を聞くこともある。

その際、なるべく行政寄りの専門家の意見を聞くとか、あるいは審議会メンバーの権威を行政寄りの委員で固めるようにして、専門家の審議の結果、この政策を遂行するに当たって瑕疵はありません、という結論にしたいわけだ。ある分野の専門家はたくさんいるので、行政が自分たちに有利な意見を言う専門家を選ぶことが可能なのだ。

例えば、山野を大規模に開発したいというときに、自然環境の専門家に聞くと、大方は自然保護の観点から開発は好ましくないとと言われるに決まっている。そこで、自然環境の保全や生物多様性に詳しくない生物学者を選んで、行政が適当な説明をして丸め込んでしまうといったことはよくある。

これはベテンに近いが、一般の人は生物学の専門家と聞けば、自然環境にも詳しいだろうと思うわけで、専門家のお墨付きなるものも当てにならないのである。

さらに問題なのは、利権が深く絡む分野は、専門家の多くは利権に取り巻かれているので、科学的中立からは程遠い立場にあることだ。

例えば、CO2の輩出が地球温暖化の主因だとする「人為的地球温暖化」論者の科学者は、この理路が正しいという前提の研究をすることにより、職を得て研究費をもらっている、途中から、この理論は間違っているようだと感じても、もはや後戻りすることが不可能なのだ。自分の本心を偽るか、人為的地球温暖化に反するエビデンスを無視して、人為的地球温暖化の与して生きるかしか術がなくなるのだ。

もっと重症なのは医療の分野で、多くの医者は製薬会社かたさまざまな利益供与を受けていることが多いので、薬の副作用についても、患者にあまり説明せずに、例えば降圧剤などをやみくもに処方している医者も多い。

多くの医者は、本人に自覚がない高血圧に関しては、降圧剤は処方しないほうがQOLを良好に保てることはわかっていると思う（わかっていない医者はよほどのヤブだ）。しかし、日本高血圧学会という医者の利権団体が、高血圧には降圧剤を使うのが正しいという姿勢なので、後ろめたさをあまり感じることなく、降圧剤を処方してお金を儲けるという誘惑に勝てないのである。

日本の医療で最も悲惨なのは、従業員の健康診断を企業に義務づけていることだ。健康診断もがん検診も死亡率を下げられないことは、外国での数度のくじ引き検査の結果、はっきりしたエビデンスがある。したがって欧米では、健康診断を義務づけている国はない。

がん検診も廃止の方向に向かっている。例えば、アメリカでは前立腺がんの検診はやめたほうがいいと政府の公的機関が表明しているし、肺がんも、検診したほうが肺がん死亡や総死亡数が増えることがわかり、欧米では行っていない。

ひとり日本だけが、何の根拠もないのに健康診断とがん検診をむやみに推奨している。日本では、ほとんどの医療従事者は健康診断やがん検診は有効だと信じ込まされているので、無理もないと思うが、無効だということを知っていて、業界の利権のために健康診断やがん検診を推進している専門家の罪は重い。」

『短歌研究』という雑誌をはじめ読む
創刊九〇周年を迎えているらしい

「塚本邦雄賞」の発表という文字が目に入り
(そんな「賞」があるのさえ知らずにいた)
その「特別賞」が

『文庫版 塚本邦雄全歌集・全八巻』の
企画・編纂を行った島内景二に贈られていたからだ
塚本邦雄について見ておこうと思えば
島内景二を外しては考えられない

しかし今回の収穫はそのことよりもそれと同時に
「第40回現代短歌評論賞」を授賞した二つの論文である

この賞の課題のひとつが
「口語短歌の歴史的考察」だが
二つともそのテーマに取り組んだものだ

短歌に興味をもちはじめたのは比較的最近のことだが
「口語短歌」の問題がずっと気になっていた

「口語短歌」はそれなりに面白いところもあるのだが
その作品を読むにつけ
「わざわざ口語の短歌定型にする意味があるのか」
「それははたして「短歌」といえるのだろうか」
と感ずることが多いからだ

二つの論文はその疑問の一端に
糸口を与えてくれるものでもあった

桑原憂太郎「口語短歌による表現技法の進展」では
口語表現ゆえにそれを「短歌定型」にする際に
解決する必要のある表現の問題がとりあげられている

「口語短詩特有の文末処理問題」である
過去完了の助動詞「た」の扱いのこと
文末を「た」の形で終わらすと散文的になりすぎて
韻詩作品として成立しにくいということである

文語であれば「き・けり・つ・ぬ・たり・り」といった
過去形や完了形の助動詞を使って文末の処理ができるが
口語にそんな多様な表現は存在しない

■桑原憂太郎「口語短歌による表現技法の進展」
高良真実「はじめに言葉ありき。よろずのもの、これに拠りて成る」
島内景二『文庫版 塚本邦雄全歌集』の企画編纂の功績に対して
(『短歌研究2022年10月号』短歌研究社 2022/9 所収)

(桑原憂太郎「口語短歌による表現技法の進展」より)

そのために口語短歌による表現技法として
現在様式化していると思われる
特徴的な三つの技法があるという

- ①動詞の終止形の活用
- ②終助詞の活用
(「ぜ」「ね」「さ」といった終助詞の活用)
- ③モダリティの活用
(「作品を、独り言や他者への発話といった
話し言葉で叙述する、という方策」)
である

たしかにこれらの技法は
短歌表現を口語で成立させるために欠かせない

しかしそれよりも重要なのは
高良真実「はじめに言葉ありき。
よろずのもの、これに拠りて成る」で論じられている
言文一致と普通文や俗語の問題である

「口語短歌は書かれた時点ですでに口語ではない」
「書かれたものは、口語かもしれないが、
口語(発話)そのものではない」
ということが問題になる

口語短歌によく違和感を感じてしまうのは
それが「短歌定型」になってはいるものの
「口語」との差異に無自覚であることである



口語短歌は現在進行形での試行の最中ではあるが
その表現の可能性を拓くためには
「短歌定型」ゆえのあらたな韻律が必要になる
そうでなければそれが短歌形式である必要はないからだ

塚本邦雄は文語や文語表記にあくまでも拘ったが
その稀有の営為ではなしえなかった表現領域を
口語短歌が垣間見せてくれますように

■桑原憂太郎「口語短歌による表現技法の進展」

高良真実「はじめに言葉ありき。よるずのもの、これに抛りて成る」
島内景二『文庫版 塚本邦雄全歌集』の企画編纂の功績に対して
（『短歌研究2022年10月号』短歌研究社 2022/9 所収）

（桑原憂太郎「口語短歌による表現技法の進展」より）

「現代の短歌状況を振り返ると、ここ数十年による口語短歌の進展は著しいものがあるろう。その進展については多様な論点で議論できようが、短歌形式の表現技法に話題を絞るならば、口語短歌による口語ならではの技法が生まれている、ということはいえよう。それは、文語形式ではなし得なかった新しい技法であり、そして、そうした表現技法が様式化するにいたり、結果、短歌文芸の表現の幅を広げることになった、ということもいえるだろう。

一方、そうした口語短歌による表現技法に進展は、口語をいかにして短歌定型になじませるか、という試行の連続であったと指摘することもできる。そもそも、口語で発想された事柄を、そのまま口語ですべても短歌にはならない。定型意識を持ち、韻律や調べを整え修辞や統辞を施してはじめて韻律文芸としての短歌作品になる、ということがいえるからだ。それに、どうして口語で発想した事柄を、わざわざ韻詩である短歌形式に変換して叙述するのか、という根本的な疑問もある。すなわち、口語で発想した事柄を韻詩へといわば翻訳する意義は何なのか、という疑問だ。

本稿では、そんな定型になじませるための試行や、韻詩に変換することはの疑問を抱えながら進展してきた、口語短歌による表現技法について議論することを目的としている。なかでも、現在、様式化していると思われる特徴的な技法として、1動詞の終止形、2終助詞、3モダリティ、の三つの活用による技法について取り上げた。繰り返しになるが、この三つは、口語短歌による口語ならではの表現技法であり、現在、多くの歌人がごく普通に使用している技法である。そして、それは、口語を短歌定型になじませるためにあれこれ試行し、また、口語を韻詩へ変換することへの疑問を抱えながら進展した結果、広く短歌文芸全体の表現の幅を広げることもなった技法といえるのである。」

「口語短詩特有の文末処理問題とは何か。というと、端的にいえば過去完了の助動詞「た」の扱いのことだ。例えば文語であれば、いくつもの過去形や完了形の助動詞を使って文末の処理ができる。文語の過去と完了の助動詞といえば、「き・けり・つ・ぬ・たり・り」であり、これらを駆使して時間の経過を重層的に韻律にのせる技法が文語短歌には積み上がっている。しかし、口語はというと、過去や完了をあらず助動詞は「た」しかない。そうすると、口語短歌で、文語がこれまで積み上げてきた多様な文末処理の真似事をしようにも、到底、文語短歌の豊かな表現を越える作品は提出できるわけがなかった。

それに、文末を「た」の形で終わらすと、どうにも散文叙述のようになり、韻詩作品としてうまくいかない、という事情もあった。」

「①動詞の終止形の活用

では、そうした「た」によらない文末処理としては、どのような処理の仕方があるか、というと、その一つとして、過去にしないで終わらせる、すなわち、動詞を「ル形」（終止形）でおさめるという技法を挙げることができる。（…）

この「ル形」でおさめる技法は、現在ではすっかり様式化されていると思われ、（…）さほど違和感がないかもしれないが、日本語の用法としては誤用である。これらの動詞は、すべて動態動詞と呼ばれるもので、その動詞の「ル形」は未来を表す。（…）

では、なぜ、こうした誤用が、短歌文芸ではさほど違和感もなく作品として提出されているのか。といえば、これまで議論している助動詞「た」の使用を避けるためだった、ということが理由の一つとしてあげられよう。」

「②終助詞の活用

口語短歌の文末処理では、動詞を「ル形」で終わらせる用法の他に、次のような用法が試行された。
マガジンをまるまで歩くいい日だぜ　ときおりぼんと股で鳴らして　加藤治郎『サニー・サイド・アップ』
たぶん口をとがらせてるね　だまったきりひとさし指をまわしてる、ふん
バック・シートに眠っていい　市街路を海賊船のように走るさ

加藤治郎の八〇年代に提出された作品から三首掲出したが、注目したいのは「いい日だぜ」の「ぜ」、「とがらせてるね」の「ね」、「海賊船のように走るさ」の「さ」だ。

こうした「ぜ」「ね」「さ」の助詞は終助詞とよばれるが、この終助詞の効果的な使用が、口語短歌ならではの文末処理を生み出したのだった。」

「③モダリティの活用

口語短歌の文末処理の解決策の三つ目として、作品を、独り言や他者への発話といった話し言葉で叙述する、という方策がある。話し言葉であれば、語尾に「た」をつけずとも自然な表現で文末処理ができる。

ところで、そんな独り言や他者への発話といった話し言葉の文末は、話し手の判断や態度の部分を表していることが多い。この話し手の判断や態度の部分を「モダリティ」という。例えば、「私はカレーが食べたい」という命題を独り言として叙述するなら、「カレーにするか」と「カレーでも食べるか」とかになる。この時の、「か」とか「でも」というのが「モダリティ」である。」

（高良真実「はじめに言葉ありき。よるずのもの、これに抛りて成る」より）

「（一）口語の不可能性

口語短歌は書かれた時点ですでに口語ではない。（…）書かれたものは、口語（話し言葉を元にしたいわゆる言文一致体）かもしれないが、口語（発話）そのものではない。」

「（二）言文一致と普通文

（…）
口語短歌は一般的に書き言葉である。しかし口語短歌は、しばしば発話に近いものとして位置づけられ、あるいは考えを表現するにあたって自然なものとして語られる。

文章と発話と思考は全て同一でなければならず、そのためには、言葉と文字が一体化された、思考を透明に表現できる記号が必要である。これは言文一致運動の基本的なテーゼであった。しかし一方で、言文一致とは、話すように書くことだけでなく、書くように話すことも要請していた。（…）

たしかに普通文は、口語に比べると古いものに見えるかもしれない。しかし、江戸時代の擬古文や、公文書などの文体である候文に比べれば、新しいものと言えよう。短歌は口語であっても文語であっても、日本人のこころに訴えるものとして語られる。短歌における俗語革命とは何か。口語短歌の考察にあたって、普通文の性質まで考察することは回り道に見えるかもしれない。しかしこれは、例えば斎藤茂吉は文語にこだわり続けた理由を考えるために、ひいては二〇二二年現在の短歌において文語が継続的に用いられている理由を考えるために、必要な回り道である。」

「（三）俗語革命の影

（…）
俗語革命における俗語＝「ナショナルランゲージ」としては、言文一致だけでなく、普通文もそこに組み込まれる資格を有している。しかし、「音声中心主義的」に語られる傾向の強い言文一致体は、普通文に古い言葉としての印象を与え、俗語としての役割を見えにくくしてしまう。そして、俗語革命の進展を言文一致の過程と同一視してしまうことも、普通文・言文一致体の対立軸を際立たせ、普通文の持つ俗語としての役割を見えにくくしてしまう。このように、俗語としての普通文は二重に覆い隠されている。だからこそ、短歌における口語は、「定型との調和の問題」として片づけられてしまうのである。」

「（四）書き言葉の身体／声

（…）
短歌という装置は、想像の共同体における話し手としての身体を立ち上げることができる。想像された領域の身体を以て、歌人は国家に仕えることができる。とはいえ、近代のはじめから短歌はナショナリズムの臣であったと絶望するのは違う。」

「言文一致の眩惑の中で、はたして口語短歌は、公共の言葉の合間を縫って、きわめて私的なものを描き出すことができるのか。（…）

私は口語短歌の可能性を信じている。口語短歌の試みが、言葉の所与の網の目をすり抜け、自由な言葉の身体を得る砦となることを、私は願っている。」

鳥や虫の地球レベルの移動について
知られるようになったのはここ数世紀のこと

季節が変わると
鳥たちが現れたり消えたりすることにも
古代の人たちはいまから見みると
ずいぶん奇妙な説明を与えていた

たとえばアリストテレスは
夏に見かけるジョウビタキは
冬に姿を現すコマドリと同じ鳥だと考え
姿が変化したのだと考えていた

16世紀になっても
たとえばスウェーデンの大司教は
ツバメは湖の中で越冬していると考えていた

「渡り」ということを
想像することさえできなかったのである

実際はどうかといえば調べれば調べるほどに
動物たちは驚くべきナビゲーション技術を駆使して
数千キロ数万キロも旅をしていることがわかってくる

デイビッド・バリー
『動物たちのナビゲーションの謎を解く』は
そうした動物たちの驚くべきナビゲーションについて
現在わかっている研究結果を興味深く紹介している

動物たちが使っているナビゲーション技術は
「時間補正式太陽コンパス」「走行距離計」
「オプティックフロー」「イメージ照合システム」
「風向き、振動、匂い」「磁気」などなど
驚くべきものなのだが

かたや人間はどうかというと
そうした生体が発揮している技術を次々と失い
GPSのような機械に頼るばかりになってきている

合わせて紹介している
M・R・オコナー『WAYFINDING 道を見つける力』は
このmedioposでずいぶん前にご紹介したことがあるが
人間が失いつつある
まさに「道を見つける力」について考えるための
示唆的な内容となっているのであらためてとりあげる



- デイビッド・バリー (熊谷玲美訳)
『動物たちのナビゲーションの謎を解く／なぜ迷わずに道を見つけられるのか』
(インターシフト 合同出版 2022/3)
- M・R・オコナー (梅田智世訳)
『WAYFINDING 道を見つける力／人類はナビゲーションで進化した』
(インターシフト 合同出版 2021/)

かつて人間の使っていた生きたナビゲーション技術は
実践されなくなると失われていく

たとえばすべての移動にGPSを使うようになると
かつて使っていたナビゲーションの仕方は忘れられ
GPSがなければじぶんがどこにいるのかさえ
わからなくなってしまうだろう

たとえば海馬は長期記憶する際に
「何が」「どこで」「いつ」の記録には欠かせない
その海馬のはたらきは
GPSにたとえられることがあるようだが
GPSが認識するのは「変化しない空間のなかに
固定された場所や座標」でしかない
海馬が働かなくなれば
長期記憶そのものも働かなくなってしまう

それはナビゲーションにかぎらない
生きて学ばれなくなったことは失われていくことになる

わたしたちは迷いながらも
じぶんでじぶんを導きながら
「道」を見つける力を育てていかなければならない
それは「リアルな空間」だけではなく
思考・想像力にかかわる「概念空間」においても重要な
生きたナビゲーション力にほかならないからである

- デイビッド・バリー (熊谷玲美訳)『動物たちのナビゲーションの謎を解く／なぜ迷わずに道を見つけれられるのか』(インターシフト 合同出版 2022/3)
 - M・R・オコナー (梅田智世訳)『WAYFINDING 道を見つける力／人類はナビゲーションで進化した』(インターシフト 合同出版 2021/1)
- (デイビッド・バリー『動物たちのナビゲーションの謎を解く』より)

「私がこの本で最初に取り上げたい疑問は、単純にこうだ。動物は（人間を含めて）どうやって自分の進む道を見つけるのだろう？（・・・）その答え自体がとてもおもしろいが、そこからさらに引き出される疑問をとおして、私たちが身の回りの世界との関係性を変化させつつあることが見えてくる。私たち人間は、とても長い間頼ってきた基本的なナビゲーションスキルを捨てつつあるのだ。いまや地球の表面どこにいても、自分のいる位置を苦勞せず、正確に特定できるようになった、何も考えずに、ボタンを押すだけだ。それは考慮すべきことだろうか。」

「気がついていないかもしれないが、私たちは急速にナビゲーション音痴になりつつあるのだ。その運命を回避するには、可能なおときにはスマートフォンや電子ナビゲーションシステムのことを忘れる必要がある。何も考えずにGPSに頼る代わりに、すっかり知っているルートを行くときでも、目を見開いて、脳を働かせるべきだ。ナビゲーションスキルをすっかり失いたいのではなければ、私たちは地球の言語を話す方法をもう一度学ばなければならない。」

「私たちはそれぞれ、人生の物語を方向づける、時間と空間の道をたどっている。それを人生の道と呼んでもよい。深い眠りから覚めたときに自分が誰か思い出せるのは、自分が過去にどこにいて、誰と出会い、どこで何をしてきたかを想起することにかかっている。こういったことは私たちに、個人としてのアイデンティティを維持しているという感覚を抱かせる。そしてそういう感覚がない人生は完全に崩壊してしまう。アルツハイマー病が進行した患者で起こっているのはそれだ。ナビゲーションの神経科学は、自己意識がどのように構築されるかを解き明かすことによって、私たちが自分自身を知り、さらに親戚である動物たちとの共通点がいかに多いかを理解する助けになっているのだ。」

(デイビッド・バリー『動物たちのナビゲーションの謎を解く』～本書出版プロデューサー 真柴隆弘「解説」より)

「動物たちはナビゲーションの天才だ。地球を渡る数千キロ、数万キロの旅をするものたちもいる。なぜコンパスもGPSもなしに、迷わず進んでいけるのか？ 本書はそんなナビゲーションの謎を、世界の第一線の科学者による研究や彼らへの取材によって解き明かしていく。

まず驚かされるのが、そのしくみが極めて高度なことだ。最先端のAI・ロボット技術でも、とてもかなわない。たとえば、ほんのちっぽけな脳しかないアリたち。サバクアリの研究では、ナビゲーションに「e-ベクトル（人間には見えない偏光の向き）」「時間補正式太陽コンパス」「走行距離計」「オブティックフロー」「イメージ照合システム」「風向き、振動、匂い」「磁気」などなどを利用・駆使していることがわかってきた。

本書には9万キロ（なんと地球2周分！）も旅する鳥から、時速90キロで一晩で600キロ以上も進むガマで、仰天エピソードも満載だ。ウミガメの子どもが生まれた場所から遙かな海洋の旅に出て、大人になってから産卵のためにまたそこにちゃんと戻って来る、という逸話にも感動させられる。なにしろ陸と違って、広大な海には目立つランドマークもない。いったいどんなやり方で戻ってくるのだろうか？ どうやらウミガメはある種の「地図」を使っているらしい。それは地球を取り巻く磁場のマップだ。ウミガメはこうした磁気感覚（磁場強度と伏角をともに感知できる）を備えており、大洋を回遊していけるようだ。それだけではない。生まれた場所の磁気特性が胎内に刷り込まれていて、そのため元の場所に戻ってこれるというのだ。ミバエの研究では産卵後、胚の代謝過程において脳神経系に磁場情報が内在化し、孵化後も保存されて生殖細胞に伝えられ、子孫へ遺伝していくという。また、こうした動物たちの磁気センサーのしくみについては、「磁鉄鉱説」「光化学磁気コンパス説」「電磁誘導説」などが提唱されているが、まだ解明途上にある。

ナビゲーションにかかわる脳神経科学も、急速に進展している。注目されるのは、ナビゲーション能力が、リアルな空間だけではなく、「概念空間」でも大きな役割をはたしていることだ。私たちの思考・想像力は、海馬をはじめとするナビゲーション関連の脳の働きに支えられている。」

(M・R・オコナー『WAYFINDING 道を見つける力』より)

「海馬は哺乳類の長期記憶の「何が」「どこで」「いつ」の記録には欠かせない。エピソード記憶が人類固有のものなのか、それともほかの生物にも存在するののかについては議論の余地があるものの、いまわかっているかぎりでは、生涯の出来事を思い返し、それを順番に並べてアイデンティティを構築できる動物はヒトだけだ。人類という種にかぎって言えば、海馬は自伝、つまりこれまでに生きてきた人生の物語が存在する場所だ、そして、想像力のエンジンでもある。海馬がなければ、自分自身を未来に投影したり、予測を立てたり、目標を思い描いたりすることは難しくなる。海馬はときにヒトのGPSとも言われるが、わたしたちの精神を形づくるこの驚くべき柔軟な領域が成し遂げていることを考えれば、その比喩は単純化しすぎだろう。GPSが認識するのは、けっして変化しない空間のなかに固定された場所や座標だ。それに対して、海馬の活動はひとりひとりに固有のものであり、わたしたちの観点、経験、記憶、目標、欲求をもとに場所の表象を構築していると神経学者は考えている。つまり、私たちの個性に応じたインフラを提供しているということだ。」

「ハイパーモビリティは、個人の領域と意識を世界の表面是対に広げることを可能にしてきた。だが、それを操るわたしたちの能力は、不安になるほどもろい。燃料が尽きたり充電が切れたりした瞬間に、はじけて霧散する。技術という杖なしでわたしたちが移動できる範囲は、実際には縮んでいるのかもしれない。そして、私たちが訪れる場所との親密さも薄くなっているのではないだろうか。わたしにはいま、そう思えてならない。」

「問題の一端は、親が我が子の時間を絶えず管理していることにある。「子どもたちの成長の過程から、組織化されていない、自分で自分を導く種類の活動。スポーツとは別の活動が失われていると思います。あてもなく歩いたり、偶然に足を踏み入れたりするような活動です。しかも昨今では、組織化された活動に参加していない子は、ほとんど罪人とみなされるような傾向がある」とステイルゴーは言う。「しかし、わたしの理解しているかぎりでは、うちの職場の同僚のほとんどは、少しばかり方向がわからなくなったおかげで自分のキャリアを見つけたようなところがあります。偶然、何かに出くわすことによって、あるでしょう？」

「現在では、現代的な生活条件と技術により、生存に必要なスキルと知識が変化している。そして、学ばれなくなり、実践されなくなったスキルや技術は、いずれ失われる。「実践されないスキルは、例外なく失われます」。デューク大学の神経学者で口語伝統の専門家でもあるデイヴィッド・ルービンはわたしにそう話した。「人間はかつて、荷車を組み立てていました。その技は消えてしまった。いまでは誰も自動車を修理できません。わたしも車を持っていますが、もはやオイルのチェックもできません。ものごとは変わっていくものです。わたしたちがバラッドを歌わなくなれば、それもいずれ失われるでしょう。しかし、だからといって、わたしたちがそれをする能力を失ったというわけではありません」昔ながらの文化では、ナビゲーションの習得は人生のごく早い時期にはじまることが多い。とはいえ、習得をはじめのに遅すぎるということはない。そして、そのプロセスをはじめるのはとても簡単だ。遠くの場所への旅や金は必要ない。外へ出て、注意を環境に向けるだけでいい。それくらい簡単なことだ。下を向いて歩くか、上を向いて歩くかでも、違いがあるかもしれない。自分がすでに生活している場所をじっくり観察する。それを実践するだけでも手ははじめになる。」

<p>「◎デイビッド・バリー『動物たちのナビゲーションの謎を解く』目次</p>	
はじめに・・進むべき道を見つけるために	<p>■PART 1 北極圏</p> 第1章: 最後の道なき場所 第2章: 記憶の地景 第3章: 幼少期の記憶はなぜ消えるのか 第4章: 動物たちのナビゲーションの謎 第5章: ヒトの認知能力を飛躍させる 第6章: AIは物語を理解できるか
<p>●PART 1 <地図なしのナビゲーション></p> 第1章・・生物がナビゲーションを始めたとき 第2章・・フェアブルの庭の昆虫たち 第3章・・厳しい環境を生き抜く力 第4章・・砂漠の戦争とアリ 第5章・・動物の見方を変えたすごい発見 第6章・・デッドレコニングと螺旋運動 第7章・・昆虫界の競走馬 第8章・・太平洋の島々をめぐる航海術 第9章・・鳥が真北を見つけられるわけ 第10章・・天の川とフンコロガシ 第11章・・匂いを道しるべにする動物たち 第12章・・鳥は匂いを頼りに巣に戻れるか 第13章・・音によるナビゲーションの謎 第14章・・磁気感覚の正体を探る 第15章・・大集団で数千キロも旅するチョウ 第16章・・なぜ針路をうまく修正できるのか 第17章・・スノーウィー山地の「闇の王」	<p>■PART 2 オーストラリア</p> 第7章: スーパーノマド 第8章: ドリームタイムの作図法 第9章: 脳のなかの空間と時間 第10章: 雷の民のあいだで 第11章: あなたが左なら、わたしは北
<p>●PART 2 <「地図・コンパス」ナビゲーション></p> 第18章・・動物はどんなマップを使っているか 第19章・・時差ボケのヨシキリが教えてくれたこと 第20章・・ウミガメの驚きの回帰能力 第21章・・コスタリカでの冒険 第22章・・生まれた場所の磁気を伝える遺伝子 第23章・・磁気の謎はどこまで解けたのか 第24章・・ナビゲーションの脳科学 第25章・・思考や創造力を支える	<p>■PART 3 オセアニア</p> 第12章: 人類最古の科学 第13章: オセアニアの宇宙飛行士たち 第14章: 気候変動に抗する航海術 第15章: GPSが脳になりかわる 第16章: 迷子のテスラ <p>おわりに: トポフィリアの天性</p>
<p>●PART 3 <なぜナビゲーションが重要なのか></p> 第26章・・地球の言語 第27章・・私たちはどこへ向かうのか	

◎M・R・オコナー『WAYFINDING 道を見つける力』目次

はじめに: 道を見つける

岡崎乾二郎は
二〇二一年一〇月三十一日脳梗塞で倒れ
その後の入院・リハビリで
「脳梗塞の前と後とでは
もはや同じ「私」ではありえない」
という変容を経験しているという

絵も描けるようになり
大学の授業もできるようになり
原稿も書けるようになったのだが
「いままでのように自分がしている、
という感じがしない」のだという

脳梗塞で損傷を受けたのは脳であり
身体自体ではないのだが
身体はいわば「メディウム」で
身体が自発的に活動を生成させていく際
意識が追いかけて観察しながら
後付けで自分の指令を組み立てている
そのズレが強烈に感じられるのだというのだ

さらにはそうした感覚は
「いままでもそうだったんじゃないのか、
という感じもしてき」だとのだともいう

そして「文章を書こうと、絵を描こうと、
自分がつくったかどうかという感覚は
あんまり関係がなくなってしまった」

それに対して
今回のインタビューの聞き手である山本貴光は
「文章にしても、絵画にしても、
「誰々が書いた」とか「自分がつくった」と
銜いもなく言ってしまうのは、
トリックであるというか、不合理である」という

現代のような「作者信仰」の発想では
疑いさえもたず
「私が書いた」「私が作った」
といってしまって恥じないのだが
そういう信仰に溺れないでいる者にとって
ある意味そうした
みずからを「メディウム」としてとらえる感覚は
いうまでもないことなのではないだろうか

もちろんじぶんがそこに深く関わっているわけで
そこに制作者としての個性は深く影響するわけだが
すべての「表現」はじぶんに「訪れる」ものである
その感覚を否定することはできない

さらにはいえば
「私」というのが
つねに同じ「私」であるということもできない

それは脳梗塞のような
「システムの外から働きかける」
「不意打ち」などがあるとき
強く意識されることではあるだろうが

常に変わらぬ「私」ではなく
常に新たな「私」であることを
意識することさえできれば
「新しいシステムとして組成、蘇生できるかどうか」
という「可塑性」に向かって
ひらかれていることができる

現代は「私が書いた」「私が作った」
という自我病のような状態が極めて多く見られる
もちろんそこに責任は生まれるとしても
その病から自由になり得る新たな身心を
育てていくことは非常に重要なことではないだろうか



■岡崎乾二郎「『感覚のエデン』を求めて」
(インタビュー) 聞き手・山本貴光
(6月10日、岡崎氏宅にて収録)
(文學界 (2022年10月号) 文藝春秋 2022/9 所収)

- 岡崎乾二郎「『感覚のエデン』を求めて」（インタビュー）聞き手・山本貴光（6月10日、岡崎氏宅にて収録）（文學界（2022年10月号）文藝春秋 2022/9 所収）

「山本／今日は岡崎さんが昨年上梓された『感覚のエデン 岡崎乾二郎批評先週vol.1』（亜紀書房）を中心に、岡崎さんがこれまで続けてこられた美術さくくひんの制作と批評についてお話できればと思っています。実は二〇二一年十一月五日に、公開のオンラインイベントで『感覚のエデン』について岡崎さんと対談をする予定だったのですが、岡崎さんがフランスでの個展から帰国した直後の一〇月三日に脳梗塞で倒れられたため中止となりました。まずはじめに脳梗塞とその後の六カ月のリハビリによる身体の変化を経験されて、岡崎さんの感覚や認識がどのように変容したのかをうかがえないでしょうか。

（…）

岡崎／そのあと半年の入院を経て、予想をはるかに超えて劇的に回復することができ、まだまだ不自由とはいっても退院してこうして生活しているわけですが、その間の経験を言葉にするのがむずかしい。むずかしいのは経験をした自分が同じ自分として連続しているという確信が持てないからだと思うのです。この期間の時間がまったく別の時間として感じられる。時間が飛んでしまっている。回復したと感じることは、以前の自分の意識を復元し、つまり再び仮構して、それに身心を適合させるということかもしれませんが、するとこの期間（まだまだ続いているのですが）に起こった決定的な体験を覆い隠してしまうような感じがします。端的に怖い。山本さんの質問に答えるとすれば、変容というか、いちばんの違いは、脳梗塞の前と後とではもはや同じ「私」ではありえない、同じ「私」であると感じるのはそれ自体が錯誤なのではないか、間違っている、いや、いけないことなのではないか？ そんな感覚的抵抗があります。」

「岡崎／そもそも脳梗塞で損傷を受けたのは脳であって身体自体ではない。身体は無傷で残っていて、身体自身他その運動機能を保存、つまりなんらかのイメージとして保持、記憶しているはず。それと脳が切断されてしまった。そのとき、いままで脳が「自分の」と思い込んでいた身体をいかに間違って歪曲して認識していたかをはっきり悟られます。リハビリで教わったのはこのことでした。身体の諸部分は連携していて、その身体諸部分の連携した動きは、脳との回路が切断あるいは弱くなっても、身体にプログラムされて回路として残されている。いわば身体が覚えている。脳から考えると、脳からの指令がいかなくなって反応しなくなった、自由にならなくなった身体ですが、その不随意の身体自体の反応を受け入れ、学ぶというか。美術教育を実践してきた考えに基づいていえば、身体はいわばメディウムです。それが持っている特性、プログラムを知って、それを脳に改めて回路として実装しなければならない。そうは簡単ではなく実際は絶望的狀況に日々直面させられましたが、美術をやってきた経験があったおかげで、このメディウムとなった自分の身体を楽観的に受けとめることができたのかもしれません。

絵が描けるようになった。また入院二ヶ月後にはオンラインで病室から大学の講義もできるようになった。原稿もスピードは遅いけれど書けるようになった。けれど何かいままでのように自分がしている、という感じがしないんですね。意識が離れている。自分で自分についていけない。おそらく脳を含めて身体が自発的に活動を生成させていくのを、意識が追いかけて観察しながら、後付けでそのプロセスを自分がやったと、自分が指令したと理解している。つまり後付けで自分の指令を組み立てている。自分がやった、作ったという感覚は遅れてくる。そのズレが強烈に感じられるんですね。しかし入院しているうちに、いままでもそうだたんじゃないのか、という感じもしてきました。創作という行為にはこういう認識の遅れがあるものですから。だから、文章を書こうと、絵を描こうと、自分がつくったかどうかという感覚はあんまり関係がなくなってしまった。描くたびに自分の体が描き上げた絵に驚いている。」

「山本／お話をうかがって、もう一つ想起したことがあります。文章にしても、絵画にしても、「誰々が書いた」とか「自分がつくった」と銜いもなく言うってしまうのは、トリックであるというか、不合理である、ということです。現実には、自分の意識だけでなく、無意識や自分で必ずしも統御できない身体、さらには身体を通じて外部から入ってくる各種の知覚や変化が渾然一体となって、文章なり絵画なりが生成されているはずです。でも、環境が私を通してさせているとも言えるような、思考や行動が生成されるそうした過程をうまく記述する言葉や論理を私たちはまだ以ていないのかもしれない。そこで。「誰々がつくった」とか「私が書いた」とつい言うてしまう。近代の作者という見方や著作権をめぐる法体系はそのような思考法に基づいてできていることもあり、ともすると私たちはなかなかその枠組みの外にあるような思考をしにくい。」

「岡崎／結局、可塑性とは、世界を物理的に破壊するような暴力ではなく、脳が自分自身の脳を破壊するような暴力を受け容れて、それを積極性、能動性に転化できるかどうかにかかっているのだと思います。その暴力を受け入れ、自らの意志へ組み込むことができるかどうか、新しいシステムとして組成、蘇生できるかどうかが可塑性ということですよね。自分の思い込み、既得の概念を破壊し、修正することは反省や内省からもたらされるとされていますが、けれど反省や内省では自分は破壊されない。力はシステムの外から働きかけるから有効だったわけで。

山本／自分を何に委ねていたのかを見極めながら、自分をどうやって破壊するか。それは可塑性を教育する上で、ほんとに大きな課題だと思います。不意打ちされたとき、それまでの経験から脳に生じた既存の回路だけでは間に合わず、自分で自分をつくり変える過程が始まる。そういえば、プラトンとアリストテレスは師弟揃って「哲学とは驚きから始まる」と言い、ドゥルーズが「思考は不法侵入から始まる」と書いていたのも思い出されます。「なんだこれは」という驚きがあるからこそ、対象が見知らぬものに感じられて、それを知ろうとする探求が始まる、というわけです。さりとれ、これをそのまま伝えても白々しい言葉になってしまう。「さて、ひとつ驚こうか」と構えてすることではないからです。大学では哲学を担当していることもあり、この頃は、こうした驚きや不意打ちについて、どう伝えられるかと考えています。

岡崎／そもそも不意打ちは突然やってくるものなんだから（笑）、どうしたら不意打ちされるかを考えるのは。どうやったらストローク、つまり脳梗塞になれるのか考えるようなもので、かなり倒錯していますね。冗談にはできません。実際に、いま不意打ちが現れていないにしても、その可能性は確率的には、すでに高く存在していたのだから、今は顕現していない不意打ちが、その何%かの確率ですでに存在している現実を実感対処できていることが大切なのでしょう。僕もそうしているべきだったと強く反省しています。」

伊東俊太郎の著作にはじめて出会ったのは
当時先進的だったアラビア世界から
閉ざされた文化圏であった西欧へ
ギリシア・アラビアの学術がもたらされた
一大転換期を扱った文明論
『十二世紀ルネサンス』（1993年）だったが

それから30年近く経って観光された本書は
(伊東俊太郎は1930年生まれですすでに92歳)
ソクラテス・孔子・ブッダ・イエスといった
「精神革命」を中心として描かれた
人類史の壮大な転換期を扱ったいわば文明論である

本書ではこれまでの人類の歴史における大転換期を
「人類革命」「農業革命」「都市革命」
「精神革命」「科学革命」の五つとして捉えているが

現代における「宗教と科学の拮抗対立」のように
「精神革命」と「科学革命」はうまく接合されないまま
第六の転換期である「環境革命」を向かえているといい
この「環境革命のなかでこそ、両者の融合が可能になる」
という視点を示唆している

その拮抗対立を乗り越えるために
さらに精神革命と科学革命とのあいだに
「宇宙関連」という共通事項を導入することが
「最近たどりついたアイデア」として示唆されている

本書のタイトルは『人類史の精神革命』であり
実際ほとんどが精神革命の紹介に費やされているのだが
おそらく基本的な視点は精神と科学の融合としての
「横への超越」「水平超越」であるといってよさそうだ

ここでいわれる「横への超越」「水平超越」は
「縦への超越」「垂直超越」に対比される視点である

基本として「精神革命」における「超越」は
「神」への超越としての「上への超越」と
インドの「空」が中国化された「無」への超越
としての「下へ」の超越の二つがあり
それが西と東における精神革命の典型的な構造
となっているというが

精神革命の最後の段階においては
「な他者との相互関係を自覚し創り上げる」ために
対人関係の原理として「横への超越」が説かれる

先にふれた「宇宙関連」においてもまた
「人と人、人と自然との横の結びつき」こそを
根源的なものとして重要だと著者は提起している

「精神」は「垂直（縦）」の視点にほかならず
現代において失われがちなものだが
それはある意味で霊的世界における視点でもあり
地上世界において実現すべきは
そうした「精神」が踏まえられた上での
「水平（横）」の超越であるといえる
「友愛」が「水平（横）」の超越であるように



- 伊東 俊太郎
『人類史の精神革命
／ソクラテス、孔子、ブッダ、イエスの生涯と思想』
(中公選書 中央公論新社 2022/9)

■伊東 俊太郎

『人類史の精神革命／ソクラテス、孔子、ブッダ、イエスの生涯と思想』
(中公選書 中央公論新社 2022/9)

「筆者はこれまでの人類の歴史を五つの大転換期――「人類革命」「農業革命」「都市革命」「精神革命」「科学革命」として捉えている。本書の主題となる「精神革命」は第四の転換期で、前五世紀頃を中心として、ギリシア、中国、インド、イスラエルの四地域にわたって、平行して人間の精神上の大変革が起こり、哲学や普遍宗教の源点が定められた時代である。具体的には、ギリシアにおける哲学の誕生、中国における儒教の成立、インドにおける仏教の勃興、イスラエルにおけるユダヤ教とキリスト教の形成を意味している。これら四つの思想形成を示すために、各地域での文明の成立事情から説き起こすが、光の中心は、ソクラテス、孔子、ブッダ、イエスの四者に当てられる。

それに続く、人類史の第五の転換期が、一七世紀に始まった「科学革命」、近代科学の成立である。これは四つの地域で平行して起きた「精神革命」と異なり、西欧のみがその推進者となった。やがて革命は全世界に拡がり、人類は自らの運命だけでなく、おそらく地上のあらゆる生命の運命をも変えることになった。それは数学的分析と実証的実験が結びつく、いわゆる「科学的方法」を創始し、世界は文化圏に依存せず、客観的に認識されるようになった。自然にも科学的方法が適用され、一八世紀後半の「産業革命」や二〇世紀後半の「情報革命」が引き起こされ、現代の科学技術文明ができていくわけである。

分析と実験を手がかりに、科学は貪欲に知識を求めていった。置き去りになったのは宗教である。しかし本当にそうなのであるか。近代科学技術は私たちに富や利益を与えたが、精神的な価値の喪失が指摘されるように、個々の人々の幸福が増したとはいえなさそうである。

筆者の考えでは、現代では「環境革命」という第六の転換期に入っている。それは近代の科学技術の進歩が生み出した環境破壊や生態系攪乱などの負の要因を取り除き、これからの人類が生き抜いていくために、人間と自然との関係の根本的再調整を行おうとする、現在進行形の変革なのである。

以上のように、人類は東西共通して六つの転換期を経験して今日まで来ているのだが、「精神革命」によって生み出された普遍宗教と、「科学革命」によって形成された近代科学の拮抗は、本質的に残されたままであり、情報通信技術やAI技術の進展にともない、その対立はますます強まっていくように思われる。このことはこの科学技術時代が包含している人類の大きな問題点であり、「環境革命」において、この両者は何らかの統合的視野のもので、融和されねばならない。」

「宗教と科学の拮抗対立」の問題は、実のところ第四段階の精神革命と第五段階の科学革命とがうまく接合されないまま、その対立が今日の第六段階の環境革命のところまで、とり残されている状況とも云える。筆者としては、この環境革命のなかでこそ、両者の融合が可能になると考える。」

「精神革命の最後に出てくる「善」、「仁」、「慈悲」、「愛」は、本質的に云って対人関係の原理である。つまり他者に対するわれわれの生き方の行動を示している。それを筆者は「横への超越」ないし「水平超越」と呼んでおきたい。今日ではこの「横への超越」の対象となる「他者」として「人」だけでなく、「自然」が加わってくることも注目しておかねばならない。人と人の相互関係と、人と自然との相互関係とは同じではないが、ともに「生きもの」の絆を形成するという点では同様である。ここに「横への超越」とは、このような他者との相互関係を自覚し創り上げることを意味している。

ところで精神革命では、このような「横への超越」が「縦への超越」により媒介されていると考えられる。この「縦への超越」には、「上へ」と「下へ」の超越の二つがあり、前者「上への超越」とは「神」への超越であり、後者「下への超越」とは、インドの「空」が中国化された「無」への超越である。キリスト教とイスラム教（その先駆としてのユダヤ教）は前者であり、仏教のあるもの（とくに禅宗）では、インドの「空」が「無」に変容して後者になった。つまり前者では「神が汝を愛したように、汝は隣人を愛しなさい」といふように、人から「神」へと上っていった人と人との関係に移る。後者では人が座禅などにより「無」の境地に下っていった、そこから再び戻って人と人、人と自然とが結ばれる。これが西と東における精神革命の典型的な構造であり、今日でもそのまま持続している。

ここでまず注意しておきたいことは、筆者はこの精神革命の遺産、その「縦への超越の意義」を無視したり、軽視したりしようというのでは決してないということである。否、現在においても、この遺産は貴重なものとして保持され重視される価値をもち、精神革命は人類史における大きな転換点であり続ける。それは科学革命が今日においても大きな歴史的意義をもち、その成果が発展し続けているのと同様である。

しかし問題は、今日の環境革命の時代に、それのみとどまっていてよいのかということである。むしろここでは、従来の考え方を一変させ、人と人、人と自然との横の結びつきこそ実のところ、根源的なものであり、これを実現する「横への超越」のほうが第一次的に重要で、「神」や「無」への「垂直超越」は、この「水平超越」を可能にするために二次的に求められたものだと思え直してみたい。そして今日の文化文明的状況においては、東と西の宗教的対立や、科学と宗教の不毛な拮抗を根本的に超え出てゆく「横への超越」の根源として、「宇宙関連」なるものを、新たに提起しておきたいのである。」

「人と人、人と自然とを結びつけ、「水平超越」を可能とする「宇宙関連」とは、いかなるものであるのか。

それは宇宙のビッグバンから始めて、今日の人類社会ができあがるまでの、素粒子の結びつき。細胞の結びつき、生物相互の結びつきを、人間の結びつきを実現せしめている、あえて大和言葉で言えば、「ともいきのきずな」である。この宇宙的規模での連環の構造は、現在の素粒子論や生命論や生態学、動物行動学、認知科学、脳神経科学。「心の理論」などの発達により、きわめて明らかなものとなりつつある。」

「このように精神革命と科学革命との間に「宇宙関連」という共通事項を導入することにより、この両者の対立面、つまり「宗教」と「科学」の長い根本的対立拮抗をのりこえようというのが (...) 目指すところで、これは筆者が最近たどりついたアイデアなのである。」

「宗教と科学の関係については、前者は「この世界でいかに生きるべきか」を問題とし、後者は「世界がいかにあるか」を研究するものであるとされる。しかも科学が「世界がいかにあるか」を研究するとき、価値中立で客観的であると云われる。たしかに科学は一人よがりのものではなく、他の科学者と成果を分け合う客観的なものであり、やがて人々の間に共有される。しかしその研究はまったく価値中立的であろうか。科学者が自らの研究対象を選択し、その分析に向かうとき、その営為に「価値」を見出す主体的関心が必ずあるはずである。それはその研究に意義ありとするその人の「生き方」と無縁ではあり得ない（これがずれると原爆などがつくられる）。

逆に「いかに生きるべきか」を問う宗教の側は、「この世界がいかにあるか」ということと離れてあり得ないであろう。たんに従来 of 伝統的信条「ドグマ」をかたくなに墨守して、現実の在り方などまったく無縁とするような信仰は、真に力あるものとはならないであろう。

したがって「世界はいかにあるか」という問題と「世界をいかに生きるか」という課題は決して無関係ではない (...)。」

香港出身の哲学者「ユク・ホイ」による
中国思想を踏まえながらの「技術」への問い直しである
テーマは「宇宙技芸」

「宇宙技芸」というのは
「技術的な活動をつうじた、
宇宙の秩序と道徳の秩序の統一」であるという

そしてそれは中国の思想においては
「道」と「器」の再縫合を意味している

『易経』では
「形のない[あるいは形を超える]ものを道
形のある[あるいは形のもとにある]ものを器」と
されているが
ほんらい器は道の端緒であり
「技術」もその視点で
あらたにとらえなおす必要があるというのである

ハイデガーは「技術への問い」を深め
警鐘を発してきたが
これまで「技術」は
西洋の伝統のうえでのみ論じられてきた

「図」と「地」の関係でいえば
「技術」という「図」は
そのすべてが西洋近代という「地」のもとでしか
論じられてこなかった

ユク・ホイはほんらい中国にあったはずの
「地」としての中国の思想をとらえなおし
現在は二重の意味で「根こぎ」にされてしまっている
中国の技術を「宇宙技芸」として再発明するための
提言を行おうとしている

二重の意味で「根こぎ」にされてしまっているというのは
もはや中国の伝統的な「宇宙技芸」にも支えられず
西洋近代の「宇宙技芸」にも支えられていないという
徹底的な「根こぎ」状態となっているということである

■ユク・ホイ (伊勢康平 訳) 『中国における技術への問い/宇宙技芸試論』
(ゲンロン 2022/8)



この「根こぎ」状態は中国だけではなく
世界各国のほとんどの地域での「技術」の現状についても
いえることだろう
各地に根ざした伝統的な「宇宙技芸」は
すでに「地」が働かなくなってしまうため
「図」としては成立しえなくなっているからだ

ユク・ホイの「宇宙技芸」の視点は
人新世としてとらえられるある意味で終末的な時代を
いかに克服するかということにもつながるが
実際的には極めて困難な課題であることはいうまでもない

それは西洋近代によって構築され
ほとんど「地」となってしまっているものを
それぞれの地域において新たなものとして構築し
そこに「宇宙技芸」を成立させるということだからだ

「科学技術」は「グローバリズム」との両輪で
「道」が「器」から切り離されたまま疾駆している
その疾走を変容させることは果たして可能だろうか
「問い」はこうしてはじまったばかりだ

■ユク・ホイ（伊勢康平 訳）『中国における技術への問い／宇宙技芸試論』（ゲンロン 2022/8）

（「序論」より）

「私の意図は、中国や日本、インドやその他の地域には創造と技術にかんする別の神話体系があるというあたりまえの事実を、ただ単に示すことはでない。重要な点はむしろ、これらの神話体系が、それぞれの事例のなかで、神々や技術、人間、そして宇宙のさまざまな関係に対応しつつ、技術に異なる起源を与えているということだ。諸文化間の実践の差異を論じるためになされた人類学上の努力を除き、技術やテクノロジーにかんする言説のなかでは、こうした関係は無視されてきたか、あるいはその影響を考慮されてこなかった。そこで私はつぎのように提唱したい―私たちは、技術性の発生にまつわるさまざまな記述をたどることによってはじめて、異なる「生活形式」について、また技術との異なる関係について語るときに、自分たちがなにを言おうとしているのかを理解できるのである。

技術の概念を相対化する努力は、異なる文化のさまざまな時代における個々の技術的対象もしくは技術システムの先進性を比較するような技術史の研究だけでなく、既存の人類学的なアプローチに対しても異議を唱える。そうした条件は、人間と環境のあいだの決して静的でない関係のなかで表現されるものだ。だから私は、このような技術の概念を宇宙技芸（cosmotechinics）と呼びたいと思う。中国の宇宙技芸のもっとも特徴的な例のひとつは中国医学だ。それは「陰陽」や「五行」、「調和」といった、宇宙論とおなじ原理や用語を使って身体を記述するのである。」

「近代中国史における決定的な瞬間は、十九世紀なかばの二度のアヘン戦争とともに訪れた。この戦争で清王朝はイギリス軍に全面的に敗北する。そして中国は西洋列強の準植民地と化し、近代化へと駆り立てられていったのである。中国人は、敗北のおもな理由のひとつはテクノロジーの競争力がなかったからだと考えた。そのため、かれらは中国と西洋列強の不平等な関係を終わらせたいと願いつつ、とにかくテクノロジーの発展をつうじた急速な近代化が必要だという焦燥感を抱いていた。ところが中国は。当時有力だっや改革主義者が望んでいたような仕方では、西洋のテクノロジーを吸収できなかったのである。それはおもに、テクノロジーに対する無知と誤解のためだった。改革主義者たちは、テクノロジーを単なる道具と理解し、そこから中国の思想―つまり精神―を切り離すことができるだろうという、いま考えるとかなり「デカルト的」に見える信念を抱いていたのだ。言い換えれば、それはテクノロジーという「囿」を輸入、実装しても、中国思想という「地」は影響を受けず無傷のまままでいられるという信念である。

だがその反対に、結局テクノロジーはその手の二元論を残らず打ち碎き、みずからを囿というより地として構成してきた。」

（「第1部 中国における技術の思想を求めて」より）

「中国的な思考のなかで、道は技術や道具にかんする一切の思考よりも上位にあり、技術的対象の限界を超えることを、つまりその指針となることを目的としている。一方古代ギリシア人、少なくともアリストテレス主義者は、目的を達成するための手段であるテクネーという、より道具的な概念を持っていたようだ。だが、プラトンの場合はやや複雑である。

（…）

プラトンはテクネーの意味に重要な変更をくわえ、アレテーという別の語と深く関連づけた。この語は一般的には「卓越性」を、特定の文脈では「徳」を意味する。」

「器の空間的なたちは、四方に形式を押しつけるという意味で、技術的な性質もっている。たとえば『易経』の注釈である繫辞上傳には、「形のない〔あるいは形を超える〕ものを道といい、形のある〔あるいは形のもとにある〕ものを器という」と書かれてある。さらに、おなじテキストには「あらわれるものがあれば、それを象といい、形があれば、それを器という」とある。」

「この道と器の関係を扱うなかでこそ、中国における技術哲学はあらためて定式化されるだろう。とここでこの関係は、さきほど論じたテクネーとアレテーの関係と少々似ている。だがそこには大きなちがいもある。道と器の関係はもうひとつの、いやむしろ異なる宇宙技芸を示しているのだ。それは宇宙と道徳の有機的なまじわりにもとづく調和を探索するのである。中国の技術哲学者・李三虎の『伝統を語りなおす―全体論的な皮革技術哲学の研究』は、中国と西洋がもつ技術の思想の真の対話を追求し、器と道の言説へと回帰するよう求めた最初の試みだと誇張なしにいえる、じつんび素晴らしい著作だ。そこで李が示そうとしているのは、器はその原初的（つまり位相的かつ空間的）な意味において道の端緒だということである。そのため、中国の技術の思想は、（本来ひとつであった）器と道がふたたび統合してひとつになる（道器合一）ような全体論的な視座を構築してゆく。ゆえに、道と器というこの基本的な哲学的カテゴリーは分割不可能なのだ。道が知覚可能なかたちであられるためには器に載せられる必要があり、他方で器は（道家思想で言う）真なるものや、また（儒学で言う）聖なるものとなるために道を必要とする。（…）道は器に作用して、器に当てはめられた機能的な決めごとを喪失させるのである。」

（「第2部 テクノロジーへの意識と近代性」より）

「かつて中国の社会や政治の生活を統御していた伝統的な形而上学や道徳的宇宙論は、近代になって破壊された。その後みずからの伝統に固有であり、なおかつ西洋の科学とテクノロジーにも適合するような根底の再構成が試みられたものの、そらは思惑とは逆の効果しか生まなかった。最終的に、ハイデガーがヨーロッパにおけるさし迫った危機として予期していた―だがアジアにおいてはるかにすさまじい速度で進行した―「根こぎ」（Entwurzelung）が生じたのである。」

「道と器の関係は、テクノロジーのシステムが導入した新しいリズムのもとで崩壊してしまった。つい「夜が迫ったいる」というハイデガーの言葉を、ここで繰り返したくなってしまう。じっさい、いま目につくものといえば、伝統の消失と、文化産業であれ観光であれ、浅はかな文化遺産の市場化ばかりなのだ。くわえて、この国の景気向上のただなかに、ひとつの終わりが到来しつつあることを感じるひともいるだろう。この終わりは、人新世というあらたな状況のなかで現実となるのである。」

「いま「中華未来主義」と呼べるものがさまざまな領域に姿をあらわしつつある。だがそれは、道徳的宇宙技芸の思考とは逆方向に進んでいる。結局のところ、それはヨーロッパ的な近代のプロジェクトの加速にすぎない。」

「本書で試みたのは、中国哲学を単なる道徳哲学とみなす慣習的な読解から脱却するための第一歩を踏み出すこと、そして中国哲学を宇宙技芸として再評価し、伝統的な形而上学のカテゴリーを私たちと同時代のものとして提示することだった。それにくわえて、私がめざしたのは、還元しえないさまざまな形而上学的カテゴリーから構成される、いくつもの宇宙技芸としての技術の概念を切り開くことである。宇宙技芸の立場にたって近代的なテクノロジーを取り戻すためには、ふたつの段階が必要になる。まずは、本書で試みたように、器道の関係などの根本的な形而上学的カテゴリーをひとつの根底として設計しなおすこと。それから、この根底のうえでエピステーメーを再構築することだ。このエピステーメーは、もはや単なる模倣や反復とはならないように、翻って技術の発明や発展、革新の条件を既定してゆくだろう。」

（中島隆博「解説「宇宙技芸」の再発明」より）

「技術への問いを今日いかにして問うのか。ユク・ホイはそれをハイデガーとともに始める。しかし、そのハイデガーこそ「形而上学的ファシズム」を体現し、ハイデガーを読解した京都学派に「形而上学的ファシズム」を伝染させた哲学者である。そうであれば、技術への問いは、どうしてもハイデガーとは異なるオルタナティブな道に向かわなければならない。それこそが「宇宙技芸 cosmotechinics」という耳慣れない複合語が開こうとする道である。

ハイデガーの「技術への問い」（一九五三年）において、技術の本質とされたのはGe-stellである。本書では「集立」という直訳調の訳語が採用されているが、「縦張り立ての体制」という近年の訳語のほうがイメージしやすいだろう。それは、人間を駆り立てて、自然を用立てる対象（「用象」）として利用し尽くしたり、「在庫」化したりするものだ。さらにそれだけにとどまらず、人間自身を人的資源のように用立てる対象にまでしてしまうのである。ホイはこのGe-stellとしての技術を決してみくびってはならないと考えている。技術は単なる道具ではなく、わたしたちの生や存在のあり方を根底的に条件づけているものだからだ。言い換えれば、技術への問いは、生や生存への問いに先立つほどなのだ。

とはいえ、他方で、技術は生や生存を含めた人間の全体的な位置づけのなかで可能になるものでもある。技術だけが人間のあり方を規定するわけではなく、人間のあり方もまた技術を規定しているのだ。その人間の全体的な位置づけこそ、「宇宙 cosmos」という概念でホイが述べようとするものだ。技術は「宇宙技芸」というより広い文脈で考察されなければならない。そうすることによって、Ge-stellにのみ帰着するような技術ではない、別の技術のあり方が展望される。これこそが本書でホイが探求しようとする方向性である。」

「ホイは予備的な定義として、「宇宙技芸」とは、技術的な活動をつうじた、宇宙の秩序と道徳の秩序の統一である」と述べる。（…）

技術はそれぞれの文化が有する宇宙論に規定されている。もしそうであるのならば、Ge-stellとしての技術を規定している西洋近代の宇宙論に代えて、新しい宇宙論を提示することで、別の技術を考えることができるはずだ。たとえば、中国の宇宙論を刷新することで、新しい「宇宙技芸」を発明できるのではないか。」

「（ホイは）「問題は西洋自体のよしあしではなく、そもそも中国に西洋文明を取り込む能力があるのかどうかではないか」と問いかけたのだ。「西洋文明」すなわち西洋近代の宇宙論とそれに裏打ちされた技術を、中国は取り込むことができないのではないのか。その証拠に、西洋近代が問うた「技術への問い」を、中国は前近代はもちろんのこと、近代においても、さらには現代においても問うことすらできていないのではないか。

そうであるなら、現代の中国における技術は、中国の伝統的な「宇宙技芸」にも支えられておらず、また西洋近代の「宇宙技芸」にも支えられていない、徹底的な「根こぎ」状態で展開していることになうr。徹底的と述べたのは、この「根こぎ」が二重であるからだ。すなわち、Ge-stellとしての技術はそれ事態が「根こぎ」すなわち「生活形式の断片化」を引き起こすのだが、「技術への問い」すら立てられない中国においては、「根こぎ」を反問する契機もなしに、「根こぎ」になっているからだ。」

「ホイの戦略は、「技術への問い」を中国においても問い直し、西洋近代の「宇宙技芸」を乗り越えて、二重の「根こぎ」を脱出するような、新たな「宇宙技芸」を再発明することである。言うまでもないが、これはきわめて困難な道である。」

《目次》

日本語版へのまえがき
まえがき
年表 本書に登場する東西の思想家

序論

- プロメテウスの生成
- 宇宙・宇宙論・宇宙技芸
- テクノロジーによる断絶と形而上学的統

《目次》

日本語版へのまえがき

まえがき

年表 本書に登場する東西の思想家

序論

- 1 プロメテウスの生成
- 2 宇宙・宇宙論・宇宙技芸
- 3 テクノロジーによる断絶と形而上学的統一
- 4 近代性・近代化・技術性
- 5 何のための「存在論的転回」か？
- 6 方法にかんする諸注意

第1部 中国における技術の思想を求めて

- 7 道（ダオ）と宇宙——道徳の原理
- 8 暴力としてのテクネー
- 9 調和と天
- 10 道と器（チィ）——自由と対する徳
- 10・1 道家における器と道——庖丁（ほうてい）の牛刀
- 10・2 儒家における器と道——礼の復興
- 10・3 ストア派と道家の宇宙技芸にかんする見解
- 11 抵抗としての器道——唐代の古文運動
- 12 初期の宋明理学における気の唯物的理論
- 13 明の宋応星（そうおうせい）の百科事典における器道
- 14 章学誠（しょうがくせい）と道の歴史的対象化
- 15 アヘン戦争後に起きた器と道の断絶
- 16 器道の関係の崩壊
- 16・1 張君勱——科学と人生観の問題
- 16・2 中国本位的文化建設宣言とその批判
- 17 ニーダムの問い
- 18 牟宗三（ぼうそうさん）の応答
- 18・1 牟宗三によるカントの知的直観の独自解釈
- 18・2 牟宗三による良知の自己否定
- 19 自然弁証法と形而上学（シンアルシャンシュエ）の終わり

第2部 テクノロジーへの意識と近代性

- 20 幾何学と時間
- 20・1 古代中国には幾何学がなかった
- 20・2 幾何学化と時間化
- 20・3 幾何学と宇宙論的特殊性
- 21 テクノロジーへの意識と近代性
- 22 近代の記憶
- 23 ニヒリズムと近代
- 24 近代の超克
- 25 ポストモダンの想起（アナムネーシス）
- 26 故郷回帰のジレンマ
- 27 人新世における中華未来主義
- 28 もうひとつの世界史のために

解説 「宇宙技芸」の再発明 中島隆博

訳者あとがき

索引

○著者 ユク・ホイ（YUK HUI）

香港出身の哲学者。「哲学と技術のリサーチネットワーク」主宰。ロイファナ大学リユーネブルク校でハビリタツィオン（教授資格）を取得。現在、中国美術学院および香港城市大学創意媒体学院にて教鞭を執る。著書に『デジタルオブジェクトの存在について』（2016年、未邦訳）、『再帰性と偶然性』（2019年、邦訳は青土社、2022年）、『芸術と宇宙技芸』（2021年、未邦訳）。『ゲンロン』に「芸術と宇宙技芸」を連載。

○訳者 伊勢康平（いせ・こうへい）

1995年京都生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在籍。専門は中国近現代の思想など。翻訳に王暁明「ふたつの『改革』とその文化的含意」（『現代中国』2019年号所収）、ユク・ホイ「百年の危機」（「webゲンロン」、2020年）、「21世紀のサイバネティクス」（「哲学と技術のリサーチネットワーク」、2020年）ほか。

ロマの言語「ロマニ語」を専門とする角悠介による
ルーマニアを拠点にして
ロマニ語話者に教を乞いながら
「ロマ」をめぐる冒険をする話

ベラルーシで「ジプシー・ショー」の
ギター演奏をしているイヴァンのロマ語方言世界では
「明日」と「昨日」も同じ「タスヤ」
「さきほど」と「のちほど」も同じ「ハラ」
過去・未来にかかわらず
「今」から同じだけ離れた時間帯が同じ単語で表現される

すべてのロマ語がそうだというわけではないようだが
この時間感覚は「今の今を生きる」という
ロマ特有の世界観を象徴しているようだ

ロマニ語の辞書には
「危険な」という形容詞が載っていないとのことだが
「対象がどうかではなく、
対象に対して自分がどう感じるかが重要」なので
表現することはできても
それは「ロマニ語らしくない」と感じるのだという

またロマに「ご職業は？」と尋ねると
具体的な職業名では答えず
「～を作っている」や「歌っている」というように
動詞で答えることが多いが
ロマにとって重要なのは
「何者でいるか」よりも「何をしているか」であって
「定義された世界」を生きてはいないからだ

ロマの「プロフィール欄」には空白が多いというが
「定義」されたかたちで
みずからのアイデンティティを示す必要がないからだろう
「誰からどんな名前を呼ばれようと、
「自分は自分、ロマはロマ」に決まっている」

言語学者が記録した角悠介の「ロマニ・コード」は
「毎日笑え、泣け、話せ、愛せ、怒れ、歌え、踊れ」である

■角 悠介『ロマニ・コード／謎の民族「ロマ」をめぐる冒険』
(夜間飛行 2022/9)

そして「ロマの大半は特に何も考えていない」
「毎日激しく生き、死んだように眠る」
「死んだように眠ったら、生き返ったように目覚める」

管理社会化が進行し
ルールや境界にがんじがらめになり
ますます息苦しくなりながら
みずからを「定義」しないではいられない病に
慢性的に冒されている現代人にとって
ロマというボーダーレスな存在は大きなアンチテーゼでもある

いやアンチテーゼであるというような「定義」は余計だ
「定義」から自由になって生きることの可能性を問うのがいい

いろんな肩書きで埋め尽くし
権威づけるような「自分は〇〇」は不用だ
プロフィールは「自分は自分」だけでいい



■角 悠介『ロマニ・コード／謎の民族「ロマ」をめぐる冒険』（夜間飛行　2022/9）

（「まえがき／言語学者とロマ民族のアカデコミックな現場」より）

「ロマに限らず、人は皆本来「明日をも知れぬ身」なのである。しかし我々は、明日を知らぬとも今日という日を知っている。だから同じことの繰り返しのように見える毎日を異なる一日として迎え、日々学び、そして人との出会いを「次はなし」と覚悟して臨むべきなのだ。

そして私は知っている。ロマの大半は特に何も考えていないことを。彼らは毎日激しく生き、死んだように眠る。死んだように眠ったら、生き返ったように目覚める。だから毎日笑え、泣け、話せ、愛せ、怒れ、歌え、踊れ！これが言語学者が記録した「ロマニ・コード」である。」

（「まえがき／ようこそ、アカデコミックな世界へ」より）

「私の専門はロマの言語「ロマニ語」の研究である。私は、世界でもっともロマニ語話者の人口が多いルーマニアを拠点にして、ロマニ語話者あるところどこへでも行き、誰からも平等に教えを乞う。思い出話も、愛のささやきも、脅迫も真っ赤な嘘も、それがロマニ語で語られるのであれば私にとってすべて平等の価値を持つ。」

（「まだまだ本編が始まらない　第2章」～「「昨日」と「明日」は同じ？」より）

「その日、私はイヴァンに使用頻度の高い単語の聞き取りをしていた。「『明日』はロマニ語で何と言うか」とベラルーシ語交じりのロシア語で聞いた。

「タスヤ」

（…）

「では、『昨日』は？」

「タスヤ」

待て待て、「タスヤ」は「明日」ではなかったか？私はイヴァンにもう一度確認したが、やはり「昨日」も「タスヤ」らしい。

そう、不思議なことに彼のロマ語方言世界では「明日」と「昨日」は同一の概念であり、どちらも「タスヤ」で表されるのである。これだけではない。イヴァンの方言では、「さきほど」と「のちほど」も「ハラ」という語彙で示されるのだ。過去・未来に拘わらず、「今」から同じだけ離れた時間帯を同一の単語で表現するというには非常に興味深い。「今の今を生きる」という彼らの哲学を反映しているのだろうか。おもしろいことに、インドで話されている「ヒンディー語」でも「明日」と「昨日」は単一の単語で示されるらしい。だが、すべてのロマが、イヴァンや「ヒンディー語話者」と同じ時間感覚を持っているわけではない、他のロマ語方言では「昨日」と「明日」に異なる語彙が用いられる。

余談になるが、昔「危険な」という形容詞がロマニ語の辞書に載っていなかったので、ゾリに尋ねたことがあった。ゾリは少し考えて「こわいよ〜！」と言った。対象がどうかではなく、対象に対して自分がどう感じるかが重要なのだ。ロマニ語で「危険な」という形容詞を表現できないことはない。しかし、それをロマは「ロマニ語らしくない」と感じるのである。

言語には民族の生活や文化、そして「物事の捉え方」が強く反映される。さまざまな言語を学びかじってきたが、特にロマニ語の場合、他のヨーロッパ言語からの直訳が難しい状況が多い。イヴァンのロマニ語は多くの外来語に頼っており、やや語彙に乏しい印象があるが、放浪ロマ独特の世界観は非常によく保たれている。

例えば「『ドイツに行く』はなんとというか」とイヴァンに聞けば、「『ドイツ人たちのもとへ行く』」と答える。何百年も放浪生活を送ってきたロマに国境などない。そこにドイツ人がいるから行くのだ。では、もしドイツ人がいなければ、そこには何があるのだろうか。正解は「野原」とか「森」とか「道」の類である。「国」は彼らにとって「青春」と同じくくらい抽象的な概念なのである。

「『朝ご飯』は？」と尋ねれば、「テントを張って寝て起きて、近くの村に仕事に行くなり恵んでもらうなりして、そこではじめて食事にありつけるのだから、『朝ご飯』だ『昼ご飯だなどという単語がない。腹が減ったから食う。食えたら食う、あるのは『食事』という単語だけだ」と返される。

彼らには生物としての人間の感覚がしっかり残っていて。それが言語に反映されている。私は最初、ロマノ感覚が特殊なのかと思ったが、よく考えるとおなしいのは自分の方であった。いつからか〇時を「明日」になると決めつけ、国境をまたぐと別世界になると思い込み、定期的にも食事をとるようになったのか。また、ロマに「ご職業は？」と尋ねると、「～屋です」ではなく「～を作っている」や「歌っている」というように、動詞で答えることが多い。彼らにとって重要なのは「何者でいるか」よりも「何をしているか」である。私はずっと「定義された世界」を生きてきた。それは一種の「仮想世界」であり、彼らが生きる「実世界」とは異なるものであった。成績だとか肩書きだとか、見えないものに一喜一憂する我々の姿は、彼らの目にはさぞ滑稽に映っているのだろう。

このように、我々と大きく異なる感覚を持ち、異なる世界感で生きる人間は、ジャングルの奥地や孤島や砂漠を探せばいくらでもいるだろう。しかし、ロマの面白いところは、そんな遠い所でなく、彼らがしれっと他の民俗の間で生活しているところにある。ロマはそれぞれが住む国や地域の言葉を話し、さも同じような感覚を持っているかのようにふるまっているが、実は己の感覚でまったく違う世界を生活している。家や国を基軸に生活する我々の間で、ロマは地球のど真ん中に中心軸を隠してボーダーレスに生活しているのだ。

かつて、物心ついたときにはどこかで馬車に揺られていた放浪ロマ。旅の始まりも、終着点も、独自の国籍もない。彼らの「プロフィール欄」には空白が多い。しかし、たくさんの言葉で定義されなくても、今ここに身体がある。自分を感じる。そして、「感覚」に従い「定義」に振り回されない彼らのアイデンティティは決して揺らぐことはない。誰からどんな名前を呼ばれようと、「自分は自分、ロマはロマ」に決まっている。そんな彼らは自分を見失わない。いや、むしろ、「自分を見失えない」のである。「放浪の民」とっては「自分探しの旅」など迷世い言であり、正気の沙汰ではないだろう。」

<p>◎目次</p>
<p>まえがき――言語学者とロマ民族のアカデコミックな現場 ようこそ、アカデコミックな世界へ</p>
<p>●まえがきの続きのような　第1章</p>

インドよりさらに東から来た男
千夜一夜自己語り/ルーマニア留学のススメ/「ロマ」、「ツィガン」、「ジブシー」/「ロマ」と「ガヂェ」/「ロマ学」と「ジブシー学」/触れてはならぬ者/栄養不足の先生/誕生日と悲痛な一言/「黄金の手」と呼ばれる男/ロマニ語の父/「あんたのブリバシャは誰だい？」…etc.

<p>●まだまだ本編が始まらない　第2章</p>
<p>ロマは自分を見失えない ベラルーシのちっちゃいおっさん/「昨日」と「明日」は同じ？</p>
<p>●いよいよ本編!？らしき第　3章</p>

<p>あれもロマ、これもロマ</p>
<p>ロマとトランシルバニア ドラキュラ伯爵/大人の隠れ家</p>
<p>ロマと食 箸もフォークも使わない/ハリネズミを食べ……るない! /「清浄」と「不浄」</p>

<p>ロマと住まい やっぱりお家がいちばん!//パイプの人/テントという「寝間着」に包まれて/そびえ立つ富の象徴「ロマ御殿」</p>
<p>ロマと病 所詮都会のもやしっ子/九つの病魔</p>

<p>ロマと魔術</p>

「『朝ご飯』は？」と尋ねれば、「テントを張って寝て起きて、近くの村に仕事に行くなり恵んでもらうなりして、そこではじめて食事にありつけるのだから、『朝ご飯』だ『昼ご飯だなどという単語がない。腹が減ったから食う。食えたら食う、あるのは『食事』という単語だけだ」と返される。

彼らには生物としての人間の感覚がしっかり残っていて。それが言語に反映されている。私は最初、ロマノ感覚が特殊なのかと思ったが、よく考えるとおなしいのは自分の方であった。いつからか○時を「明日」になると決めつけ、国境をまたぐと別世界になると思い込み、定期的にも食事をとるようになったのか。また、ロマに「ご職業は？」と尋ねると、「～屋です」ではなく「～を作っている」や「歌っている」というように、動詞で答えることが多い。彼らにとって重要なのは「何者でいるか」よりも「何をしているか」である。私はずっと「定義された世界」を生きてきた。それは一種の「仮想世界」であり、彼らが生きる「実世界」とは異なるものであった。成績だとか肩書きだとか、見えないものに一喜一憂する我々の姿は、彼らの目にはさぞ滑稽に映っているのだろう。

このように、我々と大きく異なる感覚を持ち、異なる世界感で生きる人間は、ジャングルの奥地や孤島や砂漠を探せばいくらでもいるだろう。しかし、ロマの面白いところは、そんな遠い所でなく、彼らがしれっと他の民俗の間で生活しているところにある。ロマはそれぞれが住む国や地域の言葉話し、さも同じような感覚を持っているかのようにふるまっているが、実は己の感覚でまったく違う世界を生きている。家や国を基軸に生活する我々の間で、ロマは地球のど真ん中に中心軸を隠してボーダーレスに生きているのだ。

かつて、物心ついたときにはどこかで馬車に揺られていた放浪ロマ。旅の始まりも、終着点も、独自の国籍もない。彼らの「プロフィール欄」には空白が多い。しかし、たくさんの言葉で定義されなくても、今ここに身体がある。自分を感じる。そして、「感覚」に従い「定義」に振り回されない彼らのアイデンティティは決して揺らぐことはない。誰からどんな名前を呼ばれようと、「自分は自分、ロマはロマ」に決まっている。そんな彼らは自分を見失わない。いや、むしろ、「自分を見失えない」のである。「放浪の民」とっては「自分探しの旅」など世迷い言であり、正気の沙汰ではないだろう。」

<p>◎目次</p>
<p>まえがき――言語学者とロマ民族のアカデコミックな現場 ようこそ、アカデコミックな世界へ</p>
<p>●まえがきの続きのような　第1章</p>

インドよりさらに東から来た男
千夜一夜自己語り/ルーマニア留学のススメ/「ロマ」、「ツィガン」、「ジプシー」/「ロマ」と「ガチェ」/「ロマ学」と「ジプシー学」/触れてはならぬ者/栄養不足の先生/誕生日と悲痛な一言/「黄金の手」と呼ばれる男/ロマニ語の父/「あんたのブリバシャは誰だい？」…etc.

<p>●まだまだ本編が始まらない　第2章</p>
<p>ロマは自分を見失えない ベラルーシのちっちゃいおっさん/「昨日」と「明日」は同じ？</p>
<p>●いよいよ本編！？らしき第　3章</p>

<p>あれもロマ、これもロマ</p>
<p>ロマとトランシルバニア ドラキュラ伯爵/大人の隠れ家</p>
<p>ロマと食 箸もフォークも使わない/ハリネズミを食べ……るない！/「清浄」と「不浄」</p>

ロマと住まい
やっぱりお家がいちばん！/パイプの人/テントという「寝間着」に包まれて/そびえ立つ富の象徴「ロマ御殿」

<p>ロマと病 所詮都会のもやしっ子/九つの病魔</p>
<p>ロマと魔術 文学少年のほうгомテる/カエルと郷愁/翌朝、ミハイは死体で発見されたetc.</p>

<p>ロマと司法 王様と寄り合い/望むところで切るがい/ロマは隣人の一人</p>
<p>ロマと差別 半非ロマ/絶対に触れてはいけない話題/凍りついた教室で</p>

<p>ロマと犬 檻の中のジプシー/犬派？猫派？/忠実な怪物「犬男」/ロマニ語がわかる犬 etc.</p>
<p>ロマと秘密諜報員 トリップする女と男/「六階」の記憶/開かない正門</p>

<p>ロマと酒 「どのように生きているか？」/大怪獣サマゴン/酒とバーニャと湖の夢etc.</p>
<p>ロマと戦争 馬車から戦車へ/撃たれてみるのが一番だ/空爆の記憶/老兵は死なず</p>

<p>ロマと奇談 トランシルバニアの呪われた森/災いをもたらす「ムロ」</p>
<p>ロマと先生 インド人の死因/離婚すべきか/神さまに喜ばれる人/まるで、そして物乞いetc.</p>

<p>ロマと踊り 私をもっともふさわしい/ロマの武術/血で踊るのだetc.</p>
<p>ロマと冬 スニェグーラチカ(雪娘)への手紙/ベシペンにいた男/聞き取れない祈り/大怪獣サマゴンの逆襲</p>

<p>ロマと新天地 あなたがもしドイツへ来たら/待っていた暴力/聞き取れない祈り/優しいピエロ/悲しい現実etc.</p>
<p>あとがき これで最後のあとがき――最終試験</p>

創業140周年を迎えるカウントダウン企画として16号限定で季刊誌『スピン/spin』が創刊されたがそこには「日常に「読書」の「葉」を」とある

なぜスピンの葉なのか
恩田陸による「創刊エッセイ」によれば
(それではじめて知ったのだが)

スピン (spin) はもちろん回転・旋回することだが製本における「専門用語」で洋装本で本の背表紙の上部に付けられている「葉しおりとして用いるひも」のことだという

しかしスピンを「葉ひも」の意味で使うのは日本だけなぜそう呼ばれるようになったのかはわからないようだたとえば葉のことを英語ではブックマークという

ちなみに「スピン/spin」というタイトルは恩田陸がつけたとのことそのことについて「創刊エッセイ」のなかでなぜスピンと呼ばれるようになったのかについて「未読の場合スピンは、本の中にくるっと丸めて収められている」ことから「製本中にスピンを丸める行為から「スピン」と呼ばれるようになったんじゃないかなるか」と想像したりもしている

そしてここからが面白いのだが「本来挟んで「静止させておく」葉が、本を作る人にとっては、「動かさず、回転させる」もの」なのだ

「じっとしている時こそ、大いに「動いて」いる」そんな「両義的な意味が込められている」というわけだ

なかなか深い(ような気がする)

ところでほんらいの「スピン」は回転だがサルには見られず類人猿の子供に見られる遊びにぐるぐるとスピン(回転)する「ピルエット」というのがあるという

そういえば振り返ってみると小さなころなにかうれしくなるとぐるぐると回転したり走り回っていた記憶がある

- 『スピン/spin 第1号』
(河出書房新社 2022/9)



霊長類学者の山極壽一の寄稿しているエッセイによれば人類が二足歩行をするようになった理由のひとつにそうした「踊る身体」の獲得がありそれが言語にむすびつき「他者と共鳴する身体を獲得した」のだという

スピンして他者と共鳴する・・・

表紙裏にポール・コックスという画家の絵・文が掲載されているが彼はスピンという言葉で「渦」を連想しトリュフォーの映画『突然炎の如く』でジャンヌ・モローが歌う「Le Tourbillon De La Vie (つむじ風)」を思い出したという

人生の渦のなかで
くるくる回り続けた
二人抱き合って

葉ひものスピンの「両義性」でいえば読書という身体が動かないときにこそ心はつむじ風のように渦巻き情熱的に踊っているともいえそうだ

雑誌『スピン/spin』も静かな行為としての読書のなかで情熱的なスピンのつむじ風になりますように

- 『スピン／spin 第1号』
(河出書房新社 2022/9)

(ポール・コックス 訳=伏見操)

「『スピン (spin) 』という言葉に、ぼくは「tourbillonnement (渦)」を連想し、トリュフォーの映画『突然炎のごとく』で、ジャンヌ・モローが歌う「Le Tourbillon De La Vie (つむじ風)」を思い出しました。

人生の渦のなかで
くるくる回り続けた
二人抱き合って

二人の間にある空白は、燃える情熱を表す唐辛子のようでもあるし、フランス語で「籠に入った愛」とも呼ばれる。ほおずきのようにもあります。」

([創刊エッセイ] 恩田陸「スピン／s p i n」より)

「本の装幀というものに長らく興味を持っていて、ブックデザインの本を集めるようになり、帯、見返し、化粧扉、小口、花布など、いろいろな用語を覚えた。それらは感覚的に理解できる納得のネーミングだったが、ひとつだけ謎の用語があった

「スピン」である。本のてっぺんに付いている、葉の紐。なんだってまた、布のひょろっとした紐が「スピン」なの？

通常、「スピン」といえば、「回転」のほうだと思うだろう。フィギュアスケートの「ビールマンスピン」とか「レイバックスピン」とか、氷上で選手がくるくる回っているところが目に浮かぶ。あるいは、爆走するF1マシンがコーナーを曲がり切れずにスピンしてクラッシュ、とか。少なくとも、本の葉は顔に浮かばないし、実際、これは日本独自の呼び方で、しかもなぜそう呼ばれるようになったのかは不詳だというのである。

最近になって、ふと思いついたのは、未読の場合スピンは、本の中にくるっと丸めて収められていることだ。スピンの外に出ていれば、それは読書中というサイン。昔は製本のほとんどの行程を手作業で行っていたらうし、もしかして、製本中にスピンを丸める行為から「スピン」と呼ばれるようになったんじゃないだろうか。「それ、スピンしといて」なんて指示していたりして。本来挟んで「静止させておく」葉が、本を作る人にとっては、「動かず、回転させる」ものである、というところが面白い。

人間はぼーっとしている時に、最も活発に脳が活動しているのだそう。じっとしている時こそ、大いに「動いて」いる。「スピン」という言葉に、日本ではそういう両義的な意味が込められているのだと思うと、ちょっと愉快的気持ちになる。」

([特別寄稿 山極壽一「踊る人類」～「類人猿の遊び、ピルエット」より)

「類人猿の子供特有の遊びに、ピルエットがある。

ピルエットとはぐるぐるとスピン(回転)することだ。この遊びはサルには見られず、類人猿にしか見られない。社会学者のロジェ・カイヨワが分類した四つの遊びの中で最も自由な、浮遊感に満たされた冒険的な緊張に包まれる遊びで、類人猿が人間に向かうにつれてこの遊びは拡大し、ダンスという音楽的な才能と結びついていった。私は人類が直立二足歩行を始めた理由の一つに、この「踊る身体」の獲得があったと考えている。

二足で経つと支店が上がり、上半身と下半身が別々に動くので、ぐるぐる回ってダンスを踊れるようになる。四足歩行だと手に力が入り、腕に圧力がかかって自由に声を発することができない。しかし上半身がその圧力から解放されると喉頭が下がって様々な声を出せるようになる。そうやって人間は音楽的な発生が可能になり。最終的には言葉に結びついていく。言葉を獲得する以前の意味にならない音楽的な声と踊れる音楽的な身体が組み合わさり、人類は他者と共鳴する身体を獲得した。この身体の共鳴こそが共感力の始まりで、そこから人間は共感力を高め、社会の力を拡大していった。」

書き上げた論文が却下されたことから

「なぜ〈です・ます〉で論文を書いてはならないのか?」と問うことから

〈である体〉による〈である世界〉と
〈です・ます体〉による〈です・ます世界〉という
全く異なった二つの世界像=哲学原理を論じることへと向かう

こうしてネット上で書くときにも

〈である体〉にするか
〈です・ます体〉にするかを
迷うことはよくある

基本としてこうした記事のように

特定の二人称に向かって語るのではないときは

〈である体〉を用い
コメントに答えるときなど
特定の二人称に対して語るときには
〈です・ます体〉を用いるようにするが
特定の二人称に語るのではないときにも
ときに〈です・ます体〉のほうが書きやすいこともある

おそらく著者が論文を〈です・ます体〉で書いたのも
内容が〈である体〉の表現よりも
フィットする内容だったからなのかもしれない

ところで〈である体〉も〈です・ます体〉も
つくられた表現である

どちらも「元々は話し言葉だったものを書き言葉にした」
「いわゆる言文一致」ではない
まず基本的にそのことを理解する必要がある
〈です・ます体〉が言文一致であり
〈である体〉がそうでないという違いが問題なのではない

その違いは著者が本書を書くにあたって

当初考えていたタイトル

「世界〈から／に〉」あなたを〈取り除く／取り戻す〉
に表現されている

- 平尾昌宏『日本語からの哲学
／なぜ〈です・ます〉で論文を書いてはならないのか?』
(犀の教室 Liberal Arts Lab 晶文社 2022/9)

〈である体〉は世界からあなたを取り除き
〈です・ます体〉は世界にあなたを取り戻すということ

「〈である世界〉の場合、そこには語り手に向かってく
他者、二人称の他者は存在しないが、
〈です・ます体〉においては、
世界はまさしく二人称の他者を含み、
奥行きを持つことになる」のである

このように「です・ます」と「である」の違いには
人称世界の有り様が深く関わっている

著者が〈です・ます体〉で論文を書こうとしたのは
「二人称の他者を含み、奥行きを持」たせることで
それに適した内容を語ろうとしたのかもしれない

しかし論文における〈です・ます体〉が却下されたのは
客観的に記述し得ない
不透明な世界を避けるよう指示したかったというよりも
おそらく制度的な慣習に従っていない
という理由からだったのだろう
論文とはそういうものだ
という慣習はやはり強固だろうから



■平尾昌宏『日本語からの哲学／なぜ〈です・ます〉で論文を書いてはならないのか?』

(『犀の教室 Liberal Arts Lab 晶文社 2022/9])

(「まえがき」より)

「本書は（自分でも驚くのだが）日本語の「です・ます」と「である」について、ただそれだけを論じた本である。だが、その結果として（これも驚いたことに）全く異なった二つの世界像に到達する。そこで私自身はこの本に、その二つの世界像を示唆するため、「世界〈から／に〉」あなたを〈取り除く／取り戻す〉というタイトルを附けた。だが、タイトルとしては長すぎるというので却下された。お説もっともであるが残念である。」

(「第1部 問題編」～「第3章〈です・ます〉肯定論」より)

「『いわゆる言文一致』は当時に話されていた話し言葉をそのまま書き言葉として採用することではなかった。つまり〈である〉も〈だ〉も〈です・ます〉も、それら全てが「元々は話し言葉だったものを書き言葉にしたもの」ではない、ということである。それらは全て、清水（康行）の言葉を借りれば、「日常の〈話しことば〉の世界とは離れた」ものとして「創出」された「独自の新しい〈文章語〉なのである。」

(「第3部 日本語からの哲学編」～「第13章 文体から原理へ、学問経由」より)

「〈である体〉は一つの制度である。そして、それと並ぶ文体である以上、〈です・ます〉もやはり一つの制度だと見ることはできるはずである。しかし、どうもそうではないらしい。〈である体〉が一つの明確な制度であるとすれば、〈です・ます体〉の方は、いわばそうした制度を崩してしまうような働きをするのである。それというのも、〈です・ます体〉が常に、制度の外部としての他者を内部に含んでいるからである。」

「〈である体〉と〈です・ます体〉は、それぞれに全く異なった世界を描く。それぞれの描く世界を、〈である世界〉と〈です・ます世界〉と呼ぶとすれば、すでにここで〈である体〉と〈です・ます体〉は、そうした二つの世界を生み出すものである以上、単なる文体ではなく。それ自体原理である。

そして、その最も本質的な差異は、二つの文体が二人称の読者を認めるか認めないかであった。〈である世界〉は二人称の読者となる「あなた」がいては成り立たない。この世界が成り立つためには、「あなた」は抹消されねばならないのである*。一方。〈です・ます世界〉が成り立つには、二人称の「あなた」が存在する必要がある。それゆえ、〈である世界〉と〈です・ます世界〉はそれぞれ、「二人称のあなたのいない世界」と「二人称のあなたのいる世界」だと言える。

そして〈である原理〉と〈です・ます原理〉とは、それぞれ「二人称のあなたを抹消する」働きと「二人称のあなたを導入する」働きのことであると考えることができる。

我々は、一人称、二人称、三人称という人称の概念によって欺かれているところがある。数字を付されることで、この三つの人称は横並びのように見えてしまう。だが、そんなことはありえない。三つの人称があるのではない。人称の関係から成る、二つの異なった世界があるのである。」

「*より厳密に言うなら、ここでは抹消される必要があるのは、著者である一人称複数と読者である二人称との間の他者性それ自体であると言うことができる。」

(「第3部 日本語からの哲学編」～「第15章 世界内の構成要素」より)

「我々の日常的な意識では、語り手、ないし一人称となる「私」がます存在し、それが時に〈です・ます体〉で語ったり、〈である体〉で語ったりするように見えるかもしれない。しかしこうした見方は全く疑わしい。〈である体〉で語る語り手にとって、世界は第三人称として、すなわち客観的に記述し得る透明な世界として現れてきているのに対して、〈です・ます体〉で語る語り手にとって世界すなわち〈です・ます体〉は、それ自体が不透明なものとして現れてくることになる。なぜなら、〈である世界〉の場合、そこには語り手に向かってくる他者、二人称の他者は存在しないが、〈です・ます体〉においては、世界はまさしく二人称の他者を含み、奥行きを持つことになるからである。

このように考えるなら、見通しうる透明な世界に確固とした主観＝主体として対峙する〈である世界〉の「私」と、不透明な世界に巻き込まれた〈です・ます世界〉の「私」とは、同じ一人称でも全く異なるものであると言わざるを得ない。」

(「第4部 異論と展開編」～「第20章 制度と間」より)

「『なぜ論文に〈です・ます体〉を用いてはなたないか』という問題は、〈である体〉と〈です・ます体〉を原理として取り出した今となっては、出発点でしかない。しかし、この初発の問題に戻るためには、〈です・ます体〉の特徴を明らかにするために役立つ。」

「私は、論文は必ず〈である体〉で書かねばならないとは思わないが、確かに〈である体〉がふさわしいような論文のあり方が考えられるとは思う。〈です・ます世界〉が一人称＝書き手と二人称＝読み手がメインの世界であったのに対して、〈である世界〉では、二人称が背景に退き、もしくは一人称に同化する。その代わりに浮かび上がってくるのが三人称の対象である。そこでは、語られている対象が既にであることが前提になっている。」

【目次】

まえがき

■第1部 問題編

第1章 なぜこんな問題を考えるか

第2章 なぜ論文を〈です・ます〉で書いてはならないのか

第3章 〈です・ます〉肯定論

■第2部 日本語学・国語学編

第4章 「女子ども向き」説

[ノート1]〈です・ます〉とケア

第5章 「話し言葉」説

第6章 「敬語」説

[ノート2]人称詞と敬語

第7章 モダリティ

[ノート3]言語と主観性

第8章 待遇表現論

第9章 文体論

■第3部 日本語からの哲学編

第10章 〈です・ます体〉から〈である体〉へ

[ノート4]〈だ体〉の問題

第11章 〈である体〉の人称的構造

第12章 〈です・ます体〉の人称的構造

[ノート5]文体、ジャンル、混用

第13章 文体から原理へ、学問経由

[ノート6]〈である原理〉と正義

第14章 〈です・ます世界〉と〈である世界〉

第15章 世界内の構成要素

■第4部 異論と展開編

第16章 文体と原理

第17章 二分法を超えて

第18章 我と汝、我とそれ

第19章 生成

第20章 制度と間

[ノート7]愛とケア

結びに代えて

あとがき

付録1 日本語と哲学、従来の研究

付録2 「ですゲーム」、あるいは哲学者たちの文体